

289-R97ㄣ



1200500732354



始



289
R97

大畏良寛



相馬御風著

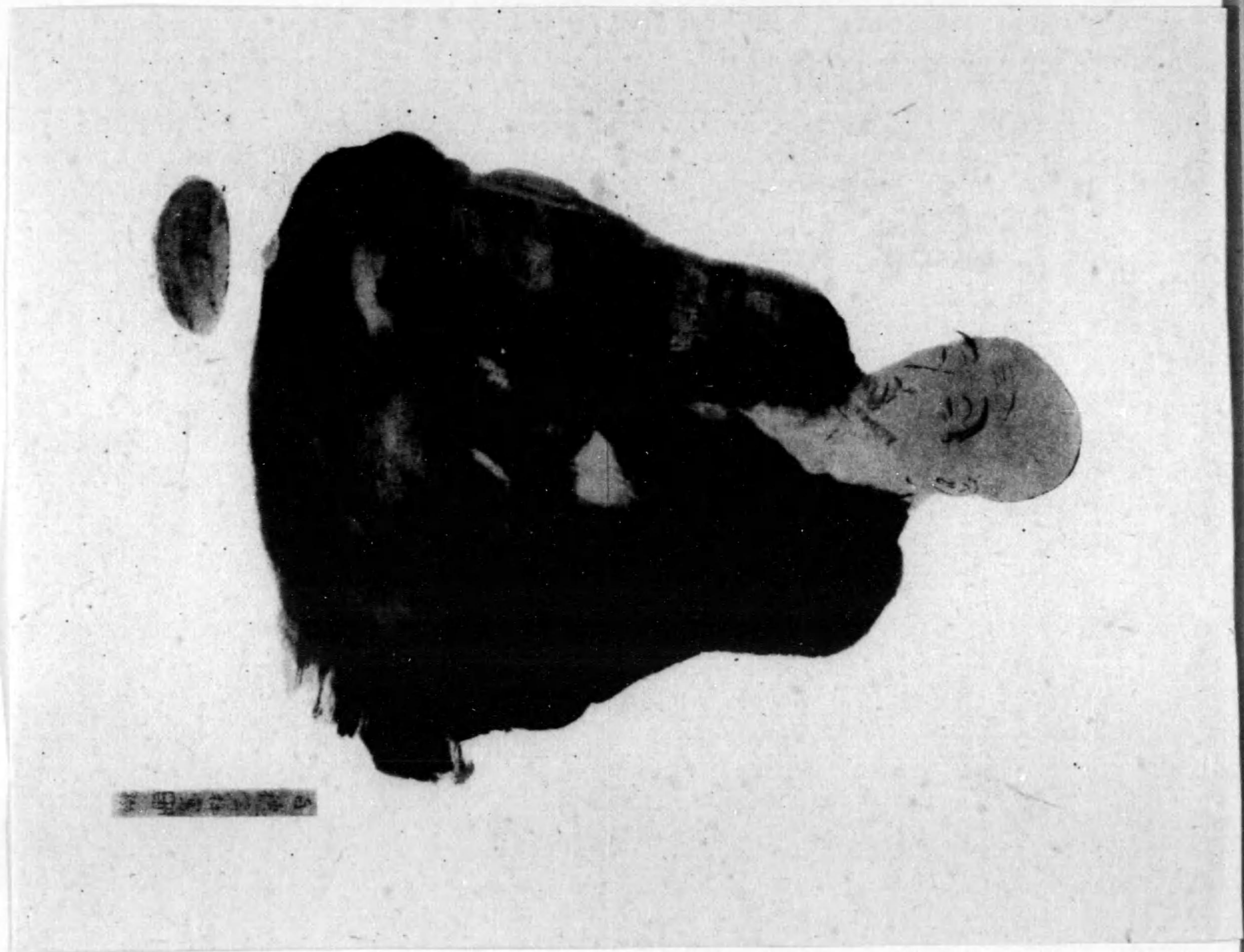


大正八年

秋

林氏

國立圖書館
昭和 23.4.10 和
購入



新里國中附屬

國立中央圖書館

植物標本

國立圖
昭 23.4
購

緒言

◇本書は主として良寛和尚の「人」としての方面の私の貧しい研究と味索との結果を纏めたもので、先頃公にした「良寛和尚詩歌集」と姉妹篇たるべきものである。

◇本書は良寛和尚と云ふ一個の人物の生涯や人格をどうしたらば明らかに世に傳へることが出来ようかと云ふ目的によつてよりも、むしろ私一個の修業を目的としての研究が私みづからの爲めになつた如く、多少とも之れを讀んでくださる人々の爲めになることがありとすれば、それは私にとりては更に新たな歡びたるべきである。

◇そんな風で、私が良寛和尚の生活と藝術との研究にとりかゝつたのは、もと／＼私一個のための仕事に過ぎなかつたのであるが、その結果の一端を斯うして文章に綴つて世間へ出すやうになつたのは、主として松木徳聚、山崎良平二氏の懇切なる勸奨と指導と鞭撻とのたまものである。私は今謹んで此の貧しい一卷を兩氏に獻する事によつて私の感謝の意を表する次第である。

◇なほ私の此の研究の爲めに多大の教示又は便宜を與へられた佐佐木信綱、安田靱彦、藤

井界雄、小林二郎、佐藤吉太郎、片山三男三、解良淳二郎、故阿部桓次郎、木村周作、原田勘平、備中法輪寺住職、高橋重四郎、牧江文之丞、稻葉仁作、井上源太、根津庸策の諸氏に向つて、深く感謝しなければならぬ。

◇本書を草するに當つて参考した著書並に文書類のうち最も重要なものは左の如くである。

○西郡久吾氏編述北越沙門良寛全集傳人 ○小林榮樓氏著『彌彦神社附國上と良寛』○齋藤茂吉氏著『短歌私抄』及び『續短歌私抄』○小林二郎氏編『僧良寛詩集』及び其の附録山崎良平氏著『大愚良寛』○小林氏編『僧良寛歌集』○大宮季貞氏『沙門良寛和歌集』○良寛會發行『良寛全集』及び『良寛墨跡』○村山半牧編『良寛歌集』○崑崙橋茂世著『北越奇談』○東松露香著『俳諧寺一茶』○北越史料出雲崎○今泉木舌氏編『北越名流遺芳』○近世偉人傳○大日本人名辭書○大日本佛家人名辭典○帝國人名辭典○大日本地名辭書その他數種（以上刊行本）

○解良榮重編『良寛禪師奇話』○牧江靖齋筆寫『沙門良寛師歌集』○同上『良寛禪師詩集』○同上『國上萬元和尚歌集』○新潟縣三島郡桐島村字島崎木村周作氏所藏良寛遺墨及び關係文書類○同上西蒲原郡國上村渡部阿部家所藏同上○同上國上村字牧ヶ花解良淳

二郎氏所藏同上○同上字中島原田勘平氏所藏同上○同上粟生津村鈴木時之介氏所藏鈴木文臺文書○同上同村鈴木宗久氏所藏良寛遺墨○新潟市小林二郎氏所藏同上及び關係書類○三島郡出雲崎町佐藤吉太郎氏編『出雲崎編年史』草稿○同上島井家所藏橋屋對出雲町民訴訟關係書類○北越新報所載今泉木舌、原田勘平諸氏の良寛に關する文章○西頸城郡糸魚川町牧江文之丞氏所藏良寛關係文書○碑文數種○諸家所藏良寛遺墨及び良寛に關係ある人々の文書遺墨等若干（以上未刊行草稿その他）

◇良寛に關する私の研究は決して之れで終つたとは思つてゐない。或は諸賢の教示により、或はさまざまの新材料によりて、將來ますます忠實な攻究を續けて行きたいと思つてゐる。良寛その人については無論のこと、彼を中心として集つてゐた少數の特色ある人々の生活や藝術の研究の如きも、是非ともやらなければならぬことだと思つてゐる。切に諸賢の教示を懇願する次第である。

◇本書巻頭に掲げた良寛像は平福百穂氏が私の切なる願望を容れられて特に苦心揮毫してくださいつたものである。私は此の貧弱な著述が之れによつて光彩を得た事は誠に歡喜に堪へない。謹んで茲に感謝の意を表する次第である。

大正七年四月二十六日

越後糸魚川直指禪院の一室に於て

相馬御風記

大愚良寛 目次

緒論	一
出生——幼少時代	九
出家	二五
修學時代	四九
父の死と彼の轉機	六三
徹底期の良寛	八三
良寛の藝術——歌、詩及び書	一一
晩年及び死	二二
逸話	三四
良寛の眞生命	六八
附録	
良寛遺跡巡り	一七
良寛和尚の庵跡をたづぬる記	二五

緒

論

越後の僧良寛の名が、單に郷土的偉人としてのそれ以上の意味で廣い世間の人々の間に云々されるやうになつたのは、至極最近の事に屬する。併し稀有な彼の人格と藝術との價値は、既に彼の生前から直接彼と相知つて居た少數の人々及びそれらの人々を通じて間接に彼を知つた狭い範圍の人々から認められ貴ばれて居た。その間の事情は彼の最も永く住んで居た越後の國上山を中心とした、かなり廣い範圍の地方に今日なほ廣く傳へられて居る多くの口碑に徴しても、亦彼と直接關係のあつたその地方の多くの舊家に傳へられてあるさまざまの文書記録等について見ても、明かに知り得るところである。だが、特に廣く世間一般へ良寛と云ふ一個稀有なる人格を知らしめる目的を以て彼の名の録されたのは、自分の寡聞内では文化八年即ち良寛五十五歳の年に江戸で出版された『北越奇談』と題する書物中の記事が最初であるやうに思はれる。此の『北越奇談』と云ふ書物は、越後三條の人岡崖橋茂世の著で、柳亭種彦が序文を書き、葛飾北齋が挿畫を描いて居る。良寛の事は、全部で六冊ある其の書の第六卷目の人物の部に國上山國上寺中興の名僧萬元和尚の事蹟を誌した條に併せ録してある。その全文は次の如くである。

「萬元和尚は越國の産にあらずといへども、雲上山國上寺中興にして即此山に寂す實は皇都の産にして、やんごとなき御種にわたらせられ給ふよし、即自述においの寢覺といへる書あり、甚麗雅なる文體にして、奇説尤おほしといへども入寂の後誰ありて梓に上すものあらず、誰渠がもとに其艸稿の寫しのみ残り、予が家にも即萬元和尚自筆の艸稿一冊を祕藏せり、追て書林にあらはさんと欲す、扱て萬元和尚博學大德詩を賦し和歌を詠じ且滑稽を好んで狂歌俳諧をよくす生涯の奇事甚だ多し即國上山阿彌陀堂を建立し山中清寥の地をえらんで隱居せり、名付けて五合庵と稱す、松竹緑をまじへ石徑苔厚く遙かに人跡を隔て誠に遠公支遁が興知る可し。

さてかの五合庵に近ごろ一奇僧を住す、了寛道僧と號す、人皆其無欲清塵外施俗の奇を賞する所なり、即出雲崎橋氏某の長子にして家富門葉廣し始め名は文孝、其友富取、笹川、彦山等と共に岑子陽先生に學ぶこと總て六年、後禪僧に隨て諸國に遊歴す、その出るとき書を遺して中子に家祿をゆづり去て數年高門を絶す、後海濱郷本といへる所に空庵ありしが、一夕旅僧一人來つて隣家に申し彼空庵に宿す、翌日近村に托鉢して其日の食に足るときは即歸る、食あまる時には乞食鳥獸にわかち與ふ、如此事半年、諸人其奇を稱し道徳を尊んで衣服を送るものあり、即ちうけてあまるものはまた寒子にあたふ、其居出雲崎を去る事僅に三里、時に知る人なり必橋氏某ならんことを以て予が兄彦山に告ぐ、彦山即郷本の海濱に尋てかの空庵を窺ふに不居、唯柴扉鎖すことなく、藜蘿相まとふのみ、内に入りて是を見れば机上一硯筆、爐中土鍋一つあり、壁上皆詩を題しぬ、これを

讀むに塵外仙客の情おのづから胸中清月のおもひを生ず、其筆蹟まがふ所なき文孝なりしかば是を隣人に告て歸る、隣人即出雲崎に言を寄す、爰に家人出で來り相伴ひてかへらんとすれども、了寛不隨、衣食を贈れども用ゆる所なしとして其の餘りを返す、後行く所を知らず、年を経てかの五合庵に住す、平日の行皆如此、實に近世の道僧なるべし」

『良寛』の名を『了寛』と書きちがへるほどに良寛その人とは縁遠くあつた此の著者の如きをすらもかくまでに動かすところのあつた事實について見ても、良寛の稀有なる人格が當時既に地方の識者間に最も興味深き話題の一つとなつて居た事は疑ふべくもない。而もそれは今日廣い世間の人々の間に良寛の名が持つて囃される如く、彼の詩や、歌や、書を通じてではなくして、直ちに生ける良寛その人の人格に關してであつた事も特に注意し置くべき事實である。

此の事實を更に一層明らかに示してゐる記録は、良寛その人の最愛の、而して唯一人の女弟子であつた貞心と云ふ尼が天保六年即ち良寛の死後四年を隔てた年の五月一日に書いたと云ふ良寛歌集『はちすの露』の序文である。

「良寛禪師と聞えしは、出雲崎なる橋氏の太郎のぬしにておはしけるが十八歳といふ年に、かしらおろし給ひて、備中の國玉島なる圓通寺の和尚國仙といふ大徳の聖のおはしけるを師となして、年ごろ其處に物し玉ひしとぞ、又、世に其名聞えたる人々をばをちこちとなくあまねく尋ねとふらひて、國々にすぎやうし玉ふ事はたとせばかりにして、遂に其道の奥をきはめつくしてのち、故里へ

かへり給ふといへども、更に住む所を定めず、こゝかしこと物し玉ひしが、後は國上の山に上り、自ら水汲み薪を拾ひて行ひすませ玉ふ事三十年とか、島崎の里なる木村何がしといふものかの道徳をしたひて親しく参りかよひけるが、齡たけ給ひて山かげにたゞ一人物し玉ふ事の、いと覺束なふ思ひ給へらるゝを、よそに見過しまらせむも心にうければ、おのが家居のかたへに、いさゝかなる庵のあきたるが侍れば、かしこにわたり玉ひてむや、よろづは己がもとより物し奉らむとそゝのかし参らするに、如何か覺しけむ、稻舟のいなとも宣はず、其處にうつろひ給ひてより、主いとまめやかに後見聞えければ、せじも心安しとよろこほひ給ひしに其年より六とせといふ年のはじめの方、遂に世を去り給ひぬ。

かく世はなれたる御身にしもさすがに月花の情はすて玉はず、よろづの事につけ折にふれては、歌よみ詩つくりて其心ざしをのべ給ひぬ、されど是らの事をむねとし玉はねば、誰によりて問ひ學びもし玉はず、只道の心をたねとしてぞ詠み出で給ひぬる、其うたの様、自ら古の手振にて姿言葉もたくみならねど、丈高く調なだらかにして大方の歌よみの際にはあらず、長歌みじか歌とさまざま有るが中には、時にとり物にたはぶれてよみ捨て玉へる事も有れど、それだによの常の歌とは同じからず、殊に釋教は更にも云はず、又月の兔、鉢の子、白かみ、など詠み玉ふもあはれたふとく、打ちずしぬれば自ら心の濁も清まり行く心地なむせらるべき、此道に心有らむ人、此歌を見る事を得て心に疑ふ事あらずは、何の幸か是に過ぎんや……後略……。

これは良寛の歌を世に紹介しようとしてなされた最初の企てであり、且は良寛の歌の價值について世間に向つて示された最初の批判であると云つてよいのであるが、しかもそれすら謂ふところの歌人としての良寛を世に持て囃せんが爲めの企てとなかつた事は、如上の序文によつて充分明らかである。即ち「かく世はなれたる御身にしもさすがに月花の情はすて給はず、よろづの事につけ折にふれては、歌よみ詩つくりて其心ざしをのべ給ひぬ、されど是らの事をむねとし給はねば、誰によりて問ひ學びもし玉はず、只道の心をたねとしてぞ詠み出で給ひぬる」と云つた風に、それはむしろ單に良寛その人の人格の光輝を傳へんが爲めの企てに外ならなかつたと見るべきである。

併しながら、此の貞心尼の如く深い愛慕の心を以て良寛その人の人格の内部までも入り込んだ人は、その當時と雖も甚だ少數であつて、多くの人は——自ら良寛の崇敬者を以て任じてゐた人達でも——良寛を以て一個超越的な非凡人とのみ見做して居た事は明かである。前に掲げた『北越奇談』の著者の所謂「奇僧」としての解釋が、おそらく其の當時に於ける世間の人々の良寛に對する定説であつたらうと思はれる。いや、それは單にその當時に於てのみでなく、永く——今日に至るまでも——後人の良寛に對する定評となつて來たのである。而もかうした特殊の人格としての良寛の面目をいよ／＼と鮮やかにせんが爲めに、幾多の誇張した、若くは附會した臆説さへもいつとなく捏出され、人口に膾炙されるやうにさへなつたのである。此事は良寛の如何なる人であつたかを知らんが爲めに『大日本人名辭書』とか、『帝國人名辭典』とか、『日本佛家人名辭典』とか云つたやうな書物を

緝く人々の誰もが、先づぶつかるころの事實である。

ところで斯くの如く一個の奇僧として、永い間不可思議な假空的人格を世間から附與されて來た良寛は、近年になつて廣い範圍の人々から、いつとはなしに卓越せる一個の歌人として、詩人として、更に書家として認識され、賞讃されるやうになつて來た。此の點についてはかの江戸の學者龜田鵬齋が、文化年間北越に遊んだ折に、良寛の書を見て大いに驚き、其の居を訪ねて親しく談を交へた後人に語つて『我れ草法に於て又一格を長ず』と云つて喜び、更に『彼は實に喜撰以後の一人者である』と良寛その人を賞揚したと云ふやうな風説の傳播に一層の熱を得て、書家として歌人として又詩人としての良寛に對する尊重の度が、少なくとも其の郷國に於ける識者間に、彼の生前から既にかなり高度に達してゐた事が知られるけれども、而も到底今日のその如く廣く且高いものでなかつた事も亦疑ふべくもないのである。良寛と時を同じうして彼の住んでゐた國上山に近い粟生津と云ふところに在つて、當時此の地方の最も傑出した儒者として廣く尊敬されて居た鈴木文臺は、草堂集と題する良寛の詩集の序文の中で次の如く云つてゐる。

「余嘗曰師必可傳有三、而道德不與焉、寒山拾得之詩、懷素高閑之書、師皆兼有之、而加以和歌不墜萬葉之遺響、余此言恐可謂公言也」

おそらく之れが良寛の藝術についてなされた其の當時に於ける最高の讃辭だつたであらう。而も斯くの如き鑑賞眼を以て良寛の藝術に對して居た者は、當時果して幾人あつたであらうか。

いづれにしても最近に至つて不思議にも歌人として、詩人として、又書家としての良寛の名が、廣い世間の人々からますます盛に持て囃される傾きのあることは、誠に歎ぶべきことである。かくの如くして永い間單に一個の郷土的偉人としてのみ尊崇されて來た良寛は、つひによく一般的認識を博し得るのであるが、而もそれと同時に吾々はかくの如き事そのことがいつかは却て良寛その人の眞面目を蔽ひ去り、若くは歪め損するに至るやうな事がないかを危ぶまないでは居られぬのである。今や彼の詩は、歌は、書は、いづれも異常な世間の好尚を博せんとしつゝある、しかも良寛みづからは如何。彼はむしろ『余に三嫌あり、料理人の料理、歌よみの歌又は詩人の詩、及び書家の書之れなり』かう高言して憚らなかつた彼ではなかつたか。

しからば、良寛は世の所謂宗教家であつたか。云ふまでもなく彼は一個の僧侶であり、禪道の修業者であつた。しかし、彼は世の一般の佛僧の如くみづからの爲めの寺院と名のつくものは生涯を通じて唯一つだに持たなかつた。更に若し彼と最も親しく交つて居た少數者の一人であつた解良榮重の手記中の事實にして信すべくば、彼は又他人に向つて信仰を勧め法を説き經文を教へることすらもなかつたと云ふ事である。而も其の赴く所能く人をして和せしめ、その語る所平談俗語能く人の心を純化し得て餘りあつたと云ふ——これ抑々何故であるか。

こんな風に考へると、良寛と云ふ人格がますます理解しにくいものとなつて來るのである。そこで人々は、つとめて彼を一個超越的人格たらしめんが爲めに、強ひて異常なる逸事逸話を彼に附會して

喜んで居る。しかし果して世俗傳ふるが如き奇僧奇人の稱呼に價する如き特色が、眞に彼の本來の面目であつたらうか。此の疑問について考ふるに先立つて、吾々は何よりも先づ良寛その人が努めて自ら求めず進んで自ら韜晦して居た人であつた事を、いやが上にも深く吾々自ら心に確めて置かななくてはならぬ。

生涯懶立身、騰々任天真、囊中三升米、爐邊一束薪、誰知迷悟跡、

何問名利塵、夜雨草庵裡、雙脚等閑伸。

霞立つながき春日をこどもらと手まりつきつつ今日もくらしつ

かくの如く彼は實に世の所謂「無用なる敗殘の遁隱者」の部類に加へらるべき人物に外ならなかつた。而して、

何故に世をすてしぞとをりくはこゝろに恥ぢよすみぞめの袖

かう常に戒しめ鞭うたないでは居られなかつた程に、彼は一路たゞ自己の遁世の意義の完成に向つて精進しつゝあつたのである。而も尙斯くの如き韜晦的、隱遁的、回避的生活を營みつゞけた良寛其人の人格と藝術とが、今日の吾々の心胸にしかく切實なる響を傳へると云ふのは、是また何故であるか。

これを要するに、良寛と云ふ一個の人物の生活と藝術と思想との鑑賞と味索とは、今日吾々にとりて最も興味深き仕事の一つであるばかりでなく、その効果は單に良寛と云ふ一個の人格の史實を明

らかにする以上、更に深い、更に貴い何ものかの闡明でなければならぬと思ふ。しかし、良寛そもそも何者ぞ——此の問ひに答へる前に、吾々は先づ吾々みづからが良寛その人から受けた感激の深さと意味とを、吾々自らの心にたしかめねばならぬ。而して後に初めて吾々は空間に描き出された良寛と云ふ一個の人物を、吾々みづからの心のうちに寫し取ることが出来るのである。

以上の如き意味に於て私の良寛研究は決して歌人としてとか、詩人としてとか、書家としてとか、乃至は佛家としてとか云ふ方面での良寛の研究ではなくして、むしろ廣い意味での一個の人間としての良寛その人の生活、思想、乃至藝術に對する私の接觸についての反省考察に過ぎないのである。言ひかへれば良寛と言ふ一個の人物の生活と、藝術とに對する接觸から受けた私みづからの感激の深さと意味とを、私自身の心に私みづからたしかめて見る爲めの小さな努力に過ぎないのである。或は私はかうした私自身の計畫の下に於ても、なほ此の種の研究の陥り易い煩瑣なる考證詮索の末に拘泥し過ぎてゐる點があるかも知れない。けれども私自身では努めて謂ふところの考證の爲めの考證や詮索のための詮索には囚はれないやうにしてゐる積りである。むしろさうした迂遠に見える些末な詮索のうちにも、私は私にとりての感激の泉を見のがすまいとしてゐるのである。

出生——幼少時代

越後出雲崎に家號を橋屋と云つて、代々名主と神官とを兼ねて來た舊家があつた。(今日なほ此の家系は續いてゐる)苗字を山本と云つた。家譜によると「山本氏、姓は橋にして諸兄公に出づ、諸兄の子泰仁、泰明あり、泰明の子泰則、泰教あり、泰教の子に泰長、泰純、泰實あり、泰實は第五男にして山本中納言と稱す、大同元年丙戌十月十日薨、是れ山本氏の祖なり」(西郡久吾氏編「沙門良寛全傳」)と云ふことであつた。家寶の一つとして日野資朝が佐渡へ配流の途中宿泊した紀念に残して行つたと傳ふる短冊が一葉秘藏されてゐた。歌は「忘るなよほどは波路をへだつともかはらず匂ひやどの橋」と云ふので、橋屋と云ふ家號はこゝから出たのだとも云はれて居た。そんな風でいつ何處からどうして此の土地に住居を定めるやうになつたかは正確に知れては居なかつたけれども、兎に角此の家が随分と遠い昔から此の地方での名門として尊敬されて來たことは明らかであつた。しかし、さうした立派な家閥でありながら、昔からこれと云つて際立つた人材を一人も出さなかつた。或はその事が却て此の家の無事に永く續いて來た一半の原因を成すものであつたかも知れぬ。

ところが、天明寛政の頃に至つて、突如として此の家から毛色の變つた一個の人物が現れ出た。しかも彼は養子であつた。先代は新左衛門と云つたが、子女いづれも天死したので、外孫に當る佐渡相川町の同族橋屋山本庄兵衛の長女秀子を養女とし、後與板町の割元荒木氏與五右衛門の第三子左門と云ふを貰ひ受け、之れを秀子に配した。左門は通稱で、また伊織とも云ひ、名は泰雄、號を以南と云つた。私が今毛色の變つた人物と云つたのは、此の以南のことであつて、更に此の以南がそれよりも

一層烈しく毛色の變つた人物即ち大愚良寛の父なのである。彼が橋屋へ入婿したのは、寶曆四年だと推定されてゐる。そして同九年に彼は養父の職を繼いで、里正兼神職となつた。しかし、彼には代々の祖先がして來たやうに、單に家閥の職を安らかに保守してゐるだけでは満足することの出來ない烈しい心血が、いつとなしに内部に燃え上りつゝあつた。此の血を彼はどう云ふ系統を通して享けて來たかは解らない。又それが如何なる外部からの刺戟によつて燃焼されたものであるかも知れない。しかもなほ彼が安全第一の世襲生活裡にのみ没頭してゐることの出來ない或物を心中に貯へて居た事は極めて明らかなる事實である。天明六年彼が家職を次男由之に讓つて隱居するや、彼の抱懐せる心熱は日を追うていよ／＼顯著に彼を動かすに至つたらしく、寛政三年三月即ち五十六歳の春彼はつひに意を決して京都に走つた。彼の抱懐せる或物は、茲に至つて初めて明らかなる形を取つて現れた。彼はみづから勤王憂國の志士を以て任ずるに至つた。彼の懷ろには「天真錄」と題する慷慨悲憤の一書が、天下の公論に點火するの機を待ちつゝ秘せられてゐた。しかもつひにそれは明るみへすらも持ち出されず終らなければならぬ運命を擔つて居た。さらでだに峻嚴なる幕府の偵察物色は、此の顯れざる憂國の一隱士に對してさへ、一身を京師に置くことすらも能くさせなかつた。滿腔の悲憤を抱いた彼は、つひに寛政七年七月二十五日、

天真佛の告によりて身を桂川にすつ

蘇迷廬の山をしるしに立ておけばわがなきあとはいつらむかしぞ

と短冊に書いた辭世の言葉を遺して、身を洛西桂川の流に投じた。

彼は又生前久しく尾張の俳人久村曉臺、その他を師友として俳句和歌の創作や研究に従ひ、就中俳句の方面では當時の斯界から相當に認められてゐた。けれども

燎のかけほのぐらしさくらばな

星ひとつ流れて寒しうみのうへ

せゝらぎの分け行くばかりけさの雪

朝霧に一段ひくし合歡の花

夜の霜身のなる果やつたよりも

まき竹のほぐれて月の朧かな

君戀し露の椎柴折敷きて

ほとゝぎす見果てぬ夢のあとつげよ

等の諸句に於けるが如く、彼の藝術的自己表現のうちにかの熾烈な憂國的熱情などの閃めきさへ見えないで、むしろ靜かに自然と人生との寂寥味を味はひつゝ生きて居た一個のやさしい抒情詩人を見出すのは何故であらうか。「せゝらぎ」「朝霧」「夜の霜」等の句を以て、「雄渾、崇高、凡俗の企及すべからざる格調氣韻あり」と評した『良寛全傳』の編者の如き人もあるけれども、それはあまりに人物そのものゝ先入印象に囚はれ過ぎた判斷であつて、正直に此等の句だけを讀む人には誰にで

も感じられるのは先づその辭寂味ではないだらうか。

かう見て來ると以南その人の人格に二つの相矛盾した傾向が烈しく闘つて居たことが觀取される。即ちそれは志士の熱情と、禪的若くは俳味的詩情とである。前者は即ち現實的執着であつて、後者は即ち超現實的解脱欲である。而してそのいづれが果して眞の彼の中心自我たるべきであつたかは容易に判じ難いとしても、兎に角彼が此の二つの心的傾向の争鬪の犠牲となつて、仆れたものであることは、明らかに認め得る。よし彼が彼の辭世の言葉の示す如く桂川に身を投じて自殺をとげたのが事實であつたとしても、又よし『良寛全傳』の編者等の推定する如く彼の辭世詞は彼がたゞ一時を韜晦せんが爲めの計策に外ならずして、彼が京師を遁れて高野山に隱遁し、靜かに餘生を送り得たと云ふのが事實であつたとしても、私達には矢張如上の内の事實が鮮やかに認められるのである。けれども『良寛全傳』の編者西郡久吾氏はかう云つてゐる。

「橋屋は累代莊官兼神職の家閥なるに、以南に至りて勤王憂國の志士を出したるは、國典の研究によりて大義名分を明瞭にし、又家閥の薰化によりて悲憤慷慨を生じたるものにして誠に似つかはしと云ふ可し」

これによつて見ると、以南が憂國の志士として越後出雲崎の橋屋から出たのは、彼自身の國典研究と橋屋の家閥そのものゝ薰化の然らしむるのであつて、その他にはこれと云つて掲ぐべき何等有力な原因又は動機又は影響がないかの如く思はれるが、果してそれだけの解釋で充分だらうか。

更に又『彌彦神社附國上と良寛』の著者小林榮樓氏は次の如く論じて居る。

「以南、驛傳の老隱居として深く皇典に通じ、和歌を江戸の人太村光枝に學び、俳諧は尾張の人久村曉臺を友とし、並に造詣あり、性勤樸にして惇雅、平常人を教ふるに躬行實踐を以てし最も虚榮浮華の流俗を慨せりと、此の如きは好し、彼の家門が千有餘年來の由緒を傲り、尋常一様の町家に非ずとするも、萬事階級制度より割出して行事を決定したる徳川時代に在りては極めて出來過ぎなることに屬す、果然彼は學術中毒の弊に陥り、草莽に横議して皇運の凌措を憂ひたるのみか、晩年には親しく京師に上り、傳手を求めて雲上公卿の間に斡旋し、愈々益々憤慨措く能はず、竟に心血を濾して慷慨の書『天真錄』を編む、然れども時人の顧みざるや止むなくそを抱いて洛西の桂川に溺れ其人と其言と皆當世に朽ち了んぬ」

此の二氏の評語は、私達に誠に興味の深い對照を示して居る。同じく以南が勤王憂國の志士として越後出雲崎の橋屋と云ふ舊家から出たことを題目としながら、前者は之れを「誠に似つかはしい事だ」と云ひ、後者は之れを「學問中毒の弊に陥つた以ての外のことだ」と断定してゐる。

しかしながら、以南その人の行動に關する此の全く相容れない二つの解釋の生ずるに至つた事そのことこそ、むしろ私達には最も自然な事なのである。たゞ二氏とも其の斷定を敢てするに際して、いづれも以南その人と家閥との關係のみに重きを置いて、その他の更に重大なる條件即ち以南その人の性情及びその時代の社會狀態との關係についての考覈のなかつた點が、私達には甚だしく慥らない思

ひを起させるだけである。

そこで私は先づ以南の生れ合せた時代の概況を茲で考へて見たい。以南の生れたのは元文元年で、桂川へ身を投じたと云はれるのは寛政七年であるから、彼が最も著しく自己の生活上に影響を受けた時代は寶曆、明和、安永、天明等の年號を以て録された時代で、即ち謂ふ所の田沼時代であつた。而して田沼時代の如何なる時代であつたかは、之れを國定教科書について見てさへ次の如く書いてある。

「十代將軍家治の時に至り、執政の臣その人を得ず、賄賂公けに行はれて政治正しからず、人民大に窘めり。加之暴風洪水などの天災荐に至り、饑饉も亦相次ぎしかば、貧民諸所に騷擾し、遂に江戸の市中にも暴民の蜂起を見るに至れり」

之れを更に『田沼時代』と題する興味の豊かな、材料の豊富な、觀察の卓抜な研究録について、著者辻善之助氏の擧げた此の時代の最も顯著な現象を數へて見ると、一、田沼の專權、二、役人の不正、三、士風の廢弛、四、風俗淫靡、五、天災地妖、六、百姓町人の騷動、七、財政究迫と貨幣新鑄、八、開發と運上等で此等は總て此時代の暗黒面を示すものであると著者は云つてゐる。「併しなから」と更に此の著者は云ふ。「吾人は此暗黒の間に於て一道の光明の閃くものゝあるのを認める。それは即ち此時代に於ける新氣運の潮流である」と。而してその所謂新氣運の重要な徴候として著者の説いてゐるところを數へ擧げると、一、民意の伸長、二、因襲主義の破壊、三、思想の自由と學

問藝術の發達等である。

既に社會全體に互つて斯くの如き氣運が動いて居た事が事實であるとすれば、よし其の身は北越邊土の「驛傳の老隱居」であつたにしても身を挺して愛國の志に殉じようとした以南の行動を以て、必ずしも「學問中毒の弊に陥つた」以ての外のことばかり斷じ去る事は出来ないと同時に、時勢の影響を外にして之れを偏に彼が國典の研究と家閥の薰化とのみに歸する譯にも行かない。所詮は此の時代の暗黒面が刺戟せる憂憤と光明面が喚起せる求望とが何等かの形に於て内部的に彼を動かす力とならないでは措かなかつたに違ひない。まして彼に先んじて同じ郷國から竹内式部の如き熱誠剛毅な志士が現れて、夙く既に當時の社會に目ざましい波動を捲起して行つた事があまりに鮮やかな事實である以上、以南があゝの行動は又必ずしも内部からのみの方に歸することは出来ないのである。

かくの如く以南が愛國の志に殉じようとしたあの犠牲的行動の必然性を認めながらも、なほ且つ私達は前にも述べた如く、彼のあの悲壯なる最後を以つて、彼の内部に相闘ひつゝあつた二個の全く異つた力の慘ましい矛盾に基くものであつたと観ないでは居られぬのは、主として私達の心に映じ來る彼の人格に因るものである。私達は勤王愛國の志士としての彼、時代の革新者として立つた彼の覺悟を以て、必ずしも彼としての自己欺瞞的行動であつたとはしないが、併し彼の素質が果してよく斯くの如き生活に適合して居たかどうかと云ふ事については、私達は甚大なる疑ひを禁じ得ないものである。少なくとも僅かに遺された彼の藝術は、此の疑問に對して私達に否と答へるやうに思はれる。更

に「彼の性動様にして惇雅」であつたと云ふ説が信すべきものとすれば、一層切にそのことが感じられるのである。

惟ふに以南その人は所詮一個の詩人ではなかつたか。見識はあり熱情はありながらも、究極するところ其の素質に於ては進んで世と闘ひ事を成すの人でなくして、退いて自ら守り深く自ら内に養ふを以て本領とすべき「心の人」ではなかつたか。世と共に事を成すべく彼はあまりに清く且弱く、事に依て己れを現はすべく彼はあまりに清く且狭く、現實に即すべく彼の心はあまりに遠くを夢みては居なかつたか。此の見地に立つて彼の最後を思ふに、彼はつひに戦つて敗れ、戦つて仆れるに至つたのではなくして、むしろ自ら戦ひを厭ひ、戦を脱せんとした者であると云ふべきである。桂川に投ずると云ふ彼の辭世詞を以て、一時を韜晦せんが爲めの計策だとした『良寛全傳』の編者は、此の擧を以て「英雄人を欺く計策」であつたと評した。併し、その推定にして信すべくば、私達はむしろその事實こそ一層強く彼の最後の行動が戦ひの爲めの計策ではなくして戦ひからの厭離であつた事を信ぜんとするのである。

要するに以南は、意の人であるよりも、むしろ情の人であつた。墮落の極に達したと云はれる時代の風潮と、その暗黒なる風潮の底に閃めける一道の光明とは、此の情の人以南をしてつひに立つて一世の爲めに何事かを爲さざるべからざるを感じさせた。偶々家閥の薰化によつて彼のなせる國典の研究と暗黒なる社會の一角に生起せる悲壯なる闘士の活劇とは、つひに彼をして勤王愛國の大志を抱か

しめるに至つた。昨の所謂「驛傳の老隠居」、昨の所謂俳諧の風流師、一變して今は悲壯なる運命の舞臺に一個の闘士として現れた。事ここに至つた彼の志は誠に壯とすべく、諒とすべきである。しかし、現實は彼の豫想した如くしかく單純簡易なものではなかつた。彼の進むべき道は彼にとりてあまりに峻しかつた。幾度か彼は躓いたであらう。幾度か彼は迷つたであらう。しかもつひに彼は何を爲し得たか。彼が志を立て、京師の地に踏み入つて以後五年の永い月日は過ぎた。しかも此の五年の永い月日の間に彼は果して何を爲し得たか。私達は今日なほ私達に傳へられる彼の生涯の輪廓の甚だしく悲壯であるのに感動を禁じ得ないと同時に、謂ふところの志士としての彼の事蹟の傳へられ、若くは彰はざるゝ事の、あまりに乏しくあまりに模糊たるを怪しみ惜しまないでは居られぬのである。仍て惟ふに、彼の志はいかにも壯とすべきであるが、惜しいかな彼はつひに其の人ではなかつたのではないか。而して彼みづからもその矛盾を知り且苦しんだ果てに、つひに最後の擧に出たのではないか。もしさうだとすれば、私達はそこにこそむしろ彼の生活の悲痛深刻な意義を見出すことが出来るのである。

享和二年二月、出雲崎の俳人文雲が以南七回忌追善の爲め京都に上り、「天真佛」と題する追悼句集を編輯し發行した。その句卷のはし書の中から以南南その人の性行を窺ふに足ると思はれるもの二三を抜いて見ると次の如くである。

「橋南子は生涯を風流に抛て出て家に歸らず、四海みな兄弟とし、杖を雲水にまかせて、いたらぬ

國のはでもなく、花に暮し月に明し、いそのかみ身はふりにふり、老の浪の立かさなるも知らず、藻鹽草かきあつめ、池水のいひ出ることの葉はちりひちの山とつもり、わたつみの底はかり知られぬ心ぞこもれりける、其頃世の中の俳諧、田土に陥り異風おどろをみだし、人をまどはすのやから白日に霧をおこし、四方に土降事となりしに在尾陽に曉叟、越に南子いまそかりて之をなげき、祖翁のいさをしに習て法を正し道を改め、我がともがらにしめし、國に及ぼし、玉くしげ二たび岩戸の光あきらかに、ばせをの葉榮を見る事は併南子の大炬を振ひだし力ならずや、高名北海に鳴て、響宇宙にあまねし、かくて北越蕉風中興の棟梁といふならむか、さあれど、其性、名利をもとめず、竹間の破笠、孤塵の雨心、風塵をさけてひとり豊に淨し、年六十種路遊で、かりそめに天のはし立見むと人には告げつゝ、詠歌一首吟じ捨て、たな引雲のやすらひに、姿は見えずなりにけり。

けふのみ影かすみか雲か天津風

興板都

良敬白

「昔以南老、沙墨江に在て木兎の句を吟じ、二三子に示して曰く、われ此句を作るにしかも風情幽玄にして、木兎の寂寥おのづからひゞけり、是れ俳諧の不思議といふ可し、汝よく之をうけてよといへり、即其句を以て茲に追福の俳諧をおこす。

木兎や古寺の鐘つくくくと

銀杏ちりしく碑の前

出雲崎 古

佛

「今は八年のむかし若葉のころ、南子がすゝむるに松島の片心などと、菅菘とつて白砂ふみわけつ
つ、象潟の雨をしたひ、雄島の月に魂を奪はれ、水乞鳥の水驛にやどりかさねしも、かくてははて
しなればと、子は都に心ざし、予は武陵におもむくことあれば、別のいとく／＼なつかしきは、
秋風のはかなき便きくべきにや、秋毎に小萩わけつる佛ぞ忘れぬ。

みちのくを思へば露の身なりけり

直江 驪

彭

これらの追憶記によつて見ると、一層鮮やかに以南の人となり、謂ふところの志士などは遠い
隔たりのあつたものであることが想像されるのである。眞個の以南その人は所詮かの與板の俳人中川
都良の眼に映じたやうに「風塵をさけてひとり豊に淨し」と云ふ底の清く靜かな人格ではなかつたら
うか。しかもつひに此の素質と、かの亢奮との矛盾に面接して、眞に己れを完くすることを得なかつ
た彼の最後の運命は、更に私達をして、一個悲痛なる詩的人格としての彼を憶ひしのばしめるのであ
る。

而してこの悲痛なる運命を擔つた一個の詩的人格こそ、今日私達が無比なる法悅的詩人の典型とし
て欽仰する禪師良寛その人の父だつたのである。「彌彦神社附國上の良寛」の著者はかう書いてゐ
る。

「釋良寛が勤王の老志士山本以南の長男と生れたりしは、會々彼れが眉目脱落の面目を傷くること
甚大なり、味者或は彼れを以て此を推し、伴狂と眞狂とを辨せず、葦と鮮とを同器に盛りて願念す
る所なし」

更に語を改めて同じ著者は次の如く論じてゐる。

「……之を良寛が家の系譜とし、之を良寛が父とす、然らば彼れも亦幼より崇高なる犠牲的精神の
薫染を受け、佛氏方外の教義の如きは流習も忌むべき筈なるに、彼れの夙に譚化して浮屠に歸せる
は、豈性情の自然に冥合する所ありしが故か、以南の皇室の式微を憂うる、假令一身を亡すと雖も
尙ほ皇威の發揚に待つ所あり、眞狂の却て伴狂に近からざるを保せず、良寛の跡を山澤に湮め、和
光同塵の徳を完うせしが如き、眞に岫雲と卷舒を一にし、野鳥と去來を等しうす、物に拘束せらる
るものなく、伴狂の焉ぞ眞狂の體を得たるに非ざるを知らんや、伴狂是か、眞狂非か、誰が家の寧
馨兒か前者の志を憐んで後者の無用の用を念ふ」

一味卓抜な見識と云ふべきである。けれども、既にかの以南が人格内に解きがたい矛盾の惱みを認
め、それに向つて彼れが最後の悲痛なる運命の緒を求めた私達にとりては、こゝに掲げ出された以南
對良寛の關係についての疑問こそ、むしろ最も大なる興味を以て良寛その人の生活のうちに辿り求む
べき主なる導線を示すものゝ如くに思はれる。

だが、それはそれとして、私達はこゝで此の父以南と並んで、良寛の母秀子のいかなる女性であつ

たかを一通り知つて置きたい。秀子は前にも述べた如く橋屋の外孫で、佐渡相川町同族橋屋山本氏の女であつた。出雲崎の橋屋へ養女として貰はれて来たのは彼女の幾歳頃であつたか解らぬが、以南を婿として迎へ入れたのは二十歳の時で、當時以南は十九歳即ち秀子より一つ年下であつた。「良寛全傳」の編者に従へば、彼女は

「良妻賢母の聞高く、内を治むる方あり、良人をして内顧の憂あらしめず、又子女の庭訓に焦慮し、内助の功多く、家運も興隆せりといふ。宜なり、其子女巋然として頭角を顯し、百年後の今日に於ても令聞猶噴々たるものある事や」

と云ふ事である。しかし、具體的に彼女の行状や性情に關する話が一つも傳つて居ないと見えて、綿密な此の著者も一つもさうした事を録してゐない。たゞ良寛の追懷歌に次の如き數首があるだけである。

足ちねの母がみ國と朝夕に佐渡が島べをうち見つるかな

足ちねの母のかたみと朝夕に佐渡の島根をうち見つるかな

古にかはらぬものは荒磯海と向に見ゆる佐渡が島なり

天も水もひとつに見ゆる海の上に浮び出でたる佐渡が島山

しかもこれだけの歌では、たゞ良寛にとりて世間並の子が母に於けるが如き懐しさがあつたと云ふ事が知られるのみで、それ以上彼女の如何なる女性であつたかについては少しも知り得るところがない。

い。けれども少なくともこれだけの母對良寛の心情が吃露されてゐる以上、彼女が母として家庭の主婦として兎にも角にも平和な位置を保持し得た女性であつたことを疑ふことは出来ない。

寶曆七年十二月、良寛はかの父と此の母との間の長男として生れたのであつた。その時以南は二十二歳、秀子は二十三歳で、養祖父新左衛門はなほ此の世の人であつた。而してかうした家庭に初めての子として、しかも男の子として生れた彼良寛が、いかにその幼年時代を人々の熱き寵愛のうちに過したかは想像するに難くない。祖父は彼が七歳の時まで生きてゐた。祖父の死んだ翌年に次男由之が生れた。祖父歿し、次男生れた以後の良寛は、或は家庭に於て以前ほど熱愛は受けなかつたかも知れないけれども、しかも依然として「大切な名主様の世嗣息子」として周囲の誰彼から愛撫され續けたことは疑ふべくもない。彼は幼名を榮藏、長じて字を曲（マガリ）と云つた。「全傳」には次の如く書いてある。

「性魯直沈黙、恬澹寡慾、人事を懶しとし唯讀書に耽る、衣襟を正して人に對する能はず、人稱して名主の書行燈息子といふ、父母之を愛ふ、成童の頃出して地藏堂町狭川子陽先生の塾に入らしめ、和漢の學を兼修せしむ」

更に又こんな逸話が傳へられてゐる。良寛がまだ八九歳の少年であつた頃、何かの事で父に叱られた時、上目で父の顔を視たので、父は「父母を睨む者は蝶になるぞ」と云つた。ところが彼はそれを聞くとひとしく、家を飛び出したまゝ、日暮になつても歸つて来ない。周囲の者が心配して、心あたり

の場所を隈なく探し歩いたが解らない。しまひに海へでも行つたのではないかと云ふので、大勢の者が海岸へ探しに行つて見ると、果して彼は浪際の上にある岩の上にたゞひとりしよんぼりと佇んで一心に海を眺めて居た。捜しに來た人達は驚き喜んで『そんな所にまあいつまでも何をしてゐるのだ』と問責した。少年の良寛は悲しさうな、不審げな顔付で云つた、『俺はまだ蝶になつたらんかえ』と。

これは或は後人が附會した作り話であるかも知れない。それにしても、さうした話を附會され、且後々までも話し傳へられて怪しまれなかつた事そのことが、既に彼の少年時代の真相を暗示してゐるのではないかと云ひ得られる。所詮前に引用したところの『全傳』の編者の記述が信すべきものであらう。

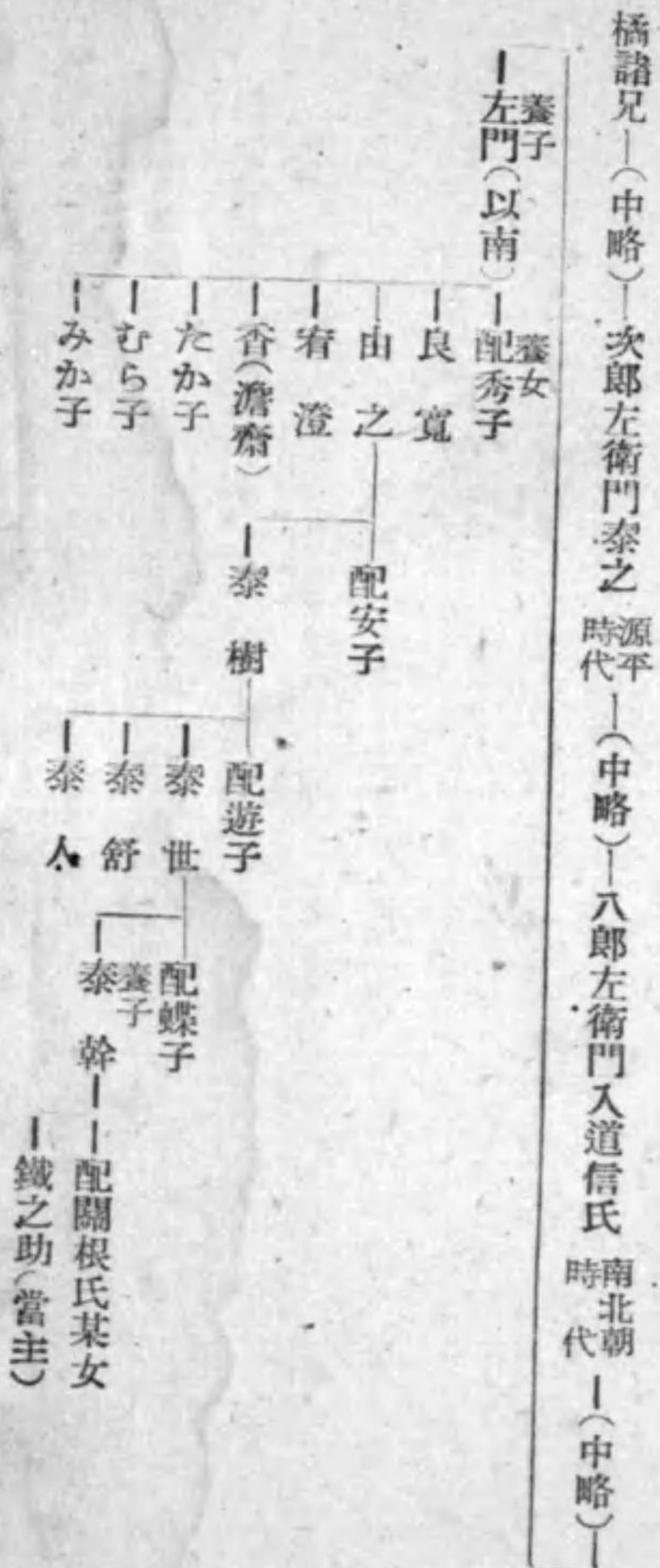
良也如愚道轉寬、騰々住運得誰看、爲附山形爛藤杖、到處壁間午睡間。

と、後年彼が師事した備中玉島圓通寺の國仙和尚は彼に贊偈を與へた。愚は或は彼本來の面目であつたのかも知れない。

彼には三人の弟と三人の妹とがあつた。次弟は通稱左衛門と云ひ、後巢守と改め、雲浦と號し、晩年薙髮して無花果園由之と稱し、國學和歌及び書畫を善くした。良寛の出家後彼に代つて家職を相續したのは此の左衛門であつた。三弟は良寛と同じく僧となり、名を宥澄と云つた。字は觀山、碩學の聞えが高かつた。快慶法印として聞えてゐる。四弟は澹齋と號し、文章博士高辻家の儒官となり中務香と稱して京都に住んで居た。三人の妹はいづれも他家に嫁したが、そのうち第三女のみは寺家へ嫁

した因縁から、老後薙髮して妙現尼と云つた。いづれにしても代々神官を兼職として居た家から、急に以南の代になつてから後に、殆んど時を同じくして幾人かの僧侶を出したことは不思議な對照と云ふべきで、その間に漂うた雰圍氣のうちに嗅がれる一味の靈香に、私達は深甚の妙味を味はずには居られぬのである。之が源泉は果して何處に求むべきであるか。

橘屋山本氏略系



出家

越後出雲崎の名主兼神職橋家の嗣子として生れた榮藏が、出家剃髮して良寛と稱するに至つたのは彼の十八歳の時で、寺は生地から程遠からぬ尼瀬町の光照寺、師は同寺第十二世玄乗破了和尚であつたと云ふ記録は、確かに信すべきものであるらしい。けれどもかの國典を重んずる神官の家の長子として生れた彼が、しかも十八歳と云ふ花やかな年頃になつて、突如として出家剃髮するに至つたのは、そも／＼何故であるか、此の事については今日なほ確乎たる定説がない。

之れについて『全傳』の編者は次の如く書いてゐる。

「説をなすもの曰く、良寛幼名榮藏は、生れて奇敏にして父職を襲ぎ一たび莊官となりしが、時事に感ずる所あり、一日同友と青樓に痛飲し、酣醉淋漓百金立るに散じ盡して悔色なく、歸途遂に桑門に入れりと。

又曰く、榮藏性魯放、襟を正して人に對する能はず、一たび莊官となりしかども、家を舍弟由之に譲りて出家すと。

又曰く、幼名源藏一旦家督を相續せしも、驛中にて死刑の盜賊ありし時出役し、歸宅の後感愴して直に出家せりと。之れ文臺翁（鈴木）の記録に遺れる所なり。

又曰く、一度は婦人を迎へしが、半歳ならずして恩愛を捨て、無爲に入れりと。

また曰く、師年十八にして名主役見習となりしが、折節出雲崎代官と漁民との間に葛藤起り確執解けず、名主は居仲調停の地位に在りければ、師は其の意を得て仲裁せんとし、代官に對しては漁

民の悪口雑言を其のまゝに上申し、漁民に向ひては代官の怒罵痛罵をも飾なく通達しければ、兩者の怨恨疾惡益激烈となりければ、代官は榮藏の魯直を譴責したり、榮藏慨然として謂へらく、人の生けるや直し之を罔ひて生けるは幸にして免れたるなり、との本文あり、今世澆季、虛妄詐欺を以て賢となす、決然厭離せずんば將に魚肉とならんとす、嗚呼恐るべきかなとて、直に光照寺に奔れりとは、板井錢さん即ち山本錢之助氏の談にして山本家の口碑なりと。」

此等の諸説は果して良寛その人の生前に於て既に人口に流布してゐたものであるか、或は彼の没後に於て捏出された臆説であるかは確め難いけれども、前に掲げた「北越奇談」のうちの記述の如きについて見ても、彼の生前に於て既に其の事が世間の人々の興味深き話題となつてゐた事が想像される。

けれども、以上の諸説のうち何れが最も多く信を置くに足るものであるか、如何なる準據を求めてそれを判別すべきかを考へると、私達はそれの殆んど不可能に近いことを思はないでは居られぬのであるが、『全傳』の編者はその難事を敢てして、次の如き臆斷を試みてゐる。

「余山本家譜を按ずるに、安永三年師十八歳にして出家し、尼瀬町光照寺第十二世玄乗破了和尚の徒弟となると、去れば此れ由之は十三歳、實母秀子は卅二歳（四十歳の誤りであらう）にして、實父以南の年齢三十一歳（三十九歳の誤りであらう）の時の事に屬し、父母方に強壯、弟妹健在、家道隆盛にして和氣霽々たる家庭なりしならむ、此の家を棄てし榮藏や決して悲傷の爲めにあらず、

厭世觀の爲めにあらず、失戀の爲めにもあらず、慷慨の爲めにもあらず、又勿論怨恨の爲めにもあらざるや明かなり、且禪師と由之とは同母兄弟にして友于の情の厚かりし事は兩師の歌文は徴して立證するを得、穎敏やゝもすれば熱烈なる感情に伴はれて遷世する者亦鮮尠ならざれども、禪師に出家を促したる衝動物、刺戟者を其周圍に發見するを得ず。」

かくの如く『全傳』の編者は大膽にも世間流傳の諸説を悉く否定し去つたのであるが、その根據とするところは僅に良寛出家當時に於ける家庭圓滿の一事だけであつて、最も重要な出家の動機として傳へらるる外圍の刺戟即ち社會の一員としての彼が經驗の事實に關しては、何等の反證をも用ひずに臆斷を敢てしてゐる。しかも之についてかの『彌彦神社附國上と良寛』の著者もほゞ同様の臆斷を述べてゐる。

「良寛の尼瀬光照寺の破了和尚（一に玄乘和尚といふ）に就き得度式を擧げ始めて良寛の法名を得たるは年甫めて十八歳の交と記さる、後桃園天皇安永の末年にして、以南が「……」の辭世を残して桂川の浪に消えたる寛政七年七月二十五日を距る約廿年にして、言はゞ豪家の部屋住みの長男、假令衷心に「缺乏なき缺乏」を感じたりとするも、時代の腐敗に憤慨する程しかく世間に接觸せりとも思ほへず、又彼れにして大聖釋迦の如く厭世出離の希望あるも、父母として容易に之を許すべき事にあらず、然るに萬事豫定の行動の如く速かに運びて、次弟由之に父祖傳來の舊業を譲り、朝に行雲流水を追ひて趨り、夕に樹下石上の眠を貪る放把自由の境界を取受するに至りしは、彼れに

取りて無上の幸福なりしか、否か、吾人は今之れを斷定するに材料を有せず」

今假りに其の二氏の臆斷を以て正鵠を得た見解であるとするならば、勢ひ私達は良寛出家の理由を何等かの他の事實の上に求めなければならぬ。そこで『全傳』の編者は次の如く説くのである。

「因りて憶ふに師は十五にして元服して姓氏を稱し、雙刀を帶し、一たび莊官となりて世職に試みられしも、所謂書行燈然たる名主の若旦那にして俗務を處理して醜醜たること能はず、父母も其の資性を知り行動を見て、家道を委する器にあらずとして、且つ由之十三にして成人に近づきしを以て、十八の時其の素願を容して出家を許したるべし、觀じ來れば師の十七八歳頃の性行顔貌、眉間に髭鬚するものあり、榮藏や遂に「これ穎悟の傑物にあらずして魯鈍、疎懶の一沙彌の如くなりしならむ」即ちこれは良寛その人の魯鈍、疎懶であつた天性と、それに對する父母の考慮とに、彼の出家の主なる因由を求めようとした、一見極めて穩當な見解である。良寛の資性に魯鈍疎懶の趣相が多分に存したらしい事は、前にも述べた如く彼が師事したかの國仙和尚の贊偈や彼自身の吟詠や又は諸種の口碑によつて私達も堅く信ずるところであるが、併しそれと同時にその所謂「愚」が通俗な意味に於けるそれで無かつたことも亦疑ふべくもない事だと思ふのである。尤もこれによつては『彌彦神社附國上と良寛』の著者の如く、

「良寛世才に乏しく、始めより散樗として周圍に取扱はれたりしか、吾人はしか信ずるの勇氣なし……飄逸と恪謹とは人の境遇にもよるものぞ、吾人は良寛が吉田町に於ける某工匠の有力なる助言

者たりしといへる其地方の口碑に徴し、更に彼れが蕩兒を訓戒して爲めに其父に詫びりたる事跡を知り、尙ほ草庵は四壁寥廓として、一衣一鉢の外翌日の糧食をも止めざりしといふに係らず到る所の知言に幾多の備荒貯蓄ありし書牒を讀む時、寧ろ彼れが常識に敏なる好個の才人たるを認識せずんば非ず。」

とまで極論してゐる人もあるが、私達は又さほどまでに彼を凡庸視しようと思ふものではない。此の點では私達はむしろ『全傳』の編者が、或は「師は智の人にあらずして情意の人なりしなり、熱烈なる情意を緇衣に裹みて外貌普騰たりと雖、大愚や愚にあらず、心裡明燿々たるものありて藏せらる」と云ひ、或は「大愚豈愚ならむや、心眼朗徹未然を察し、四相を覺る。其の肉體こそ死灰枯木の如くなれ、其の意志や金剛の如く堅く、百鍊鐵の如く剛く、其の情操や春風の如く暖に、又烈火の如く熱し、其の詩歌に發露せるを見て知るべきなり」と云つた評語に、深い同感を禁じ得ないのである。

良寛自ら歌つて云ふ「生涯懶立身、騰々任天真」云々と。又歌つて云ふ。

少年捨父奔他國、辛苦描虎猫不成、箇中意志人偷閑、箇是從來榮藏生。

更に自ら大愚と稱し、曲と稱す。世俗の所謂「愚」が彼の本體でなかつた事は云ふまでもない次第である。かう見て來て、更に翻つてかの『全傳』著者の「一たび莊官と爲つて世職に試みられしも所謂晝行燈然たる名主の若旦那にて俗務を處理して離礙たること能はず父母も其資性を知り行動を見て家道を委する器にあらずとし、且由之十三にして成人に近づきしを以つて十八の時その素願を容れて

出家を許したるなるべし」と云ふ見解を取り上げて考へると、私達はそこになほ多くの説明不備の點の存することを思はずには居られぬ。就中それに用ひられた「素願」の二字に於て最も切にそれを感じる。假に此の出家して佛道に入らうと云ふ事が彼の「素願」であつたと云ふ事を何等かの根據ある事實であるとしても、かの所謂晝行燈然として居た名主の若旦那の心に、かくの如き賢明なる素願が、何時如何にして形造られるに至つたかの詮索が當然試みられないでは居られぬ筈である。況んや彼の養育されて居た家庭が、その所謂「素願」とは全然別趣の薰化を主としなければならぬ家閥であつたに於てをやである。

『全傳』の編者は更に進んで云ふ。

「橘家は累世男系は神葬なりしかども、婦人は禪宗にして、前には逆谷村寛益寺の檀越なりしを、後に尼瀨圓明院の旦那に改めしも、舊誼を捨てず、享保中淨財を喜捐して寛益寺の伽藍再建の大檀越たりしが如き奇特殊勝の家風なりければ、師の出家、父母の許諾の動機共に深く恠むに足るものなし。」

と。けれどもこれだけの事實で果してよくかくの如き家閥と不調和な此の家未曾有のかの出來事が説明し盡されてゐるであらうか。之れを更に「彌彥神社附國上と良寛」について見ると、此の書の著者は次の如く云ふのである。

「たらちねの母のかたみと朝夕に佐渡の島根を打見つるかな　の一首を仔細に玩味する時、彼が母

も亦家附きの娘に非ず、山本家の血統は以南の代に於て既に絶えたるものなるを知り、以南が自家の
兒子を以て、山本家を相續せしむるに重きを置かざりし事情も略ぼ想像するに足るものあり、良寛
の榮藏が聊か拘束せらるゝ所なく浮世の羈絆を斷つを得たるも、結局彼れ一身の感激に非ずして、
家庭散漫なりしに加へて性質の相冥合するものありし故なりとす可し、かく言はゞ彼れ及び其一家
を傷くること多大なるに似たれど、佯狂せる父以南と、眞狂彼良寛と、狂して狂せざる弟由之と、
迭に其所を得て終に怨嗟なしとすれば、復た何ぞ禍とするに足らんや、吾人は此最も重要な點に
關して傳説の甚だ其眞を説かざるを見る也」

と。之れ或は鋭く穿ち得た觀察であるかも知れない。しかも、これだけではまだく最も重要な問
題に觸れてゐるとは思はれない。何となれば此等の觀察はどちらかと云へば事後の環境に重きを置き
過ぎて事前に於ける内部的原因を軽く取扱ひ過ぎてゐるからである。即ち私達が今知らうとするこ
ろは「何故に神官の家より僧伽を出したるか」であるよりも、良寛と云ふ一個の人物が、神官の家か
ら出て僧となつたのは何人の心から出た考に因るものであるかである。更に一步を進めて云へば、良
寛の出家は『全傳』の編者の所謂良寛その人の「素願」によつたのであるか、又は父以南の考に基く
ものであるか、若くは何人か他の勸奨乃至感化に因るものであるかと云ふ事が、私達にはより多くの
興味ある問題の如く思惟さるゝからである。

『全傳』の編者は云ふ。

全郷有兄弟、兄弟心各殊、一人辯而聰、一人訥而愚、我見其愚者、

生涯如有餘、復見其聰者、到處亡命趨。

の詩に見ても、愚者の愚を守るものを賞讃して自己の見地を陳べられしが如し、是に由りて之を
觀れば師は智の人にあらずして情意の人なりしなり、熱烈なる情意を緇衣に裹みて外貌尊勝たり
と雖、大愚や愚にあらず、心裡明煌々たるものありて藏せらる、遂に善知識たり傑僧たりしな
り、父母の先見龜卜の如し、是れ神官の家より僧伽を出したる所以にして、一見甚奇怪なるが如
しと雖、其の稟性より察すれば奇異とするに足らず、誠に當然の結果なりとす。」

と。これによつて見れば、此の論者は良寛の出家を以て明らかに彼自身の「素願」であると認むる
と同時にその「素願」の形成を何よりも先づ彼自身の稟性に因るものと見做し、更に父母の聰明が
此の「素願」の實現に都合よき事情を持ち來したものであると斷定してゐる如く思はれる。して見
ると、つまり良寛出家の主なる原因が、良寛その人の稟性のうちに求むべきものだと言ふことに歸
着するわけで、茲に再び良寛の資性如何と云ふことが問題となるのである。

私は既に前章に於て「愚は或は良寛本來の面目であつたかも知れない」と云ふ事を述べた。けれ
どもその「愚」たるや普通の意味での所謂「愚」でないことも、上來述べ來つた如くである、され
ば、良寛出家の原因が第一に彼の稟性に求めらるべきであると云つても、決してそのことが彼の
低能を指すものでない事は明らかである。而も又

かう云ふ彼自身の告白を見ても解る如く、彼の資性が彼自身の出家の原因であつたとしても、それは「馬鹿で仕方ないから坊主にでもしたら」と云ふ消極的原因ではなくして、寧ろそれは積極的に自ら出家を望み僧伽たらんと欲するに至つた内部的原因であつた事が明らかである。云ひかへれば良寛の出家は、外部から餘儀なくされた消極的行動であるよりも、寧ろ内部から發した積極的要求に因由する自發的行動だつたのである。

かう見て來ると、かの『全傳』の編者が良寛出家の原因を良寛その人の資性に歸せんが爲めに否定した世間の口碑が、必ずしも牽強附會の俗説とのみ斷じ去ることを得ないわけになるのである。況んや又該編者の「熱烈なる情意を緇衣に裹みて外貌普騰たりと雖大愚や愚にあらず心裡明煌々たるものありて藏せらる云々」の賢明なる洞察あるに於てをやである。然り、大愚やつひに愚ではなかつた。普騰たる彼の外貌の奥には、凡俗の窺ひ知る事の出來ない心靈の熱火が燃えて居た、少なくとも此の洞察にして當を得て居るならば、かくの如き素質の青年が突如莊官としての自己の職を擲つて、身を僧伽の境涯に投じたと云ふ稀有なる事件に、傳ふるが如き意味深い動機の存したことも、必ずしも牽強附會の臆説と斷ずる事は出來ないと思ふ。

これと同時に、累代神職を兼ね、國典を重ずるを以て家閥の定憲として來た家庭が、安んじて其の嗣子を僧籍に委して顧みなかつた事についても、私はそれを『全傳』の編者などの推定した如き事情

にのみ歸することは出來ない。無論家閥の傳習のうちの或る要素が興つて力あつたには相違なからうけれども、此の事について何よりも重大視すべきは父たり、家長たる以南その人の性向でなければならぬ。わけても彼の思想傾向にそれを求めなければならぬ。茲に至つて私は前章に縷述した以南その人に關する私の理解が、おのづから此の問題に向つての有力な暗示であつた事を思はざるを得ないのである。而も最近に於て偶然にも私の眼に止つた古書中の一記事が、一層私の以南觀をして有力なる者たらしめた事をも、私は併せてこゝに記さざるを得ないのである。

それはかの良寛と殆んど同時代に、しかもあまり程遠からぬ邊土の一隅から生れ出で、彼此相通する生活と藝術とを以て相共に不朽の生命を勝ち得たる自稱「信濃國乞食首領」俳諧寺一茶の隨筆『株番』の中の左の如き一節である。

「今は十とせばかりに成ぬらん。越後國俳諧法師以南といふものありけり。國々さまよひ歩き、都にしばらく足をやすめける。折から、脚氣といふ病をなやみける。させるぐるしみは見えねど、ふたゝびもとのやうになりて古郷に歸らんこと、おぼつかなきなど、より添ふものゝさゝやきけるをふと聞きつけて、かくありて、日を重ね月をへて、見ぐるしき姿を人々に指さゝれんも心うしとや思ひけん。ある時

天真佛の仰せによりて、以南を桂川の流にすつる。

そめいろの山をしるしに立おけば我なき迹はいつのむかしぞ

と書て、その柳にありしとなん」

これについて一茶の評傳家『俳諧寺一茶』の著者東松露香氏も「此等は其の覺り振りの面白さに書きとゞめたるならんが、何れも一茶が心ゆけるものなるべし」と云つて居るが、もし此の一茶の聽き書きにして信を置くべきものとすれば、父以南あつてこそ、子に良寛あり得た事實を、一層深く解し得るのである。而して又此の意味に於て、私は山崎良平氏の『大愚良寛』中の左の如き一節に、最も多くの共鳴を感じるものである。(山崎氏の此の評論は最初明治三十七八年頃の第一高等學校々友會雜誌に掲げられ、後に小林二郎氏編輯の『僧良寛詩集』の卷尾に轉載されたかなりの長論文で、近代的批評の題目として良寛の生活及び藝術の取扱はれたのは、恐らく之れが初だと思ふ。)

即ち山崎氏は良寛の父以南の事蹟を記し了つて云ふ。

「思ふにこれ北越偉人の殊點を染得したるもの、傲岸にして頑執なる北越的特長は、此人によりて既に示されたるなり。其血統を得たる良寛豈に冷々たる死灰の堆塊なるを得んや。彼が遺傳をうけたる亦決して僅少ならざりしならん」

と。又云ふ。

「彼は既に世の頼むべからざるを知悉し、父の意を得、翻然として世を離れたり。上田沼意次等の權柄にほこるあり、日光拜するを得ずして、深く九重に隠れ、暗雲日にく重くして、皇威時に薄く、人をして片手大海に對するの感あらしむるに至れり。傲岸にして頑執なる彼、何を以て此世に

安んずるを得んや」

と。更に又云ふ。

「彼は出雲崎の地、北海の怒濤に産湯せしものなり。彼何を以て北越風土の化に離るゝことを得んや。果然彼は北越の傲岸と頑執との性を享受し、加之父の遺傳を得、事に當り物に觸れ、感激其度を越え、慨然として蟻螂の斧を以て隆車に當るを辭せざりき。而して之を彼の父に見よ。彼は皇室の式微を慨し、片手其救ふべからざるを知り、悲憤の極遂に水に入て死を得たり。上人豈に何ぞ之を冷々に看過するを得んや。彼は念頭之を離たず、常に世の澆季を嘆じ、之が救済に意を致しゝなり。然れども其遂に斷行し難きを照破し、意を決して之を根本的に精神の救済をはからんと試み、翻然として弟に家を譲りて禪定の道に入りぬ。嗚呼此時此刹那、北海の波其高を増し、米山の孤月光彌々牙えたりしならむ」

と。行論や概念的に過ぎ、誇張に失した嫌ひがあり、且つ以南の性情及び生活についてはなほ多くの詮索不備の點はあるが、その着眼の仕方にて頗る私などには共鳴を與へる見解である。要するに、父以南の生活と、子良寛の生活と——此の二者の關係は、良寛その人の生涯を考へるに當つて、私達には何としても深大な意味を藏する問題でなければならぬのである。

おもふに、名主の家の嗣子として生れた良寛は、生來世俗と相容れない一風變つた人間であつた事は事實らしいが、しかしそれが普通に云ふ「馬鹿」とか「阿呆」とか云ふたぐひのものでなかつた事

も疑ふことは出来ない。或は彼は常識の習得に懶い、空想的要素の多分な少年ではなかつたか。世間の少年等と交遊することよりもむしろ唯一人あてもない空想の世界に遊ぶことをより大なる楽しみとしてゐた、北國に有り勝ちな淋しい少年の一人ではなかつたか。

さう思つて見ると、前章に掲げた彼の少年時代の逸話の如きは、よしあれ程の落し嘶めいた結構はなかつたにしても、兎に角彼の少年時代の特色を最も鮮やかに示した好證左として受け容れることが出来る。「荒海や佐渡によこたふ天の川」と芭蕉の歌つた越後海岸の風趣を最もきはやかに備へた出雲崎の荒磯は、おそらく孤獨な少年榮藏の最もよい空想の場所だつたであらう。而して

たらちねの母がみ國と朝夕に佐渡が島べをうち見つるかな

天も水もひとつに見ゆる海の上にかび出でたる佐渡が島山

など云ふ晩年の詠懐に於けるが如く、彼は又、此の雲波の間に出没する島影に對して朝な夕なさまざまの空想を描いたことであらう。更にやゝ長じて、彼は此の海上十八里の孤島裡に行はれた歴史上の悲壯なるローマンスのかす／＼をも聽いたであらう。そして順徳帝、日蓮、資朝、阿若丸——さうしたさまざまの過去の人物と、かの孤島の風光とが混融して、幼ない彼の腦裡には日を追ひ、年を経て、ますます複雑な空想瞑思の世界が展開されて行つたであらう。わけでも、彼自身の家に家寶の最も貴き一つとして傳へられつゝあつた短冊、「忘るなよほどは波路にへだつともかはらずひやどの橋」の歌の主の悲劇的生涯は切なる實感をさへも彼の胸に傳へたであらう。

更に又晩年の悟境にありての彼が最愛の遊戯が手毬とハヂキであつたと云ふ事實から推して、少年時代に於ける彼も亦戸外にありての男性的遊戯よりも、戸内に於ける女性的遊戯の靜穩をより多く愛好したであらうことは想像するに難くない。恐らく又かくの如き彼の嗜好よりして、彼は寒國特有な薄暗い爐邊に離れがたい快感を感じずには居られなかつたであらう。爐邊に親しむことは、寒國にありては、同時に家人に親しむことであり、世間に親しむことである。かくて彼は、名主としての彼の父の身邊に蜚集し來つた世間雜多の問題に、期せずして耳目を刺戟されたであらう。時恰も徳川の政治が最も墮落腐敗の状態に陥つたと稱せられた田沼時代であつた。その溷濁の波動はおそらく此處北越の邊土までも及んで居たであらう。この想像にしてあやまらないとすれば、良寛の父以南の周圍にも、直接又は間接に、何等か其の種の事件の發生を見たにちがひない。而して資性の廉直に加へて、俳味の靜寂を愛すると云つた風な彼以南は、さうした世態に面し、しかも官民の仲介者としての彼の地位に踞していかばかりの痛心を経験したかわからない。陰鬱で空想的な少年榮藏の眼は、斯うした憂悶痛心に擒はれた父の姿を時に薄暗き爐邊に見出さなんだであらうか。

此の榮藏は十八歳で父の職を承けたと傳へられる。而してそれは父以南が三十九歳の時に當る。一説の傳ふるが如く、榮藏その人にして眞に所謂「魯鈍疎懶」の馬鹿息子であつたとすれば、此の事實の意味は全く不可解である。何となれば、自らは如何に他に欲する道があつたとは云へ、明らかに魯鈍と知れた、しかもまだ漸く十八歳の若輩でしかない息子に、三十九歳と云ふ働き盛りの以南が、安

んじて累代の家職を譲ると云ふやうな事は、あまりと云へばあまりの無謀事だからである。而もそれと同年に、その家職を譲られた榮藏が剃髪して良寛となつてゐる。此の事もまたあまりの輕率事に見えるではないか。

けれどもそれが疑ふべからざる事實であつたとすれば、その一事は何よりも先づ私達に、以南その人の胸中の憂悶の如何に烈しかつたかを語つてゐるやうにしか思はれない。即ちかくの如き無理をしてまでも自らを離俗させないでは措かれぬほどの苦悶が、その當時既に以南の胸裡を攪亂してゐたのだとしか思はれない。而も彼をしてかくも斷乎たる處置をとらしめた力はどこから出て來たのであらうか。憂國勤王の志士として立たうとした積極的熱情がそれであつたか。離俗脱世の靜寂境を求めつあつた彼の消極的心情がそれであつたか。おそらく其の兩者であつたらう。その兩者の解きがたき心の縫れであつたらう。而してつひに此の兩者のいづれにも徹することの出來なかつたのが、彼れ以南の悲劇的生活の真相ではなかつたか。

此の父の悲劇的生活の根本を成した矛盾を、さながらに一身に引き受けて家職の衝に當つたのは榮藏であつた。而も彼たるや、又實に世間から變物扱ひされ、阿呆視されて來た一個の空想兒であつて、その點では父以上の無常識漢であり、實際向きでない人間であつた。果せるかな、此の變物は僅に一年をすらも、その職に得堪へなかつた、彼は一溜りもなく、その地位から飛び下ろされた。當に其の家職からばかりでなく、一躍して彼は世間そのものから脱却した。その點では賢にして逡巡して

ゐた彼の父よりは愚にして猛進した方が、いち早く徹底境を見出すことが出來た。彼の父が生涯求めわびてゐたものを彼は一擧にして攫む事が出來たのである。世間は此の電光の如く石火の如き榮藏の行動を目して、さまざまの噂を立てた。「あの名主の書行燈息子は、女に嫌はれて坊主になつたのだ」かう云ふものもあつた。「いやあれはいつぞや罪人が斬罪に處せられたのを見て、急に世の中が恐ろしく厭になつたのだ」かう云ふものもあつた。更に又物の道理を辨へて居るらしい或る者等は云つた。「橋屋の若旦那はどうもたゞの人ではなさうだ、今度急に光照寺で頭を剃つてしまはれたのも、わけを聞けばどうしてなか／＼素晴らしいものだ、何でも此頃起つた代官様と漁師共との争ひの仲へ入つて、代官の方へは漁師共の云つとる悪口雜言をそのまゝ上申し、漁師共の方へは代官様の悪口をそのまゝ傳へると云ふ寸分も曲げない仲裁をさしやつたのちやさうな、ところがその爲めに争ひ火の手がだん／＼烈しくなるばかりなので、代官様はひどく腹を立てしやつて、或時榮藏さんと呼ば出してひどく叱りつけしやつたそうな。そこで日頃からあのやうな一風變つた人なもんで、「人間は正直が第一だ。俺はたゞ正直に物を言つただけだ、それで世の中が治まらんと云ふのなら、こんな世の中は俺の居る世の中ぢやない、こんな世の中にぐ／＼しとつたら仕舞にはくだらん奴等の手にかかつて殺されてしまふ位が落ちだ、俺はもう斷じて厭だ」と云ふやうな事どう／＼あんなにして出家さしやつたのだと云ふ事だ。」と。

けれども、それが果して真相を穿つた世評であつたかは解らなかつた。今日私達が良寛その人の出

家の動機について、之れはと云ふ信頼すべき記録を得ないのもさうした區々たる世評がいづれとも判じ難き幾つかの口碑として存して居るからである。併し又翻つて考へるに、私達は今強ひてさうした幾つかの口碑のいづれが果して真で、いづれが果して附會説であるかを詮索するに當らないやうである。恐らくそのいづれも真であらう。恐らく又そのいづれも真ではなからう。私達は今その個々の口碑のいづれか一つを選び取らうとするよりも、むしろその凡てのうちに一貫してゐる「或るもの」を感じ、その暗示によつて何等かの具體的なものを正視し得れば、それで好いのではないか。

私は嘗て窪田空穂氏の『苦んだ人、西行』と題する評論を讀んで、左の如き一節に逢着した時に、肅然として襟を正さないうで居られなかつた。今、良寛が出家の意味を考ふるに當つて、私は又しても其の一節を思ひ出したのである。

即ち窪田氏は云ふ。

「單に無常を感じたばかりならば、『時』の推移を悲しんだばかりならば、彼は一俗人に過ぎないが、彼はさうした境遇にある自身を見出すと共に、時の推移にたゞよはされてゐる自身を見出すと、そのまゝちつとしてはゐられなくなつた。彼は何よりも先づ自身に強い愛着を感じて來た。」

「弱い者もその人が正直である限りは、弱い者と同様に最後には主我的になる、爲我的になる、彼は弱きに徹して強くなる路を選んだ。」

と。

良寛の文に云ふ。

「古曰君子好物而遇意於物誠哉夫人之有意觸物而感則發於憂喜其未發謂之中發當節謂之和不及則不足過則溢々則流々則□焉至亡其身使我細道沒世不能盡諸道其大體陶淵明遇於之菊謝康樂遇於之山水支道杯遇馬劉伯倫遇酒遇詩者遇書者遇琴者遇狂者遇滑稽者遇稚子者雖物殊事異所以其遇者一也或樂而忘之或好而執之古來之感目前之微了然可親何是非子其擇焉」

と。けれどもかの越後出雲崎の名主の若旦那榮藏が、突如一變して緇衣の僧良寛となつたことが、その最初の瞬間から既にかくの如き達人の心境からの行動であつたとは、誰か信ずることが出來ようぞ。

この事に關しては、『彌彦神社附國上と良寛』の著者も更に説を爲して次の如く云つて居る。

「さるにても良寛は何の爲めに僧となりしか。一世の英雄伊達正宗を驚倒せる眞壁平四郎の當初の發心の如く階級制度萬能主義に反抗して紫衣の榮進を誇らんが爲なりしか、將た自ら生死の一大事を明らめ輪廻の大海中に浮沈する大衆を救濟せんとする爲めか、二著何れとしても、先づ權門富豪に依りて積極的に活動せざるべからず、勿論良寛の才學の程度は之を爲すに容易の筈なるに、計の此に出でざりしを見れば彼れの目的は此れにもあらざりしが如く、若し切に浮世の係累を厭ふとせば跡を山林に埋め寒山豐干の前蹤を趁うて足る可く、特に郷里に近きあたりに家門の羞恥を晒して

蛙居せる理由畢竟解すべからず、或は彼が浮屠の門に入れるは父以南との協定の結果にして、彼れは京都に於て父以南と會し、斡旋する所あり、以南が志を得ず憤死するに及んで、即ち郷里に歸り、潦倒して爾後の三十年を送れるなりと想像を逞うせんか、以南の行動彼の如く幕府の嫌疑を惹く可くして、しかも由之の家に事なく、良寛亦特に生家と疎隔したりしを思へば、揣摩に過ぐると雖も亦一點の靈犀の良寛の面目に通ずるものあるが如し」

と。此の想像説も亦あまりに揣摩し過ぎた臆斷で、以南良寛二人者の關係の如きもあまりに史實を無視した嫌ひがある。而もなほ一點此の説に於て私達の共鳴を覺ゆるのは、良寛の出家を以て父以南との協定に出たものと視たに因るのであつて、それと同時に其の父子の協定が如何なる内容を持つたものであるかについては、私達は前に掲げたさま／＼の口碑を一貫した「或るもの」のうちにその暗示を摸索するより他に詮考の道なきを思ふのである。

良寛みづから歌つて曰ふ。

わが袖はしとゝにぬれぬうつせみのうきよのなかのこともおもふに
すめらぎの千代萬代のみよなれや花の都に言の葉もなし
石の上ふるの古みちしかすがにみくさふみわけ行く人なしに
益良雄のふみけむよゝのふるみちは荒れにけらしも行く人なしに
いにしへの人のふみけむふる道はあれにけるかも行く人なしに

墨染のわが衣手のゆたならばうき世の民をおほはましものを

諸人のかこつ思ひをせきとめておのれひとりにしらしめんとか
いかにしてまことの道にかなはんとひとへに思ふねてもさめても
如何にしてまことの道にかなひなむ千とせのうちの一日なりとも
斯くあらんとかねて知りせばなほざりに人に心は許すまじものを
世の中をおもひくはてはてははいかにやいかにならむとすらむ
うつし身の人の憂けくをきけばうし我もさすがに岩木ならねば
久方の雲ふきはらへ天つ風うきよの民の心かよはば

此等の述懐を味ふ時、私達は後年の所謂「昂々乎として囚はれなかつた」自由の人良寛と、全然別個のいたましき「惱める人」を想ひ浮べずには居られないのである。而もその「惱める人」は、同時に彼の父以南のうちに一層鮮やかに認め得られるを思ふ時、その所謂自己のうちなる「惱める人」に對する以南良寛二者の態度の相違の因つて來つた意味について、更に一層深い默想に誘はれずには居られぬのである。

何故に家を出でしとをりふしは心に愧ぢよすみぞめの袖

かう良寛みづからも歌つてゐる。

身をすてゝ世を救ふ人もますものを草のいほりにひまもとむとは

これは彼の弟子貞心尼に與へた歌であるが、此の一首のうち何と云ふ鋭い自省の刃の閃いて居ることであらう。而もつひに彼は如何にして、此の鋭い刃に打ち勝つて、更に新たな強い彼となり得たであらうか。彼も亦實に窪田氏の評した西行その人の如く「弱きに徹して強くなる路を選んだ」人ではなかつたか。

おもふに、彼は或は外貌頗る「魯鈍疎懶」の趣を現はして居たに違ひなからうけれども、内部的にはむしろ痛ましいまでに敏感な神経の顫動を感じて居た人であつたらう。「わが袖はしとゝにぬれぬうつせみのうき世のなかのこともおもふに」——これが恐らく中心に於ける本當の彼自身であつたのであらう。かの飄々乎として雲の如き洒落の風格を以て一代を驚かしたと稱せられる俳人一茶が、實はその内部生活に於て世にも稀なる悲痛哀傷の人であつた事が彼自身の日記その他の記録によつて明らかであるが如く良寛も亦其の内部に於ては抑へがたい哀傷の人だつたのではないか。而もその哀傷を縦まゝに外に發することの出来なかつた弱い彼は、悲しめば悲しむほど、傷めば傷むほど、ますます「自らの内へ内へと沈潜せざるを得なかつた。即ち「うつせみのうき世のことを思ふ」心は、人一倍に烈しかつた彼でありながらも、強く外に向つて戦ふべく彼の性はあまりに弱かつた。さまざまの口碑が傳うるが如く彼には自己の職務の上から觀たゞけでも、數多く爲すべき仕事があつたに違ひない。人間的な彼の心は、幾たびか彼に向ふべき道を指し、爲すべき仕事を示したであらう。而もそれに従ふべくに餘りに弱かつた彼は、而してその弱きが故にあまりに高き清さを求め、あまりに深き靜

けさを願つた彼は、つひに弱き自己を欺いてまでも強きに倣ふことは出来なかつた。さればとて世の推移の現實に即して、強く自ら楽しんで生きることの猶更不可能であつた彼は、結局たゞ一筋の道をすらも外の世界に見出すことの出来ない彼であつた。

かくして、外を閉ざされた彼の心の眼は、すさまじい力を以て彼自らの内部へと集まつて來た。外に道を失つた彼は、今や彼自らの内部をのぞいては絶対に生命の道を求めることが出来なかつた。外の世界をどうにかすることの不可能なことを知つた彼は、今や彼自らをどうにかすることより外に、道なきを思つた。即ち「弱い者もその人が正直である限りは、強い者と同様に最後には主我的になる、爲我的になる」——この道へ、彼も同じく進んだのであつた。

良寛の出家は、傳ふるが如く父以南を始め凡ての家人等との協定の結果であるかも知れない。而も之れを良寛その人を中心として觀る時は、まさしく主我的の行動であつた。如何なる事情があつたにしても、襲職後僅に一年を経ずして、突如として一切を擲つて我ひとり世外の道に遁逃し去つた事は、周圍に對する自己の責を完うした行動とは考へられない。而して更に彼の此の隱遁が、つひに單なる隱遁に終り、何等の精神的感化乃至道德的感化を世界に寄與しなかつたならば、彼の出家はつひに世間並の隱遁者の一個忌はしき主我的行動として終つたであらう。

けれども、かの主我的行動によつて、進み入つた良寛の未來には驚くべき廣大な別個の世界が展げて居た。それは實に美妙なる愛の世界であつた。而して彼はその廣大な愛の世界を自己一身の上で、

うつそ身の生活そのものゝ上にほがらかに具現することを得ずには止まなかつた。「弱きに徹して強くなる道を選んだ」彼はかくしてつひに最も強き者ほか住むことの出来ない、廣大な愛の世界に住むことが出来るやうになつた。

今日私達が、良寛その人を讃仰措かない所以のものは、實に此の廣大なる愛の世界の具現者としての彼あつたが爲めに外ならない。隱遁者良寛は此の一個の人物の假りの姿でしかない。隱遁は弱き者にのみ開かれたる眞如界の關門に外ならない。けれども眞に「弱きに徹する」ことの出来るものでなければ、此の關門の彼方に展けたる廣大なる愛の世界にまでの淋しき道を進むことは出来ない。その關門のほとりには弱き主我の人にとりての誘惑が充ち満ちて居る。こゝに留るものは亡びる、「弱きに徹して強くなつた」者のみがその誘惑に打ち勝つて、進むことが出来る。良寛は實にその難關を突破して進むことを得た人であつた。

むらきもの心たのしも春の日にとりのむらがり遊ぶを見れば

夏草は心のままにしけりけりわれいほりせむこれのいほりに

秋もややうらさびしくぞなりにける小笹に雨のそゞくをきけば

飯こふと里にもいすなりにけりきのふもけふも雪のふれゝば

修學時代

安永三年尼瀬町光照寺に入つて第十二世玄乘和尚の徒弟となり剃髮を受けてから足掛五年の間、良寛はそこに在つて修行の功を重ねたと云はれる。けれどもその間に於ける彼の生活が如何なるものであつたかは今日少しも知る事が出来ない。昨日まで名主の家の若旦那であつた彼が、一朝にして禪寺の小僧となり變つたのであるから、何かにつけて彼の心の波動の尋常でなかつた事は想像するに難くない。世俗生活の本意なさに一旦は身を以て塵外に遁れ得た安らかさも感じられたであらうけれども、やがては此の佛門修行の道程にも更に別趣の困難の存することを知つて、如何ばかりの苦悶を彼は経験したであらう。前章にも述べた如く、良寛の選んだ隱遁の一路は、たゞ弱きものゝみに開かれたる眞如界の關門に外ならなかつた。しかも、その關門のほとりには弱き主我の人にとりての誘惑が充ち満ちて居る。そしてそこに留るものは亡びるの外はないのである。進むべき道を見出しながらもなほ進むべきが爲めのもろ／＼の現實の惱みは、如何に烈しく彼の心身を苦しめ感はせたであらう。

「人あり西に向ひて行かんと欲するに、百千里あらん。忽然として、中路に二河あり。一は是れ火の河にして、南にあり。二は是れ水の河にして、北にあり。二河各闊さ百歩にして、深くして底なく、南北に邊なし。正しく水火の中闊に、一の白道あり。闊さ四五寸ばかりなるべし。此の道、東

より西岸に至るに、また長さ百歩なり。其の水の波交はり過ぎて道を濕ほし、其の火の焰、また來りて道を焼き、水火あひ交はりて、常に息むことなし。

此の人既に空曠の遙かなる處に至るに、更に人物なく、多く群賊惡獸のみありて、此の人の單獨なるを見て、競ひ來りて殺さんと欲す。此の人、死を怖れて、直に走りて、西に向ふに、忽然として此の大河を見る。即ち自ら思へらく、此の河南北に邊を見ず、中間に一の白道を見るも極めて狭小なり。二つの岸相去ること近しと雖、何に由りてか行くべき、今日、定めて死せんことを疑はず。正しく回らんと欲すれば群賊惡獸漸く來り逼る。正に南北に避け走らんとおもへば、惡獸毒蟲競ひ來りて我に向ふ。正しく西に向ひて道を尋ねてゆかんと欲すれば、復た恐る、此の水火の二河に墜ちんことをと。時に當りて惶怖すること、復た言ふべからず。即ち自ら念へらく、我れ今回るとも亦死せん。住まるとも亦死せん、ゆくとも亦死せん。一として死を免れざれば、我寧ろ此の道を尋ねて前に向ひてゆかん。既に此の道あり、必ず應に渡るべけん。

此の念をなす時、東岸に忽ち人の勸むる聲を聞く、汝たゞ決定して此の道をたづねて行け、必ず死の難なからん、若し住まらば即ち死せん。また西岸の上に、人ありて喚んで言はく、汝一心正念にして、直に來れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に墜ちんことを畏れざれと。此の人、即ち此に遣はし、彼に喚ぶを聞いて、即ち自ら正しく身心に決定して道を尋ね、直に進みて疑怯退心を生ぜず。行くこと一分二分するに東岸の群賊等、喚んで曰はく、汝回り來れ、此道險惡なり。過

ぐるを得じ、必ず死せんこと疑はず、我等すべて惡心ありて、相向ふことなしと。此人、喚ぶ聲を聞くと雖亦顧みず、一心に直に進みて、道を念じ行くに、須臾にして、即ち西岸に到りて、永く諸難を離れ、善友、相見て、慶樂して已むことなからん。

この善導大師の『二河喻』に寓された如き眼覺め行く者の苦悶と努力とは、正しく彼れ良寛にもあまりにあらたかな體驗であつたにちがひない。

良寛が尼瀬町光照寺に入つてから五年目の五月、備中國玉島圓通寺の國仙和尚と云ふ大徳が勸化の爲めに越後へ旅して來て、光照寺にも錫を留めた。此の大忍國仙禪師は圓通寺第十世の住職で、當時其の偉器大徳を以て世に廣く知られて居た。年はまだ二十二でしかなかつたが、その頃もう善導の所謂「白道」を認めて進みかけて居た良寛は、一たび此の大徳の風姿に接するや離れ難い敬慕の念を禁ずることが出来なくなり、つひに舊師の許を去つて此の國仙和尚に隨身することゝなつた。そして生れて初めて故郷を外にして旅に出で、善光寺に詣で、江戸に遊び、京師に上つて、つひに玉島に到り、そこに國仙和尚を第二の師としてますます深く、いよく眞實に、聲聞緣覺の道にと志した。良寛自ら歌つて云ふ。

從來圓通寺、幾回經冬春、門前千家邑、乃不識一人、衣垢手自濯、

食盡出城闔、會讀高僧傳、僧可可清貧。

と。これによつてもほど知ることが出来る如く、玉島時代の良寛は實にたよりない天涯の孤客であつ

た。彼は未だ曾て知らなかつた孤獨と不如意とを味はないでは居られなかつた。門前に千家の邑あれども、唯一人の識る人なく、衣垢つけば手づから濯ぎ、食盡れば城闕に出で、乞ひ歩く……此の寂寥と此の不如意との裡に、彼の學び得たところは果して何であつたらうか。「曾讀高僧傳、僧可清貧」——かう自ら慰め勵まし鞭つては居たものゝ、彼は時に自ら平安を求めて遁れ入つた行路の、あまりにもこましく峻しいのに、却て自らの轉向を悔い悲しむやうなことはなかつたらうか。或は又自らの弱い心の緊張を得んが爲めに、強ひても寂寥孤獨の裡に身をいや深く沈めるやうなことをせんだらうか。おもふにかの善導の『二河喻』の如き體驗は一步は一步よりますます切實に彼の心靈に感得せられた事は疑ふべくもないのである。

かくて、彼は後年の安住境にあつても、尙且當時を追懷して涙無き能はないほどの、孤獨の境涯に深く自ら進み行つたのであつた。

憶在圓通寺、恆歎吾道孤、運柴懷龐公、路確思老盧、入室非敢後、

朝參事失從、一自從散席、悠々三十年、山海隔中州、消息無人傳、

感恩終有淚、寄之水滌潺。

書卷に没し、禪床に親しんで他を顧みないと云ふ程の苦學修行だけならば兎も角も、前に述べた如き孤獨と不如意と難行とは、さらでだに弱くして遁れた彼にとりて、果して眞に如何ばかりの忍従を強ひ、如何ばかりの悲痛を味はせたかは、蓋し想像に餘りあるところである。

けれども弱きに即して主我的になり、「弱きに徹して強くなる道を選んだ」彼は、如是の苦行あり、如是の悲痛あつて初めて、かの弱き主我の人の陥るべき墮落と破滅とから脱却することが出来た。隱遁逃避の關門のほとりに充滿する弱き主我主義者にとりての誘惑は、つひに此の苦行と悲痛とに鍛へ上げられた彼の心靈の方によつて打ち勝たれた。弱きに徹して強くなつた彼は、此の孤獨の道を一心に直に進むことが出来た。而してつひに彼の前には悠々として到處に善友を見る廣大なる新天地が展けたのであつた。國仙和尚の贊偈に云ふ。

良也如愚道轉寬、騰々住運得誰看、爲附山形爛藤杖、到處壁間午睡間。

と。「愚」を以て彼が本來の面目であると解する事が出来るとしても、誰か此の如き渾然たる人格が何等の鍛鍊を経ずして在り得ることを信じ得るものがあらうぞ。徒らに後年の彼が卓越せる人格を讚嘆するのあまり、ひたすらその素因を彼本來の面目にのみ求めて、凡てが茲にまで到來せる過程のうちこそ、最も多くの學ぶべき意味と。味索すべき價值との存することを忘れてゐる人達に、私達に斷じて與し得ない所以は、主として此の點に存するのである。此の意味から、私達にとりてはかの圓通寺に於ける修行時代の良寛の生活が、彼その人を理解する上に最も重要な題目なのであるけれども、悲しいことにはそれを窺ふ爲めの材料は殆んど全く残されてゐない。たゞ私の能ふかぎりの探索の結果、辛うじて得たところのものは、某氏からの左の如き報告に過ぎないのである。

「本日玉島町へ罷出圓通寺現住職石川戒全禪師より聽取したるところ左記の通りにして實に朦朧た

るものに御座候。

良寛師は圓通寺第十世大忍國仙禪師と意氣投合し約三年間同師に隨身し、印可證明を得て後、諸國を行脚し郷里越後に歸り一の草庵を結びて、一生を要禪に託し終りたるものゝ如し。

越後在住中始終國仙師を慕ひ文通を怠らざりしも、今は何等の(詩文等)筆跡を有せざるは甚だ遺憾なり。

同師の逸話として民間に残れるものは、始終乞食坊主の風をなし兒守子供等と共に手毬歌など歌ひて遊戯せりと云ふこと。

又或時或部落に晝盜忍び入りたるに、村吏は必ず彼の乞食坊主の所爲ならんと、之れを捕へて訊問すれども、何等の答をなさず、村吏は必定彼ならんと想像に任せ、土坑を掘りて彼を生埋になさんとす、その時一豪農彼を憐み、彼れ何等の答をなさざりしは凡人にあらず、近頃聞く所によれば圓通寺に一雲水ありて頗ぶる凡俗の姿をなして而かも内心は悟道に通じ、此の地方に来ることもありと云ふ、若し彼れに非ずやと告ぐる所あり。

仍て再び尋問せしところ、果して彼にして且曰く一旦疑を受けたる上は何程辯解するとも、そは申譯に過ぎず、是れも前世の罪業の然らしむる所と諦め如何なる罪苦を受くるも苦しからず、之れ敢て彼是と申譯をなさざる所以なりと。是に於て村吏つひに己が非を謝して放免したりきと云ふ。

右の通り、その他には詩歌文章等無之候。」

これによつて見ると、良寛の生涯にとりて最も重大なる意義を有する彼の圓通寺留學の期間は僅に三年の短時日であつて、しかもその短時日の間に彼は既に傳へらるゝが如き渾然たる風格の人となり了せた事となつてゐる。之れは殆んど奇蹟に近い事實である。そのみならず、こゝに傳へられた二つの逸話——良寛その人の風格を示す上に最も代表的な逸話とされてゐる此二つの逸話——が、それと殆んど同一な形式で越後の彼の郷里に於ても廣く語り傳へられてゐる事は、之れ亦あまりに奇怪な事實である。尤も其の二つの逸話の第一、即ち彼の童男童女及び手毬に對する愛好癖は、かの『全傳』の編者も、

「禪師に三好あり、曰く童男童女、曰く手毬、曰くはじき是なり、小兒は天真爛漫にして其詐らざるを愛するなりと、手毬はじきの趣味は如何なりけん、箇中趣味人相問、一二三四五六七と、奇僧の奇癖といふ可し、繡毬は行住座臥追隨せしめしは文書によりて明なり。」

と云つてゐる如く、殆んど先天的とも云つて好いほどの趣味であつたらしく思はれるけれども、第二の逸話の如き立派な結構のある話が、備中と越後との兩所に殆んど同一の形式で傳へられてゐると云ふことは怪しむべき事實である。即ち『全傳』の編者は之れを録して次の如く云つてゐる。

「禪師時に蓬髮、髭鬚、破衲、徒跣して人家庖厨に入り食を乞ふ、某家に至りし時、其家會々物財を失ふ、家人師を認めて盜賊となし、法螺を吹き板木を鳴らして村人を集め、師を縛して土中に生埋せんとす、師片言を發せず、其爲すに任せたり、將に穴中に投ぜんとせし際、相識の人の通行す

るありて、曰く是れ高名なる良寛禪師なり、汝等何爲る者ぞ、速に縛を解きて謝罪すべしと、衆大に驚きて謝す、其人師に謂つて曰く、何ぞ冤を辯せざると、師曰く、衆皆爾を疑ふ、辯するとも何の益かあらむ、辯せざるの勝れるに如かざるなりと、死生に處して悠揚迫らず動かざる事山の如し、大悟の人にあらずんば安ぞ能く此の如きを得むや。」

いかにも之れは「大悟の人」でなければ到り得ぬ境涯である。しかも若し此の逸事が既に彼の備中玉島留學時代にあつたものとすれば、前にも述べた如くそれは殆んど奇蹟に近い事實である。良寛は果してよく其のやうに迅速にさうした大悟の域にまで到り得たであらうか。

良寛が始めて國仙禪師に隨て備中へ赴いたのは、彼の二十二歳の時であつた。しかも、居ること僅に三年で既に如上の徹底境に到り得たと云ふ。之れは何としても信することは出来ない。そこで再び之れを西郡氏の『全傳』について調べて見ると、既にその玉島留學の期間に甚だしい違ひのある事は解るのである。

「(玉島に)居る事七年、母の喪に遭ひ、天明五乙巳年を以て歸郷し追善を營み、再び飄然として玉島に赴き、居る事五年の後、中國九州に行脚し、長崎地方に雲水す、蓋渡清の大志ありしが如し、雄圖果さず、再び玉島に歸り、居る事六年にして父の訃に接し歸國す、途次高野山に上り、伊勢に詣で、京師に到り、寛政十一庚申年を以て歸郷し、兩ひ故山の人となれり、年四十四、此間二十有三年、到處名山巨刹を訪ひ、碩學善知識の提命を受け、學徳圓熟の域に達せり。」

即ち之れが『全傳』編者の説であつて、之れに依つて見れば、前に掲げた逸話の如きも既に玉島在留當時に於ける良寛その人の風格を傳へたものとして受け容れても好さうに思はれる。それは又前章に引用した『北越奇談』の中に記された彼れが歸郷當時の生活状態から推しても、

良也如愚道轉寬、騰々住運得誰看、爲附山形爛藤杖、到處壁間午睡間。

と云ふ國仙禪師の贊偈から考へても、是認する事が出来るのである。

かくの如くして、今日私達が讚嘆措かないところの良寛その人の廓然無礙な風格が既に彼の玉島在留時代に於てほゞ渾成されて居たものである事は想像出来るのであるが、而も同じく玉島在留時代と云ふうちにも漠然とはしてゐるが彼れの心的發展の經過の三時期のあつた事も推察されるのである。

即ちそれは前の七年と、中の五年と、後の六年とである。而して今その三つの期間に於ける彼が心的發展の階段を、おほまかながら分別して推考して見ると、その第一期に於ける彼は、前にも引用した

從來圓通寺、幾回經冬春、門前千家邑、乃不識一人、衣垢手自濯、

食盡出城闔、曾讀高僧傳、僧可可清貧。

と云ふ自彼らの告白にもある如く、孤獨不如意の忍苦と、その忍苦を通じて古聖の道に向つて邁進せんとする努力精進を以て生命としてゐたのであるが、天明五年即ち彼が二十九歳の時に母の喪に遭つて歸國し、日ならずして再び玉島へ赴いた以後の彼は、既に前期の如き單なる學徒でなくして、佛學に於ても亦彼みづからの人生そのものに對する態度に於ても何等かの確乎たる根柢を固めつゝあつ

たに違ひない。徒らに受け容れることよりも、寧ろ進んで自ら創めんとすることの欲求が、漸次彼の内部を支配しつゝあつたに違ひない。かくして、彼は今や過去に於て習得し得たところのものを徐々に彼自らのうちに消化し、それによつて生長し形成されたる自己を以て直に活きた人生に肉迫し、我れみづからの眼を以て如實の世相を観んとするの途に進んだ、此の意味で、彼れが玉島在留の第二期、即ち彼れの二十九歳から三十三歳までの五年間は、彼によりては最も重要な修養の時期であつた。此の時期を経て、初めて良寛の良寛たる風格の形造らるゝ端緒が開けたのである。

『彌彦神社附國上と良寛』の著者は云ふ。

「彼れ今や關門を透破して佛を殺し祖を殺し了れり、頂天立地か、廓然無聖か、歡喜此に極まつて感謝報恩の一念湧然として生ず、しかも國仙禪師は獅子兒の克く獅子吼し得るや否やを試験せんが爲めに、此一番の附屬終るや、直に彼を放下して全國の叢林に明眼の衲僧等と枯木龍吟の活機を競はしめ。」

と。玉島在留の第二期を経て、良寛が中國及び九州地方への旅行を試みた事は事實であるが、その動機及び目的が果して此の著者の云ふが如きものであつたかどうかは直に斷じ難い。しかし、それが後年に於ける彼の飄々乎として雲の如き放浪の旅でなかつた事も、亦疑ふべきものでないらしい。西郡氏の『全傳』中に次の如き逸話が録されてゐる。

「或人曰く、禪師雲水して西長崎に行脚す、蓋渡清求法の意志ありしが如し、愧怯扶搖九萬翼、漫

學鳴風在彼崗の詩、其氣概を想見すべしと、舟子其乞丐僧に類せしを以て之を拒絶したる爲に素懷を果さざりしか。」

更に又彼がその頃光明皇后の遺圖により癩病院を再興しようとして企てゝ事遂に成らなかつたと云ふ事が、典據頗る不明であるが、山崎氏の『大愚良寛』及び小林繁樓氏の『彌彦神社附國上と良寛』等に記されて居るところから考へても、その當時の良寛は決して謂ふところの脱俗世外の人でなくして、鬱勃たる救世の熱情を胸中に藏してゐた憂世の人であつた事を想像するに難くない。隨て又彼が這般の旅行が決して漫然たる托鉢旅行でなかつた事も、明らかである。

彼みづからの旅中吟に云ふ。

赤穂てふところに天神の森に宿りぬ、さ夜ふけて風の
いと寒う吹きたりければ

山おろしいたくな吹きそ墨染の衣かたしき旅ねせる夜は

高砂の尾の上の鐘の聲きけば今日のひと日はくれにけるかも

次の日は唐津てふ所に至りぬ、とよひもやどのなかり
ければ

思ひきや路の芝草をりしきてこよひも同じかりねせんとは

想念の世界に於てかの所謂頂天立地廓然無聖の境涯に到り得た如く見えた彼も、胸の奥には依然と

して弱き人間の心を藏してゐた。みづから求めてさまよひ出でた行雲流水の旅にあつて、彼は今なほ此の悲しみを吐露しないでは居られぬ彼であつた。彼は又かく自己の境遇の狐獨不如意を悲んだと同時に、此の一人の清くして貧しき行脚僧をさへも容るゝ者なく、宿すところなき人の世の冷たさを、如何ばかり深く嘆いたことであらう。しかも、その嘆きが深くなればなるほど、彼はますます人間の淺ましさを憐れまないでは居られなかつた。既に久しい間の経験と、修行と、教養とによつて、弱き彼みづからの主我心を脱却し得て居た彼は、今や人の世の苦難がいかにけしき身を襲はうとも、その爲めに世を怨み人を憎むことの到底出来ない彼であつた。怨む代りに、彼は憐んだ。憎む代りに、彼は愛した。憤る代りに、彼は祈つた。世間が彼に對して冷酷であればあるほど、彼の心にはますます強く救世の熱情が湧き起つた。

かくの如くして、中國九州の旅から三たび玉島圓通寺に歸つて來た彼は、もはや舊日の如く單なる佛徒ではなかつた。前に掲げた口碑の如き逸事が玉島在留當時既に彼によつて演じられた事が若し事實であるとするならば、それはおそらく此の第三期の玉島時代に於てであつたらう。此の意味で此の第三期の玉島在留六年間は、良寛その人にとりての人格完成の時期であつたと云ふことが出来る。やがて彼は「居る事六年にして父の計に接し歸國す、途次高野山に上り、伊勢に詣で、京都に至り、寛政十一庚申年を以て歸郷し、再び故山の人となれり」(西郡氏「良寛全傳」)と傳へられてゐる。而も此再度の歸郷の旅は、彼にとりて最も深刻なる意味を持つた、云はゞ彼の生涯のターニング

ポイントとも見るべきものであつた。

すめらぎの千代萬代のみよなれや花の都にことのはもなし(京都にて)

たをり來し花の色香はうすくともあはれみたまへ心ばかりは(西行法師の墓に詣でて)

きの國の高ぬのおくの古寺に杉のしつくをきゝあかしつゝ(高野のみ寺にやどりて)

伊勢道中苦雨作二首

我從發京洛、倒指十餘支、無日雨不零、如之何無思、鴻雁翅應重、

桃花紅轉垂、舟子曉失渡、行人暮迷岐、我行殊未半、引領一頓眉、

且如去年秋、一風三日吹、路邊拔喬木、雲中揚茅茨、米價爲之貴、

今春亦若斯、若斯倘不止、奈何蒼生罹。

投宿被院下、孤燈思悽然、旅服誰爲乾、吟咏聊自寬、雨聲長在耳、

歛枕到曉天。

近江路にて

故郷へゆく人あらば言つてむけふあふみちを我れこえにきと

余將還郷至伊登悲駕波不預寓于客舍聞雨凄然有作。

一衣一鉢裁隨身、強扶病身坐燒香、一夜蕭々幽窓雨、惹得十年逆旅情。

以上は其の旅中の述作で、此等を通してほゞその當時の彼の心境を窺ふことが出来るのである

が、併し這般の旅が彼の生涯にとりて最も深刻な意味を持つた旅であつたと云ふ事については、以上の詩歌は何ごとをも語つてゐない。おそらくそれは彼みづからにとりても表白を絶した大經驗だつたことであらう。

然らばその所謂彼の表白を絶したほどの大經驗とは如何なることであつたか。これは或は單なる臆測に過ぎぬかも知れないが、兎に角彼の這般の歸旅が彼の父以南の計に接したが爲めであつたと云ふ事、而も彼がその旅中に於て父以南の終焉地たる京都を訪ねた事が明らかである以上、私達はその意味深い事件を中心として、良寛その人の生活にとりての最も重大な意義ある何事かを探り求めないでは居られぬのである。

父の死と彼の轉機

良寛の示寂地である島崎村木村家に保存されてゐる良寛遺品中に、良寛の父以南の「朝霧に一段ひくし合歡の花」と云ふ句を書いた畫仙紙半切に、良寛の筆蹟で「水莖のあとも涙にかすみけりありし昔のことをおもへば——良寛」と云ふ添へ書きの施されたものがある。それは『全傳』によれば「夜のしも身のなるはてやつたよりも——以南」とある今一枚の短冊と共に良寛が「行住坐臥身邊を離さ

ず、薩埵の如く、神の如く、生ける如く在すが如く尊敬奉侍し」て居たものと云ふことである。「諸縁を放下し一切を離脱し、恬淡寡慾心水澄澈たる禪師も、さすがに岩木ならねばこの二物のみは忘却放棄する能はざればこそ、示寂地木村氏に留められたるなれ」かう『全傳』の編者西郡氏は云つてゐる。

更に『全傳』によれば

「以南の京都に於て憤然入水せんとする時なりしか、又高野山にて老死せんとする時なりしか、知人に一封を託して曰く、余の死後期年ならずして良寛と稱する沙門、西國より來訪すべし、其際此の記念品を交附せらるべしとて、蹤跡不明となれりと、是れ高野山に於ける事實なるべし、此の封中にありしも即朝ぎりの句の畫仙紙半切と、夜の霜の句の短冊となりき、禪師、父君手澤の存する二句を得るや、怡然と悲しみ、惕然と恐れ、潸然と泣き、之を捧持して追福菩提のため、且は大師の靈場參詣のため、暫時高野に滯杖し禪定せしは、

紀の國の高ぬのおくのふる寺に杉のしづくをきゝあかしつゝ、

との歌に依りて明白なり、下山後京都に出で父君の故寓を訪ひ、愛弟故滄齋の消息を尋ねて歸國せしは、實に寛政十一年の事とす。」

といふことである。

以南の死が「そめいろの山をしるしに……」の辭世歌の前書きによつて推定されるやうに入水自殺

であつたにしても、又『全傳』編者の推定するが如く高野山の隱遁裡に於ける老死であつたにしても、兎に角彼の最期が世の常ならぬ悲痛なものであつた事は明らかである。而して若しこゝに引用した『全傳』中の記事の如き事實が、以南の死後良寛その人によつて經驗されたことが確かであるとするならば、良寛が這般の越後への歸旅が、彼の内生活にとりて如何に重大な意義を有する事件であつたかも、ほとゞ察知することが出来るのである。

良寛の生活に於ける、隱遁的傾向が、父以南の心的傾向の影響乃至感化に負ふところ頗る大なるものあることは上來くりかへし述べた如くであるが、更に此の父の死によつて得たる彼の經驗が、さまざまの意味で彼の内生活の上に及ぼした影響を思ひやることは私達にとりて一層意味深い事ではなからぬ。

山崎良平氏は云ふ、

「彼が浮屠氏に學定るや、立て事を成さんと欲し、亦その成すべからざるを觀、決然として彼は聲聞緣覺の悟に入らんと謀れり。彼は佛として立つ能はざるも、少くも自身の安慰と正覺とを得むと決し、遂に去て居を山間に移すに至れり。」

と。更に云ふ。

「初め放浪して諸國を經歷するや、到るところ其意を漏し、自ら抑ふる能はざるものを示したり。就中其最も顯著なるは、光明皇后の遺圖により、癩病院を再興し、而して遂に其成すべからざるを

觀たり。彼は斯の如くして、經世の事に於て幾度か試み、能く幾度か敗れ、その全く望なきを見、斷乎として意を折りて去れり。然れども、彼は尙ほ全く世を忘るゝ能はざりき。即ち事に當り物に觸れ、其意中をもらしぬ。……(中略)彼が至情は勃々抑ふる能はず、而かも尙ほ行はむと欲すれば、自己墨染の衣の幅の狭きを如何にせむ。上は幕政未だおとろへずして、權臣徒らに柄を專にし、下幕威未だ地におちずして、民一向漢學に染み、世を擧て一丸と化して、幕の有に歸し、言論の道開けず、事業の方立たず。遂に空しく有意の士をして成すなくして地に去らしむ。傲岸彼が如きもの、何を以て晏如たるを得むや。

嗚呼之れ彼が彼たる所以にして、他俗僧と異なる所なり。滔々たる俗僧は理想もあらず、涅槃もあらず、漫然蓬髮して而して自ら高となす。彼良寛は然らず、混濁の世遂に平和と安心とを得るに由なきを見、行いて浮屠氏に就く、既に理想あり、亦た何ぞ涅槃を解せざるあらんや。」

と。いかにも能く後年に於ける良寛その人の内生活發展の消息を傳へてある卓見であると思ふ。

けれども良寛の生活轉化に於ける此の間の消息を眞によく理解しようとするには、其の最も有力な動機と認むべき、彼の父の悲劇的最期と彼との關係を外にしてはならぬのではなからうか。傳ふるが如く玉島在留の二十餘年間に於て學び得たところのものを以てして、彼は或は天下の佛徒界に自らの盛名を誇らうとするが如き野心に燃えたことがあるかも知れぬ。或は古來の所謂名僧智識の例に倣つて渡清遊學の大志を抱くやうな事があつたかも知れぬ。或は又光明皇后の遺圖による癩病院の再興と

云ふが如き種々なる救世的事業の企畫をも自ら進んで試みたことであつたも事實であるかも知れぬ。更に又父以南の跡を追うて、或は時代人心の腐敗を慨き、或は誤れる社會生活の状態を憤り、或は更に進んで身を人心の覺醒と時勢の革新とに挺さうとするまでの熱情に燃えるやうな事があつたかも知れぬ。而してかくの如く幾度か立ち幾度か躓いた彼は、つひに何等なすべからざるを觀、翻然として自己の凡てを擧げて聲聞緣覺の一路に委す事に至つたのだと云ふ解釋が、最も正鵠を得た解釋であるのかも知れぬ。實際のところ、彼がその間の消息に關して私達のなし得る推斷はそれ以上には出る事が出来ないのである。而もなほさうした餘りに抽象的な理解に對して、自ら甚だしい不満を禁じ能はない私達は、どうしても何等かの具體的事實を採り求め、それによつて一層切實な感銘を得ないでは止み難いのである。此の意味で良寛が再度の、而して最終の歸國の旅中に於ける、かの悲痛な經驗が、私達にとりて彼の一生中の最も重大な事件の一つとして映じ來たらざるを得ないのである。おもふに、寛政十一年父以南の訃音に接して歸國の旅についた良寛は、永い間の苦悶と冥想と修學と經驗とを経て、既に廓然たる大悟境に到達してゐたであらう。年齢も既に遠く四十を越えて居たのであるから、もろ／＼の煩惱との苦しい闘ひもいつしか治まつて、彼の野心は次第に新たなる慈光の暖むるところとなつて居たであらう。

良也如愚道轉寬、騰々住運得誰看、爲附山形爛藤杖、到處壁間午睡間。

恩師からのかうして贊偈に値するだけの一個渾然たる風格も既に出來上つて居たのであらう。前章

に掲げた玉島地方の口碑に傳へられるが如き超越味や悠遊味も、夙に彼の生活滋味となつて居たのであらう。而も斯くの如き彼をして、なほ且

水莖のあと涙にかすみけりありし昔のことを思へば

朝きりの中に君ますものならばはるゝまに／＼うれしからまし

とまでに弱々しい哀傷の聲を吐露させず措かなかつた父以南の死は、彼の内生活にとりては正しく一つの大きな動亂であつたに違ひないのである。

一面に於て自己の性情が到底世と共に調和して推移することの出來ないことが明らかに成り、他面に於て墮落せる時代の暗黒面と面接して内に自ら悲しむことの苦しさを得堪へなくなつた彼は、既に遠く身を以て世外に遁れてゐた。濁つた世間の流れに身を委せて安き生を得るにはあまり清く、出でて世と闘ふ爲めにはあまり弱かつた彼は、退いて自らを清くし安くし而して強くしようとする一途に進んだ。而も徐々として自己の内部に安らかさと強さと明らかさとが得られて行くにつれて、彼の眼はいつとなしに再び外部の世界に向けられる機會が多くなつて行かないでは居なかつた。けれども其の時代に於て世間の所謂知識階級に屬した人々の間の一種の流行であつた生活傾向——白眼にして世を睨むとか、皮肉で世を送るとか、世間を茶にして渡るとか云つた風な方向へ走るべく彼はあまりに正直であつた。かくて悲しめば悲しむほど傷めば傷むほど、ます／＼深く自らの内へ内へと沈潜しなうでは居られなかつた以前の彼とは全く趣の異つた、新面目の彼を見るに至つた。即ち衆生俱濟の發願

がいつとはなしに彼の胸裡に燃え上つたのであつた。しかも、かくの如くして幾度か起ち、幾度か試みた彼は、つひに又幾度か躓き、幾度か敗れざるを得ない彼であつた。而して此の蹉躓と此の失敗とから、彼は再び自己の内へと還ることを學んだ。その頃の彼は最早徒らに世の澆季のみ嘆いてゐる彼ではなかつた。又徒らに自己の薄運や、事を成すべき意志の弱さを悲しんでゐる彼ではなかつた。彼の内部には、既に還り住むべき魂の世界があつた。かの玉島地方の口碑に傳へられてゐると云ふ彼の生活に關する逸話——賊と間違へられて生埋めされようとする間に於ても一言の辯解をせず居たと云ふやうな、又はひまさへあれば里に出て子守娘共と手毬をつき手毬唄を歌つて遊びくらしてゐたと云ふやうな——に於けるが如き強さ、又は安らかさを、彼はその頃既に味はふことが出来たのである。

けれども、彼はやはり人間であつた。自己の魂を安住せしむべき窮極の世界は、すでに自己のうちに開拓し得ては居たけれども、しかも時ありて起り來る胸の波動をば絶滅することは出来なかつたのである。

旅人にこれをきけとやほとゝぎす血になく涙かわかざりけり

草枕夜ごとにかはる宿りにもむすぶは同じふるさとのゆめ

ふるさとへ行く人あらば言つてむ今日あふみちをわれこえにきと

身を行雲流水にまかせてゐると覺悟してゐた彼でありながらも、旅寢の床のさびしさのうちに浸つ

ては、矢張かう云ふ哀傷の聲を禁じ得ない彼であつた。同じ世界への先達として當時の彼が理想人物となつたかと思はれる、かの西行法師の墓に詣でも、なほ且

たをり來し花の色香はうすくともあはれみたまへこゝろばかりは

と云つた風なかよわい情緒の表白を抑へることの出来ない彼であつた。ましてや、かうした彼にとりて久しい年月の間別れてゐた父以南の死——しかも其の悲劇的な最期の消息が、如何に痛刻な刺戟であつたかは、想像だも及ばないことである。

哀傷、憤激、悔恨、奮起、苦悶、悲痛……さうしたさまざまな心狀が、雜然として彼の内部をかき亂したであらう。深い安住を得て居た彼の魂も、その爲めに一時は無明の闇に投じ去られたであらう。あらゆるものを打ち捨て、自己の全部を投げ出して、彼は父の敗れた戦ひを更に戦はうとはしなんだであらうか、或は又父の死んだ死を、彼自らも死なうと云ふほどの暗黒な思ひを、彼は一時たりとも抱きはしなんだであらうか。併しながらさうした胸の波動が如何に激しからうとも、その頃の彼は最早その爲めに魂の永遠の滅びを招くことの出来る彼ではなかつた。如何なる惱み、如何なる苦しみの底にあつても、彼の魂はその還るべき世界を求めることを忘れないまでにめざめてゐた。云ひかへれば、その頃の彼は、如何なる胸の激動をも、魂の力で統御し調整することを知つて居た。自己を明らかに観る眼が、その頃の彼にはもう開けてゐた。現在の自己と未來の自己と、一時的の自己と永遠の自己との關係を明らかに考へ得るだけの心が、彼にはもう用意されてゐた。彼は悲しんだ。彼

は苦しんだ。彼は迷つた。しかし、それと同時に、悲しみにも苦しみにも迷ひにも囚はれないだけの魂の明らかさが既に彼に得られてゐた。

紀の國のたかぬのおくの古寺に杉の雫を聞きあかしつゝ

と云ふ一首の歌によつて、その折彼が高野山を訪うた事が知られてゐる。ともすれば無明の闇に投じられて果てようとした彼の魂を救ひ出す爲めに、這般の旅程は彼にとりておそらく最も賢明な處置であつたのであらう。而して此の靜寂神嚴なる靈山に於ける冥想默思の刹那こそ、良寛その人の生涯にとりての最も意義深きターニングポイントを示すものではなからうか。歸郷以後の彼の生活の上に時を追うてますゝほがらかに顯證されて行つた隱遁の積極的意義が、始めて眞實に彼に把握されたのは、正にその刹那に於いてはなかつたらうか。

山崎良平氏の『大愚良寛』の一節に云ふ。

「傲岸なる頑執なる彼は、衝突の餘勢を以て遂に意を屈して、衆生俱濟の願を撤したり。撤して而して山氣青々常に人を襲ひ、水聲淙々として枕頭涼々なるの地に入りき。然れども彼は父を學んで死を致すに及ぼさざりき。是れ未だ全く世を捨つる能はざりしと死を以て人生の重大問題と觀しとに職山せずんばならず、上人詩歌集中其死生の問題に對する言を見ずと雖、其事に當りての處置より見るに必ず死を以て重大視せる跡見るべきなり。」

と。これは良寛が這般の心的經過について、他の多くの論者の眼界から一步を擡んで深く穿つた見

解だと思ふが、併し、私達としては其のやうな消極的方面からばかり觀てゐることは出來ないのである。

彈指堪人間世、百年行樂春夢中、一息截斷屬他界、四大和合名之躬、

爭名爭利竟底事、慢已慢人呈英雄、請看曠野凄風著、幾多觸體逐斷蓬。

○
無常信迅速、刹那々々移、紅顏難長保、玄髮髮爲絲、張弓背梁骨、
疊波醜面皮、耳蟬竟夜鳴、眼華終日飛、起居長嘆息、依倚稀杖之、
常憶少壯樂、兼添今日懼、痛哉憫老客、若彼霜下枝、受生三界者、
誰人不到斯、念々無暫止、少壯能幾時、四大日々衰、心身夜々疲、
一朝就病臥、枕衾無長離、平生打嘍囉、至此何所爲、一息纒截斷、
六根共無依、親戚當面歎、妻子撫背悲、喚渠渠不應、哭渠渠不知、
冥々黃泉路、茫々且獨之。

○
ながらへむことぞ願ひしかくばかりかはり果てぬる世とは知らず
いく年かたのみし人もあだし野のくさ葉のつゆとなりけるかな
夢の世にかつまどろみてゆめをまたかたるも夢もそれがまに／＼

うつり行く世にしすまへばうつせみの人の言の葉うれしくもなし

あるはなくなきは数そふ世の中にあはれいつまでわが身歎かむ

山崎氏も云つてゐる如く良寛の詩歌中には直接死生の問題に關した表白は見ることが出来ないけれども、こゝに掲げたやうな無常觀の表白は甚だ多い。此の點から見れば、彼も亦多くの佛敎的厭世家と同じく、消極的な無常觀を抱いてゐた一個の弱い哀傷の人であつた。

曉

二十年來郷里歸、舊友零落事多非、夢破上方金鐘曉、空床無影燈火微。

○

今年非去年、今時異往時、舊友何處去、新知漸已非、況屬搖落晚、

山川斂之輝、到處不可意、無見不凄其。

弔狹川先生墓

古墓高岡側、年々愁草生、酒掃孰復待、偶見菊蕊行、憶昔三十年、

往來狹川傍、一朝分飛後、消息兩茫茫、歸來爲異物、何以對精靈、

吾儔一掬淚、薄言弔先生、白日忽西沈、曠野唯松聲、徘徊不忍去、

涕淚一沾裳。

多年の出離の後に故郷に歸つて來た時にも、彼が何よりも先に痛感したのはかうした人生の推移流

轉であつた。

わが袖はしとゝにぬれぬうつせみのうき世のなかのことをおもふに

墨染のわが衣手のゆたにあらばうき世の民をおほはましもを

世の中をおもひ／＼てはて／＼はいかにやいかにならんとすらむ

かう自らも歎じてゐる如く、彼は現實生活の缺陷に對しても、結局は自己の無力を悲しまないでは居られぬ弱い彼であつた。

而してかくの如く哀傷的な彼にとりて、さまざまの意味の悲痛を藏した父以南の死が、いかに大きな打撃であつたかは、既にくりかへし述べたところであるが、而もそれについて今日私達の甚だ不審に思ふのは、その重大な精神上の打撃に關する良寛自身の表白に接することの出来ないことである。けれども此事は、他のさまざまの方面にその理由を求めるよりも、むしろそれは彼自身にとりては表白を絶した大經驗であつたからだと云ふ事にした方が、一層よく會得出来るやうである。而して此の沈黙の苦悶を通して良寛の攫み得たところのものを、實に彼がその後半生に於てしかくほがらかに顯證した隱遁生活の積極的意義に外ならなかつたと私達は固く信するのである。更に私達は彼をして進んで此の道に出でしめたところの力が、前に引用した山崎氏の所説に於ける死の重大視と云ふやうな消極的心狀からの方でなくして、むしろ自己の生に對する積極的な愛着力そのものだと思はずには居られぬのである。

風俗何孤薄、思之亦可怜、見義潛抽身、聞利競頭奔、舉世臥險巖、
無人希冉顏、勸君早終事、歸耕南畝田。

問古々已過、思今々亦然、展轉無蹤跡、誰愚誰又賢、隨緣消日月、
保已待終事、飄我來此地、回首二十年。

なよ竹の葉したなる身をなほさらにいざ暮さましひと日ひと日を
津の國のなにはのことはよしゑやしたゞひとあしをすゝめもろ人
さしあたるそのことばかりおもへたゞかへらぬ昔しらぬゆくすゑ

かくの如く良寛の悟りは一見極めて消極的なあきらめのやうであるけれども、而も彼みづからの性
向と經驗とを以てしても能く此の境地に到り得たことの爲めには、その胸底に強き生の愛着なくして
は能はぬところである。論者の察するが如く、死の問題は或は時に彼を脅やかすやうな事があつたか
も知れぬ。而も彼の如く悲しんで破らず、悶えて狂せず、能く靜かに自己の赴くところを過またなか
つた事は、決して徒らに死におびゆるやうな者のなし能はないところである。

おもふにさまざまに動き迷うて來た彼れの心は、最後に父以南の悲劇的な死の事實に面接して、か
つ驚き、かつ痛み、かつ激し、かつ怖れ、かつ悶え、その激越した動搖を轉機として、自己の生に對

する愛着そのものうちに集中されて來たのであらう。而してそれまでは何かにつけて亂れ勝ちであ
つた隱遁を思ふ心が、初めて彼れ自身のものとなることが出來たのであらう。

近代の或る詩人の言葉に「人は生活の全體を斥けることによつておのづから其の辯護者となる」も
のだと云ふのが、その場合に於ける良寛その人も、現世のあらゆるものを否定することによつ
て初めて自己の生の絶對にして無敵なることを自覺するに至つたのであらう。かくの如くして、結局
彼の心に残されたところのものは、唯一つ彼自身の救ひであつた。外部的のあらゆるものに對する否
定的心狀が確實になればなるほど、彼はますます一切に自己の生に對する愛着を感じた。而して愛着は
更に救ひを求むる心となつた。世間の墮落を嘆き、人生の無常を悲しみ、衆生俱濟の大願に動かうと
して居た過去の彼は、一轉してそれらの凡ての代りに唯一個の我を生かし救ふことをのみ主とする彼
となつた。

なにゆゑに家をいでしと折ふしはこゝろにはぢよ累ぞめの袖

身を捨てゝ世を救ふ人もますものを草のいほりにひまもとむとは

時にこんな風に彼みづから責めもし鞭うちもしたのものゝ、而も彼は彼自身のさうした隱遁的生活を
決して／＼忌はしい主我的乃至利己的生活だなどは思はなかつたであらう。彼はむしろさうした生
活を、なまじひに自己を忘れた世間的救濟などよりは、遙かに貴いものだと信じてゐたのであらう。
かくの如く世を離れることによつて、むしろ眞に世に即くのだと信じてゐたであらう。更に又彼は眞

に自分ひとりを生かさうとすること、眞に自分ひとりを救はうとすることは、同時に最も善く萬人を生かし萬人を救ふ道を求めることだと信じてゐたであらう。彼の擧げた隠遁の積極的意義は、此の外になかつたのであらう。而してこゝから出直すことによつてこそ、彼は初めてうぶな、自然な心もちで従來のまゝの隠遁生活の一路を進むことが出来たのであらう。

けれども良寛が這般の精神的轉向は更にその時代に於ける我が國の佛教の全般的状態と考へ合せて一層明らかに會得することが出来る。總じて徳川時代の佛教は、幕府佛教と云ふ名で呼ばれたほどに幕府の政治に支配されて變遷して來たのであつた。國家社會の經綸上宗教と云ふものゝ勢力をかなり重大視した徳川時代の佛教に對する政策は、一面に於て保護を加へたと同時に、他面に於てはそれは正しく干渉であり壓迫であつた。徳川幕府は盛に佛學を奨勵し、各宗をして談林、學林、學寮等の機關を設立せしめた結果、佛學が競うて興隆したと云はれてゐる。隨て又佛教各宗に互つて宗學と云ふものゝ成立したことが、我が國の佛教に於て初めて見ることを得た盛觀であつて、それは實に徳川時代の佛教の精華であると云はれてゐる。而もかくの如きは果して能くわが國に於ける佛教そのものにとりての、眞に歡ぶべき現象であつたらうか。この事については『江戸時代史論』の中にある、鷲尾順教氏の説が最も要を得てゐる。

「従來各宗にあればど（江戸時代）學問の競起した時代はないのであります。併しながら其學問と云ふものは、規模が極めて小さい一種の神學とも云ふべきものであります。幕府は各宗の學問に出

精せしめようとしたもので、天台宗は天台宗、眞言宗は眞言宗、淨土宗は淨土宗、眞宗は眞宗、日蓮宗は日蓮宗、各その宗の學問に出精するやうにした。これは固より必要に違ひないけれども、その結果は學問が偏固になり易い。詰り普通學のない専門學である。當時各宗の談林、學林、學寮等の講釋は佛教學としては部分でありました。局部的の學問でありました。各宗はいづれも宗學を以て佛教全體を解釋し、自餘の宗門を研究しない。であるから各宗に學問が興隆したが、それは佛教の部分々々を解釋してゐたもので、彼等宗教學者は極端な排他的思想を持ち互に排擠して居た。皆な自分天下で他の島の事を少しも知らない、それが宗學の弊風をなし、宗教者が偏固になり頑陋になつた。」

と。更にかくの如くして漸次民衆の生活から絶縁するやうになつて、つひにますます一般社會の同情を失ふやうになつたのが徳川末期に於ける佛教界の眞相の一面であつた事は、疑ふべくもないのである。而して良寛は實にかくの如き状態の下にあつた佛教界に入つて、彼自身の靈魂の救ひを求めようとしたのであつた。けれども彼の如く眞實な心を以て、我れみづからの救ひを求めざる者に對しては、當時の佛學は如何に精緻な理論を以てしても、欺きおほせる事は出来なかつた。彼の純眞な心は、やがてさうした欺罔を觀破せずには措かなかつた。美しき外形に飾られた内容の空しさを彼はつひに觀破らすには措かなかつた。

我見講經人、雄辯如流水、五時與八教、説得太無比、身稱爲有識、

諸人皆作是、却問本來事、一個不能使。

佛教十二部、部々皆淳真、東風夜來雨、林々見鮮新、何經不度生、

何枝不帶春、識取此中意、莫強論疎親。

かくの如くしてかの學匠と呼ばれ、高僧と尊ばれ、多くの寺祿に飽き、紫緋の法衣に誇ることを唯一の目的としてゐた時代の貴族的門閥的僧侶の群から脱出して、ひとり靜かに黒谷に隱遁して一向専心念佛の修行者となつたその昔の法然の如く、當時の佛教界の真相に通すれば通するほど、彼れ良寛の胸底にも孤獨隱遁を欲する心がよく／＼やみ難くなつて行つたのであらう。そして寺院佛教、教權の佛敎から離れて、彼はひたすらに彼みづからの魂の救ひを求め自由な孤獨の修行の道へますます／＼心ひかれるやうになつたのであらう。

さてかくの如き心機の轉向を深く自己の内部に感じつゝあつた良寛は、近江伊勢の國々を経て江戸に出で、更に武藏、上野、信濃の諸國を行脚して善光寺に詣で、糸魚川街道をとつて越後に入り、日本海岸に沿うて東し、つひに二十餘年振りであつた郷里の土を踏むことを得た。そして舊に變らぬ雄大な故國の自然裡に立つて、彼は恰も久しく別れてゐた慈母に抱かれたやうな涙の滲むうれしさなつかしさを感じたのであるが、それと同時に彼はあまり激しい人生流轉の跡に我にもあらず驚きもなし、悲しみもしたのであつた。かくて自然の悠久と人生の變轉とはこも／＼彼の孤獨な心を動かし、今更ならぬ想念の世界へ彼は又しても誘はれず居られなかつた。

それにして私達が今日不審に堪へない事實は、前にも引用した崑崙橋茂世と云ふ人の歸國當時の良寛の行動に關する記録である。

重複の嫌ひはあるが、茲に再び該記事を引用して見る。

「海濱郷本と云へる所に空庵ありしが、一夕旅僧一人來て隣家に申し彼空庵に宿す、翌朝近村に托鉢して其日の食に足るときは即ち歸る。食あまる時は乞食鳥獸にわかちあたふ。如此事半年、諸人其奇を稱し道德を尊んで衣服を送るものあり、即ちうけてあまるものはまた寒子にあたふ。其居出雲崎を去る事纔に三里、時に知る人在、必橋氏某ならんことを以て予が兄彦山に告ぐ。彦山即郷本の海濱に尋ねてかの空庵を窺ふに不居、只柴扉鎖すことなく扉蘿相まとふのみ。内に入りて是を見れば机上一硯筆、爐中土鍋一つあり。壁上皆詩を題しぬ。これを讀むに塵外仙客の情おのづから胸中清月のおもひを生ず。其筆蹟まがふ所なき文孝（良寛の俗名なりと稱す）なりしかば、是を隣人に告て歸る。隣人即出雲崎に言を寄す。爰に家人出で來り相伴ひてかへらんとすれども、良寛不隨。衣食を贈れども用ゆる所なしとして其餘りを返す。後行く處を知らず。年を経てかの五合庵に住す。平日の行ひ皆此如。實に近世の道僧なるべし。」

これは文化八年に出版された『北越奇談』中に記されたところであつて、而も筆者自身が良寛と間接の關係を有するらしいところから察すれば、此の記録はかなりに信を措く價值のあるものと見るべきであるが、それにしてはあまりに意外な事實である。

ふる里へ行く人あらばことづてむけふあふみちをわれこえにきと

草まくら夜ごとにかはるやどりにもむすぶはおなじふるさとの夢

かうみづから歌はないでは居られなかつたほどの彼でありながら、いよ／＼その二十餘年ぶりの懐かしい故郷に歸り着いて後の彼は、何故かうした態度に出なければならなかつたのであらうか。

この疑問については唯ひとり『彌彦神社附國上と良寛』の著者のみが説をなしてゐる。

「若し切に浮世の係累を厭ふとせば跡を山林に埋め寒山豊干の前蹤を趁うて足るべく、特に郷里に近きあたりに家門の羞恥を晒して蛙居せる理由畢竟解すべからず、或は彼が浮屠の門に入るは父以南との協定の結果にして、彼れは京師に於て父以南と會し、斡旋する所あり、以南が志しを得ず憤死するに及んで、即ち郷里に歸り、潦倒して爾後の三十年を送れるなりと想像を逞うせんか、以南の行動彼の如く幕府の嫌疑を惹くべくしてしかも山之家に事なく、良寛又特に生家と疎隔したりしを思へば、揣摩に過ぐと雖、亦一點の靈犀の良寛の面目に通彼るものあるが如し」

と。更に又

「彼れが旅中に於て以南の計報を接受したりしや否やは疑問なれども、改めて門庭舊の如く、唯だ其主人公を缺けるを見たりし時、新たなる愁は蜂の如く彼れが胸を刺し、彼をして生家の閨を越ふるの勇氣を没却せしめしも亦所なり、彼れは喪家の犬の如く、只管趨りて塵憂の累なき住處を求めぬ」

と。いづれも相當に據りどころのある想像であるやうに思はれる。

けれどもさうした理由がよし幾分あつた事が事實であつたにしても、單にさうした外的な理由だけで、どうしてあれ程までの徹底した態度に出ることが出来たであらうかは、頗る疑問である。

翻つておもふに、若しかの『北越奇談』中の記録にして信すべきものとするならば、さうした彼の行動にこそ、上來述べたところの彼の心機轉向の事實が一層明らかに窺はれると云ふものではなからうか。而も彼が論者の云ふが如き「跡を山林に埋め寒山豊干の前蹤を趁うて足る」と云ふやうな態度を端的に採用することなしに、郷里へまで僅に三里と云ふほどの近いところに隠れ住んでゐたと云ふ點に、更に／＼深甚なる人間味が味はれると云ふものではなからうか。

その郷本とやら云ふところの空庵に宿りを求めるに先立ちて、良寛はせめて一たびは彼の生家のある出雲崎の地を踏まなかつたであらうか。そして出離以後二十餘年ぶりの我が生家の門前に佇んで今更の如き感懐に暫くは我を忘れるやうなことがなかつたらうか。けれどもその場合彼の胸裡に、人々に對する懐しさがいよ／＼切に感じられたほど、彼はやがて生起すべきもろ／＼の世間的關係を豫想して、自己に對し又他に對して何とは知れぬ不安の念に襲はれずには居られなかつたのではなからうか。それほど彼の心は弱められては居なかつたらうか。

かくの如くして即かんとする心と、離れんとする心との間の迷ひと惱みの殆んど測り知れぬほどの深さに沈んだ彼は、つひに意を決して再びもと來た道に引き返したのではなからうか。心に深く自分

の愛せる人々の幸福を祈りながら、靜かに音もなく彼は彼みづからの道に歸り去つたのではなからうか。人々に對する愛着を激しく感ずれば感ずるほど、いよ／＼強く自己に對する不安を感じないでは居られなかつた彼は、むしろかくの如くみづからを孤獨の世界へ引き戻すことによつて安らげき愛を完うしようと思つたのではなからうか。

而も彼は何故にその場合直に跡を遠く山林に埋めようとはしなかつたか、何故にあれほど郷里に近い場所に、あれほど身すばらしい姿を留めなければならなかつたか。更に近親の人々からあれほどの扱ひを受けなければならぬやうになつたまでも、彼は何故あのやうな態度をとらなければならなかつたか。

けれども斯うした疑問は、私達の容易に解き得べきものではない。私達にはたと僅に所謂「弱きに徹して強くならうとした」彼、最も人間的な彼の姿がおぼろげに眼にうつるだけで、その内部に隠された深玄な意味に至つては、容易に捕捉さるべくもないのである。

徹底期の良寛

二十三年の孤獨な雲水の旅から、再び懐かしい郷里へ歸つて來た良寛は、どうしたわけか自分の

生家のあつた出雲崎には留らなかつた。しかも、あまり遠くへ去りも得ずして、其の附近二三里の間をあちらこちら身を容るゝに足る空庵の類を求めて轉々して居たらしい。出雲崎から海岸づたひに寺泊へ通じた國道筋にある郷本と云ふ村の空庵にも彼は暫く足を留めてゐた。傳へられる。出雲崎郊外の中山と云ふところの草庵にも居たことがあると云はれる。寺泊町照明寺側の密藏院にも居たことがわかる。又國上（かみ）の本覺院にも身を寄せてゐたと云はれる。而してかうした間に於ける彼の生活状態のどんなものであつたかについては、「寺泊驛照明寺境地密藏院假住之時」と題する彼自らの詩が最もよく語つてゐる。

觀音堂側假草庵、綠樹千草獨相親、時著衣鉢下市朝、展轉飯食供此身。

このやうにしてその日その日を送つてゐた間にも、彼はおそらく時に肉身の家々を訪ねもし、又舊知の誰彼と遇ひもしたであらう。そして何かにつけて一別以來のさまざまな變遷を見もし聞きもし語りもしたであらう。

二十年来郷里歸、舊友零落事多非、夢破上方金鐘曉、空床無影燈火微。

○
昨日出城市、乞食西又東、肩疲知囊重、衣單覺霜濃、舊友何處去、
新知少相逢、行到行樂地、松柏多悲風。

かくの如き感慨は又おそらくさうした生活の間に於て、彼が到る處で經驗しないでゐられなかつた

ところであらう。

わけても彼自身の生家——即ち出雲崎の橋屋山本家の其當時に於ける家運衰頹の有様は、如何に深い悲しみを彼の心に與へたかわからない。彼は「當町名主左衛門並同人悴馬之助義、年中不用の人集めいたし乗馬貳疋迄飼置、御武家同用の身持いたし、權威を振ひ、奢増長仕候に付、近年借金相當町方へは無體の借金割懸け、小前百姓困難爲致……」と云つたやうな忌はしい理由の下に、遠からず數多の町民から訴へられようとしつゝあつたほどの自家の現状、その當主たる自分の弟の生活状態等を見聞して、果して如何なる苦しみや悲しみを感じたことであらう。（『良寛遺跡めぐり』参照）

かくの如くして、前にも述べたやうに一方に於てます／＼強い愛着を感じながらも、他方に方ていよ／＼激しい自己に對する不安を感じないでは居られなかつた。良寛は、むしろみづから孤獨の世界へ引き戻すことによつて安らげき愛を完うしようとするの途に出たのであつた。かの遠く「跡を山林に埋め寒山豊千の前蹤を趁ふ」と云ふやうな一方へも走り得ず、又身を挺して愛する人々の難を救はうとする愛着の一方へも進み得ずして、郷里から程遠からぬほとりにせめては塵憂の累なき假住の類を求めて彷徨してゐた歸國當初數年間の良寛の生活こそ、まことにかの所謂即かんとする心と離れんとする心との間の悲しくいたまじき迷ひと惱みの好表徴ではないだらうか。

而して彼のかうした迷ひと惱みとが恐らく其の最高調に達せんとしつゝあつたであらうと思はれる頃、良寛は彼にとりての菩提樹下とも稱すべき靜寂の座を與へられたのであつた。

索々五合庵、室如懸磬然、戶外杉千株、壁上偈數篇、釜中時有塵、

竄裏更無烟、唯有東村叟、時敲月下門。

即ち文化元年に於て良寛が此の國上山の五合庵と呼ぶ小庵に住することを得るに至つたことは、實に彼の生涯を通じての最も重要な事件の一つであつた。何となれば此の時を劃して、良寛の生活はその最も光輝ある境地への進展を示したからである。

國上山は越後西蒲原郡にあつて、彌彦、角田の二山と並んで謂ふところの越後平野のたゞ中に巍然として聳ゆる孤圓の秀峰で、その半腹に建てられた國上寺阿彌陀堂の由緒や酒頭童子の傳説をはじめとして昔から名高い山である。此の山の風致については良寛その人の長歌が最も多くを語つてゐる。

足びきの國上の山の、山かけに庵をしめつゝ、朝にけに岩の角みち、ふみならしいゆきかへらひ、まさかゞみあふぎて見れば、み林は神さびませり、おちたきつ水音さやけし、そこをしもあやにともしみ、さつきには山ほとよぎす、打ち羽ふり來鳴きとほもし、長月のしぐれの雨に、もみち葉を折りてかさして、あら玉の年の十とせをすぐしつるかも

あしびきの國上の山を、たそがれにわが越え來れば、高ねには鹿ぞ鳴くなる、麓には紅葉ちりしく、鹿のごと音にこそなかね、もみちばのいやしく／＼にものぞかなしき

ゆふくれに國上のやまをこえ來ればころも手さむし木の葉ちりつゝ

五合庵は此の國上山の中腹に建てられた國上寺へ通ずる西坂の中段にある小さな庵であつた。貞享年間萬元阿闍梨の爲めに建てられたもので、阿闍梨が國上寺からそこへ退隱して後は毎日五合米の薄粥を以て禪定の藥餌に充てゝ居たところから其の名稱が與へられて居たのであつた。文化元年に良寛がそこへ住むことになつたのは、その年の正月前住義苗和尚が歿したからであつた。而もその庵の建てられた貞享年間から其の時までには百年以上たつて居たのだから、いかに修理が施されたと云つても、その廢頽の有様尋常でなかつた事が思ひやられるのであるが、それでも良寛にとりては生れて始めて安住の境を得たやうな心持がしたであらう。そしてその時良寛は四十八歳であつた。

來て見れば山ばかりなり五合庵

遠く跡を山林に埋めると云ふほどでなかつたにしても、少なくとも彼には——殊にその當時の彼には——始めて與へられたその禪定の道場が、いかに貴くなつかしく感ぜられたかは想像に餘りある。

いざこゝに我身は老いんあしびきの國上山の松の下かげ

十八歳で家を出てから三十年の永い漂泊生活の後に、彼は始めてかうした安定をこゝに見出したのであつた。

かくの如くして五合庵に住むやうになつてから、良寛の生活は内外共に日を追うてますます鮮やかにその徹底と醇化とを示した、小林繁樓氏が云つてゐる如く、まつたく「五合庵時代の良寛は實に彼が生涯の精粹」を示してゐるのであつて、今日多くの人々によつて殆んど良寛その人の生涯の全部

として尊崇されてゐるところのものも、主として此の五合庵時代の良寛の生活の外に出て居ないと云つてもいゝぐらゐである。彼の偉大を示す彼の詩歌の大半も、亦實に此の五合庵時代の詠出にかゝるところのものなのである。

おもふに五合庵に住むに至つて、良寛は始めて眞に隱遁の境地に到り得た如く感じたであらう。而して何よりも先づ彼れの生活に與へられたところのものは、過去に於て求むることいよく切にして、得るところ却て少なかつた眞の靜寂と安定との滋味に外ならなかつたであらう。寂寥に居て寂寥に驚かされない心、孤獨に住して孤獨に脅かされない心、人間を愛し自然を慕うて其の愛慕に囚へられない心——否むしろ眞に寂寥と孤獨とを享け味はふ心——人間と自然とを眞に安らかに愛しいつくしむ心、廓然として彼の心内に展げたところのものはさうした廣大な世界ではなかつたらうか。

とぶ鳥もかよはぬ山のおくにさへ住めば住まるゝものにぞありける

津の國の難波のことはいざしらす草のいほりにけふもくらしつ

山かげの石間をつたふこけ水のかすかにわれはすみわたるかも

かうした消極的な生活氣分に浸りながらも、彼の心靈の奥からはいつとはなしにほがらかな光明がさして來るのを彼は自ら感じないでは居られなかつた。

みねの雲たにかすみも立ちさりて春日にむかふ心地こそすれ

わびぬれど心はすめりくさのいほその日その日をおくるばかりに

而してつひに彼は

焚くほどは風がもて来る落葉かな

といふほどの大安心にまで徹底することを得たのであつた。これは實にあらゆるものを投げ出すことによつて、却て一切を得たところの心境である。自然に對し、自己の生命に對するこよなき信頼である。之れは決して消極的な自棄ではない。又決して絶望的な諦めではない。むしろこれこそ生命そのもの乃至自然そのものに向つての本當の信頼であり、こよなき感謝である。こよまで来て始めて人は眞に自己の愛し慈しむべきを知り、他の貴び愛すべきを知ることが出来る。良寛が眞に靜かな心を以て、自己を顧み、自己の運命を觀じ、自己を愛しはぐむやうになつたのも、おそらくかうした心境に到達したからであつたにちがひない。又それと同時に彼はそこまで行つて始めて、世の中を、他の人々を、惱みなく不安なくして、觀且愛することが出来たのであらう。

わが袖はしとゝにぬれぬうつせみのうき世のなかのことをおもふに

諸人のかこつおもひをせきとめておのれひとりにしらしめんとか

わがごとやはかなきものはまたもあらじとおもへばいよゝはかなかりけり

世の中をおもひくゝてはてゝはいかにやいかにならむとすらむ

長崎の森の鳥のなかぬ日はあれども袖のぬれぬ日ぞなき

身をすてゝ世を救ふ人もますものを草のいほりにひまもとむとは

こんな風に彼はなほ時あつて世の爲め、人の爲め、又自己の爲めに悲しみ傷むやうな事が少くなかつたが、而もその頃の彼は最早さうした哀傷の爲めに自らを破つたり亂したりする彼ではなかつた。悲しみながらも彼は、悲しむ自らを靜かに觀じ、靜かに味ひ、且靜かに慈しみ育てることが出来た。

如何なるが苦しきものと問ふならば人をへだつるこゝろとこたへよ

世の中のほだしを何と人とはゞたづねきはめぬ心とこたへよ

彼にはもうこの世の人間同志の相寄り相集つて營む生活の缺陷の因て來るところの那邊にあるか、而してそれに囚はれて苦しみ惱む人々の迷妄の何であるかも、明らかにわかつてゐた。けれども今日の彼はもはやその爲めに自らを世の所謂救世者、教化者の群に投ずる彼ではなかつた。今日の彼にはたゞ彼自らの救ひ、唯一個の我を生かすことの願ひがあつたばかりである。

いかにしてまことの道にかなひなむ千とせのうちの一日なりとも

いかにしてまことの道にかなはんとひとへにおもふねてもさめても

彼には唯この一途しかなかつた。自分一個の救ひ——けれども今日の彼には、かくして世に離れることによつてこそ、眞に世に即くことが出来るのだと信じられた。眞に自分ひとりを生かさうとすること、眞に自分ひとりを誠の道にかなはせようとする事、眞に自分ひとりを救はうとすること、それが同時に最も善く萬人を生かし、萬人を救ふ道を求めることだと信じられた。而してかく信ずることによつて、彼はいよゝ安らかな、自然な心もちで、その道へと進み得た。もはや他と我との間の

障壁はなかつた。もはや他の爲めと云ふこと、我の爲めと云ふこととの間の矛盾はなかつた。世間は彼であつた。彼みづからは同時に世間そのものであつた。いや、彼にはもう世間も我もなかつた。あらゆるものが一如であつた。あるがまゝの彼が一切であつた。あるがまゝの彼は同時にあらゆるべからざる彼であつた。

こんな逸話がその當時の良寛に就て傳へられてゐる。前にも述べた如く彼の生家出雲崎の橋屋は、その頃殆んど家政紊亂の極度に達してゐた。何人からの依頼があつたか、彼は一日その家の若主人馬之助（良寛には甥に當る）の放蕩を誠める爲めに出かけて行つた。しかし、いざ何が云はうと思ふと、どうしても言葉が出ないので、とう／＼三日を空しく費してしまつた。三日目には彼は何と思つたか、そのまゝ何も云はずに暇を告げた。が、立ち際に草鞋を穿かうとした手を控へて、彼は若主人を呼んだ。そして草鞋の紐を結んでくれと頼んだ。若主人も其の日に限つて不思議なことを云はれるものと思つたが、命のまゝ彼の草鞋の紐を結びにかゝつた。と、その刹那彼は無言のまゝぢつと甥の顔を見守つた。彼の頬には涙が傳はつてゐた。やがて又無言のまゝ彼は去つた。そのことあつてから橋屋若主人の生活が頓に改善されたと云ふのである。

（因に云ふ、その後良寛の生家橋屋に、町民との間の複雑な事情の下に起つた訴訟事件の結果、當主であつた良寛の弟由之は家財没收所拂、その子馬之助は名主役見習取立ちと云ふ悲運を見るに至つたが、併し由之なり馬之助なりの人間としての價値がその爲めに卑くはならなかつた。むしろさうした不幸の間にうけた良

寛の感化と、彼等自身の経験とのお蔭で、二人とも益々人間としての價値を高めて行つたと傳へられる。）以上の逸話によつても、良寛その人の當時に於て到入してゐた生活境地の如何なるものであつたかは、ほど想像するに難くない。何と云ふ尊い消息であらう。

更に五合庵在住當時に於ける良寛の日常生活の如何なるものであつたかについては、矢張何人よりも彼自身の詩歌が最も多くを語つてゐる如く思はれる。

あしびきの國上の山の冬ごもり、日に日に雪のふるなべに、行き來の道の跡もたえ、故さと人の音もなし、うき世をこゝに門さして、ひだのたくみがうつ繩の、唯一すぢの岩清水、そをいのちにてあらたまの、ことしのけふもくらしつるかも

さよふけて岩間の瀧つ音せぬは高ねのみ雪ふりつもるらし

あしびきの野積の山を、ゆくりなくわが越越え來れば、をとめらが布さらすかと、見るまでによを卯の花の、咲くなべに山ほとゝぎす、をちかへりおのが時とや來鳴きどよもす
郭公なく聲きけばなつかしみ此の日くらしつその山の邊に

わがいはほはもりの下いほいつともあさちのみこそおひしげりつゝ
國上山杉の下みちふみわけてわがすむいほにいさかへりてむ

いざこゝにわが身は老いむあしびきの國上の山の松の下いほ
あしびきの山べにをればすべをなみしきみつみつゝけふもくらしつ
あしびきの國上の山の山畑にまきし大根ぞあかずをせ君
さす竹の君がすゝむるうまさけにわれゑひにけりそのうま酒に
とふ人もなき山里にいほりしてながむる月のかげぞくまなき
山すみのあはれを誰にかたらしまれにも人の來てもとはねば
さす竹の君がみためと久方の雨間に出でゝつみし芹ぞこれ
子供らと手たづさはりてはるの野に若菜を摘めばたのしくもあるか
この宮のもりの木したに子ともらと手まりつきつゝくらしぬるかな
歌やよまむ手まりやつかむ野にやいでむこゝろひとつを定めかねつも
みちのべにすみれつみつゝ鉢の子を忘れてぞ來しあはれ鉢の子
風はすゞし月はさやけしいさとをどり明さむ老いのなごりに
さびしさに草のいほりを出て見れば稻葉うごかし秋風ぞふく
いひ乞ふと里にも出ですこの頃は時雨のあめの間なくしふれば
あきの夜もやゝはだ寒くなりけりひとりやさびし明しかねつも
雨の降る日はあはれなり良寛坊

飯こはむましばやこらむこけ清水しぐれの雨のふらぬまに〜
我がいほは國上やまもとふゆごもりゆきゝの人のあとさへぞなき
よもすがら草のいほりにわれをれば杉の葉しぬきあられふるなり
柴の戸のふゆのゆふべのさびしさをうき世の人にいかで語らむ
飯こふと里にもいすなりにけりきのふもけふも雪のふれゝば

青陽二月初、物色稍新鮮、此時持鉢孟、得々遊市郷、兒童忽見我、
欣然相將來、要我寺門前、携我步遅々、放孟白石上、掛囊絲樹枝、
于此鬪百艸、于此打毬兒、我打渠且歌、我歌渠打之、打去又打來、
不知時節移、行人顧我咲、因何其如斯、低頭不應伊、道得也何似、
要知箇中意、元來唯這是。

行々投田舎、正是桑榆時、鳥雀聚竹林、啾々我率飛、老農言歸來、
見我如舊知、喚婦澆濁酒、摘蔬以供之、相對云更酌、談笑一何奇、
陶然共一醉、不知是與非。

終日乞食罷、歸來掩蓬扉、爐燒帶葉柴、靜讀寒山詩、西風吹夜雨、
颯々灑茅茨、時伸双脚臥、何思又何疑。

玄冬十一月、雨雪正霏々、千山同一色、萬徑人行稀、昔遊總作夢、
艸門深掩扉、終夜燒檜柶、靜讀古人詩。

生涯懶立身、騰々任天真、囊中三升米、爐邊一束薪、誰知迷悟跡、
何問名利塵、夜雨草庵裡、双脚等閑伸。

瞑目千嶂夕、人間萬慮空、寂々倚蒲團、寥々對虛窓、香消玄夜永、
衣單白露濃、定起庭際步、月上最高峰。

天氣稍和調、鳴錫出東城、青々園中柳、泛々池上萍、鉢承千家飯、
心拋萬乘榮、追慕古佛跡、次第乞食行。

草堂雨歇二三更、孤燈寂照夢還辰、門外點滴聲丁冬、壁上烏藤黑繡紋、

寒爐無炭誰爲添、空床有書手慵伸、今夜此情唯自知、他時異日如何陳。

裙子短兮褊衫長、騰々兀々只麼過、陌上兒童忽見我、拍手齊唱放龜歌。

十字街頭乞食了、八幡宮邊正徘徊、兒童相見共相語、去年癡僧今又來。

石階蒼々蘇花重、杉松風薰雨霽初、喚取兒童村酒、醉後拂却數行書。

喬林蕭疎寒鴉集、東籬黃花兩三枝、千峰萬嶽唯夕照、老僧收鉢傍谷歸、

國上山下是僧家、魚茶淡飯供此身、終年不過穿耳客、唯見空林拾葉人。

即ち此の時代の良寛の日常は、かの『彌彦神社附國上と良寛』の著者が最も簡明に叙してゐるやうに「雨には蝸居し、晴れには後山に眞柴を樵り、又は岡に葦を摘み、時に兒童等と手龜を闘はし、迷藏戲を遊びて倦むことを知らず、日出ては則ち食を街市に乞ひ、日暮れば則ち宴臥す」と云つた風なものであつたことが明かに知り得らるのである。なほついでに右と同じ著者の詩趣に富んだ敘述を藉りて此時代の良寛の日常行事の一面を窺へば次の如くである。

「さはれ良寛が悟道は大乗の悟りなり、枯木寒岩に倚りて三冬の暖氣なきは彼れの唾棄する所、磁石の求めずして鐵を吸收するが如く彼の性情の天真流露は幾多の識者を其周邊に引付くるものありき、彼れが交遊の重なるものを數ふるに、居士左一、優婆夷有願の兩人は良寛が最も傾蓋の感ありしもの、牧ヶ花の解良氏、島崎の木村氏、渡部の阿部氏の如き、何れも文墨の資縁ありしと共に彼れが生活の大檀那なりしと云ふを得べく、其他新堀村の醫原田正貞、地藏堂の大庄屋富取氏の二氏皆應酬の作あり、行路の人の如き交際に非ざりしを知る、……(中略)……」

何れにしても彼れが五合庵の獨棲は世人の考ふるが如くしかく枯寂のものに非ざりしが如く、時々此等の檀那又は知己よりも寄贈もあり、彼は違あれば之等の檀那、若しくは知己を巡訪して或は主人と詩歌を鬪はし、或は内君に請うて衣服の洗濯若しくは、仕立替等を遂行し得たりしが如く、當時の彼れの勢力範圍は國上を中心として上は寺泊より或は地藏堂、下は彌彦、粟生津、吉田の方面に及び、時としては新飯田、白根にも達したりしものゝ如く、此の間の里人は毎戸良寛の來るを待受けて彼が無二寶珠たる鉢の子に聊かの淨財若しくは淨米を寄與するを常とせり、彼れの草庵にも此等の宗教者は屢々履を擧げて訪ひたりけむ、竹丘老人の草庵に來れるを喜び叔間に芋と李とを贈れるを謝する詩等もあり、然れども彼れの室裡の最大得意は彼れと共に手毬を遊び或は野邊に若草を摘まんことを強ふる兒童等なりしなるべく、彼等は此の稱僧に對して最も遠慮なく振舞ひ、其欲すると否とに拘らず、時々之を誘致して嬉戲の伴侶に供し、良寛も亦好んで之れに應じたりき、

彼の口碑の傳ふる所、彼れが兒童等と迷藏の戯れを爲すや自身鬼となり目を閉ぢつゝある中、兒童の尻に彼れを捨て、退散せるを知らずして、翌日に至るまで靜坐して包圍を待ちしと云ふが如き、彼れが如何に兒童を楽しましめんとて苦心したりしを見るべく、兒童等の彼れに懐き、彼れに傲りしもの亦故なしとせず、かくして彼れの心寂しからざる一日は國上寺の暮鐘と共に暮れて彼れは倦馬と共にこの草庵に歸るなり。

高砂の尾上の鐘の聲きけば今日の一日はくれにけるかも

これが彼れが五合庵裡の偽らざる日常行事なりき。」

然もかくの如く優遊自適の生活裡にありて、なほ良寛は決して無味枯淡石の如くなることからは、全く反對の境地にあつた。彼れは最後まで人間であつた。否むしろ最も淳真なる人間であつた。踊りたい時には彼は踊つた。笑ひたい時には笑つた。泣きたい時には彼は泣いた。酒を飲みたい時には彼は酒を飲んだ。歌ひたい時には彼は歌つた。彼は時には遊女の友となつてハヂキの戯れに餘念のない事さへあつたと傳へられる。

さす竹の君がすゝむるうま酒にわれゑひにけりそのうま酒に

風は清し月はさやけしいざともをどり明さむ老いのなごりに

いざうたへわれたち舞はむぬば玉の今宵の月にいねらるべしや

これほど赤裸に彼は興じました。

子供らとてまりつきつゝこの里にあそぶ春日はくれすともよし
これほど幼く彼は遊びもした。

山すみのあはれを誰にかたらしまれにも人の來ても訪はねば
柴の戸の冬のゆふべのさびしさを浮世の人にいかでかたらむ
あふ坂の關のこなたにあらねどもゆきゝの人にあくがれにけり
あづさ弓春になりなば草の庵をとく訪ひてまし逢ひたきものを

これほど切に彼は淋しがりもし、これほどやるせなき思ひで人間を慕ひました。

もろ人のかこつ思ひをせきとめておのれひとり知らしめんとか
わが袖はしとゞに濡れぬさよふけてうき世の中のことをおもふに

これほど深く彼は世を嘆き自らを悲しみもした。他人の不幸を聞き、他人の死に逢つても、彼は世の佛家の法を説いたり來世を語つたりするのは異なり、たゞひたすらに悲しみを共にし、涙を共にした。わけても彼れの生家出雲崎の橋屋主人由之（良寛の弟）及びその嗣子馬之助が、町民との間の訴訟事件の結果、由之は家財没收所拂、馬之助は名主見習取放ちと云ふ事になつたのは、良寛が五合庵に入つてから七年目即ち文化七年の出來事であつたが、その思ひもかけなかつた不幸が良寛その人の心にどのやうに烈しい打撃を與へたかは實に想像にあまりあるところである。尤もこのことについての良寛の述懐は、今日まで一つも發見されないけれども、さうしたものがなければそれだけ彼れの

心の悲痛の深さも一層おもひやられるのである。

わがごとやはかなきものはまたもあらじとおもへばいよゝはかなかりけり

まつたく彼はこれほどまでに自己の弱さに泣きもしたのであつた。

かくの如く笑ひたい時には笑ひ、踊りたい時には踊り、遊びたい時には遊び、泣きたい時には泣いた彼れでありながら、淨念一とたび彼れのたましひの奥底から湧き上る時には、

山かげの石間をつたふ苔みづのかすかにわれはすみわたるかも

わびぬれど心はすめり草のいほひと日ひと日をおくるばかりに

とふ人もなき山里にいほりしてながむる月のかげぞくまなき

この境地にまで透徹する嚴肅な彼であつた。幾度か躓き幾度か迷ひつゝも、彼は結局孤獨に安住して自らの性の淳眞を守り育つべき力を得たのであつた。彼れの此の底力は、凡て彼れの孤獨の修行から得られた。おそらく彼ぐらゐ深く孤獨を味はつた人は少ないであらう。試みにかの北國の永い永い冬を、幾尺となく積つた雪の底にうもれた山中の小庵に閉ぢこもつて、唯一人ぢつとしてゐた老貧僧の上を想像して見る。その孤獨、その寂寥——それは殆んど測り知るべからざる深さをおもはせる。しかも、さうした孤獨の底に住し、寂寥の底に居りながらも、彼れは最後まで人間心を失はなかつた。さうした徹底的な孤獨境に住しながらも、彼はつひにかの所謂悟り切つた冷たい理の人にはならなかつた。決して文字通りの世外の人にはならなかつた。むしろ彼はその孤獨の修行を積み積む

ほど、ます／＼強く彼は佛陀の愛を感得した。而して此の廣大なる佛陀の愛にいだかれ、身をまかせることによつて、彼は最後までも自然と人間とを愛慕しつゞけた。しかもなほ、此の切なる人間的愛慕を感じながらも、彼が餘の者と異なつてゐたのは、餘の者がその愛慕にひかされて走り、つひにはその囚ふるところとなるのが常であるのに、彼のみは最後までもその愛慕を我のうちに藏し、常に孤獨なる靈魂の寂光を以て之れを淨化しないでは置かなかつた點にある。

世のなかには果敢なきものぞ、足びきの山どりの尾の、しだり尾のながながし世を、百世つき五百世をかけて、よろづ世にきはめて見れば、えだにえだちまたにちまた、わかるひてたどる道なみ、立つらくのたつきも知らず、をるらくのすべをもしらず、とき衣のおもひ亂れて、浮き雲の行く方もしらず、言はんすべせむすべ知らず、沖にすむ鴨の羽色の、水鳥のやさかの息を、つきみつゝ誰にむかひて、歎かまし大津のへにゐる、大船のへつな解き放ち、とも綱ときはなち、大海原のへにおしはなすことの如く、をちかたや繁木がもとを、やい録のとがまもて、打ちはらふ事のごとく、五つの陰を、さながらにいつゝのかけと、知る時は心もいれず、事もなくわたしつくしぬ世のこと／＼も

うつしみのうつし心のやまぬかも生れし先にわたしにし身を

津のくにのなにはのことはよしをやしとあしをすゝめもろ人

彈指堪嗟人間世、百年行樂春夢中、一息截斷屬他界、四大和合名之躬、
爭名爭利竟底事、慢已慢人呈英雄、請看曠野凄風暮、幾多鬪體逐斷蓬。

道妄一切妄、道眞一切眞、眞外更無妄、妄外更無眞、如何終道子、
只管欲眞眞、試要底心、是妄乎、是眞。

かくの如く彼は明らかにかの所謂五蘊皆空、平等即差別、差別即平等の觀境に到入したのであるが、而も彼は此の空觀に執して冷やかなるが如き彼ではなかつた。彼は決して世の所謂白眼子でもなければ拗ね者でもなかつた。前にも述べた如く、彼はかくの如く生活の全體を否定することによつて、おのづからその最も眞實な辯護者とならざるを得なかつた。一切を否定する事によつて、彼は始めて一切の根源に冥合することを得たのであつた。

花無心招蝶、蝶無心尋花、花開時蝶來、蝶來時花開、吾亦不知、
人亦不知、不知不知從帝則。

彼はつひに一切を投げ出して、此の天真に依憑することによつて始めて全き生を得たのであつた。

おろかなる身こそなか／＼うれしけれ彌陀のちかひにあふとおもへば
かにかくにもなおもひそみ陀佛のものとちかひのあるにまかせて
わたしにし身にありせば今よりはかにもかくにもみだのまに／＼

かくの如く彼れは己れを空しくすることによつて、始めて全き自我の安立を得た。彼れみづからの救ひは、かくの如く彼れみづからの全部を投げ出すことによつて始めて得られた。即ち己れを空しくすることによつて、始めて全き自己が得られ生命の充實が得られたのであつた。

宅邊有竹林、冷々數千竿、筍迸全遮路、梢直斜拂天、經霜陪精神、
隔煙轉幽閑、宜在松柏列、何比桃李妍、竿直節愈高、心虛根愈堅、
愛汝貞清質、千秋希莫遷。

是れとりもなほさず當時に於ける良寛その人の心境でなかつたらうか。「心虚くして根愈々堅し」——その確立せる自我の根柢に立つて、彼は始めて廓然たる天地の生を楽しむことを得たのであつた。生命の充實——それは同時に愛でなくて何であらう。自我の安立は、同時に愛の安立であつた。彼は己れの全部を投げ出すことによつて全き己れを得、全き己れを得ることによつて、あらゆるものに對する安らかなる愛を得た。かくの如くして一切の否定者であり、一切に對する懷疑家であつた彼は、むしろその極端に到入することによつて、始めて眞實なる愛の讚美者となり、愛の人となつた。

焚くほどは風がもて來る落葉かな

一方に於てかくまで自然に對して謙虚なる自我安立の境に立つた彼は、同時に他方に於てその季節々々に於ける農夫勞役の畫像を掲げて供養祈念怠らざる念々感謝の彼であり、「墨ぞめのわが衣手のゆたならば浮世の民をおほはましもの」と自ら嘆じ、「身を棄て、世をすくふ人もますものを草の庵にひ

まもとむとはと」自ら責むるところの彼であり、又かの有名なる道元和尚の「愛語」を以て座右銘とした彼であり更に次の長歌一首によつて知らるゝ如き熱烈なる犠牲的愛的讚美者としての彼であつた。

あま雲のむか伏すきはみ谷くゞの、さ渡る底ひ國はしも、さはにあれども人はしも、あまたあれどもみ佛の、生れます國のあきかたの、その古への事なりき、猿と兎と狐と、ことをかはして朝には、ぬやまにあそび夕べには、林にかへり斯くしつゝ、年のへぬれば久かたの、天のみことのきこしめし、偽りまこと知らさんと、旅人となりて足びきの、山行き野ゆきなつみ行き、食しものあらばたまへとて、尾花折り伏せいこひしに、猿は林のほつえゆり、木の實を摘みてまゐらせり、狐はやなのあたりより、魚をくはへて來りたり、兎は野邊を走れども、何もえせずてありければ、汝はこゝろもとなしと、戒めければはかなしや、兎うからをたまくらく、猿は柴を折りてよ、狐はこれを焚きてたべ、まけのまに／＼なしつれば、ほのほに投げてあたら身を、旅人のにへとなりにけり、旅人はそれを見るからに、しなひうらぶれこいまろび、天を仰ぎてよと泣き、地にたふれてややありて、地うちたゞきまをすらく、いまし三人の友だちに、勝り劣りを云はねども、あれは兎を愛くしとて、もとの姿に身をなして、骸をかゝへてひさかたの、天津み空をかきわけて、月の宮にぞはふりける、しかしよりしてつかの木の、いやつき／＼に語りつき、言ひつき來りひさかたの、月の兎といふことは、それがもとにてありけりと、聞くわれさへに白たへの、衣の袖はとほりて濡れぬ。

要するに良寛は謂ふところの傑僧でもなく、謂ふところの學者でもなく、謂ふところの聖者でもなく、將又謂ふところの白眼子でも世外人でもなく、實に最も淳真なる人間であつた。最も博大なる愛の人であつた。彼は何よりも童男童女を愛したが、彼みづからも最後まで同じく幼な兒の如き淳真な人間だつたのである。

彼は或日例の如く路傍の子供等と交つてかくれんぼをして遊んでゐた。中に意地のわるい子供が一人あつて、彼が物蔭にかくれたのをそのまま置いてきぼりにしようと思ひ出して無理に他の子供を同意させた。子供等は去つた。そして數時間を経てもなほ彼等は歸つて來なかつた。しかし和尚は平然と元の通りにして子供等の「よし」と呼ぶのを待つてゐた。と、やがてそこを通りかゝつた人が、彼の其の様子を見つけて驚きのあまり「まあ、良寛様だのし、何してござる」と叫んだ。その聲に彼もおなじく驚いて「馬鹿、そんな大きな聲を出すと鬼が見つけるわ」と云つたと云ふ事が口碑に傳へられてゐる。何と云ふ淳真であらう。誰かよく斯くまでに他を欺かずに居る事が出來よう。

更にこんな話が傳へられてゐる。ある秋の末の日、良寛の庵へ乞食がやつて來た、しかし何一つ貰つて行くやうなものがないので、うろ／＼して居た。と、その様子を見た良寛は、その男が哀れになり、自分の着物を一枚ぬいで與へて、やさしく送り出してやつた。しかし、彼はあとでその男の身上を思ひやつて「いづこにか旅寝しつらむぬば玉のよはのあらしうたてさむきに」と云ふ一首の歌を詠んだと云ふ事である。何と云ふ貴く美しい愛の表現であらう。

次に又こんな話が傳へられてゐる。ある年の秋の月の晩のことであつた。良寛は興に乗じてとある芋畑の中をあちらこちらとさまよひ歩いてゐた。と、やがてその畑の持主がそれを見つけて、これはいつきり畑荒しだと思ひあやまり、突然鐵拳を揮つて彼の頭を撲つた。そしてそれだけで氣が済まずに、とう／＼彼を縛つて木の枝に吊し上げた。それでも彼は逆らはなかつた。が、とう／＼堪へられなくなつて自分は良寛である旨を白狀し、芋などを盗む氣は更になかつたが月が佳いのでぶら／＼歩いてゐたのだと告げて罪を謝した。百姓は始めてそれと知り、大に恥ぢ入つて深く罪を謝したが、和尚は少しも相手を咎めなかつたばかりか、むしろ氣持よさうに笑つて、左の如き一首の古歌を口ずさみながら飄然とそこを去つた。

打つ人も打たるゝ人も諸ともに如露亦如電、應作如是觀

何と云ふ虚心の沙汰であらう。

更に又こんな事が彼と親交のあつた解良榮重と云ふ人の手記によつて、傳へられてゐる。

「人曰く錢を拾ふは至つて樂しと。師（良寛）之れを聞き自ら地上に錢を捨て、やがて自ら之れを拾ふ、更に情意の樂しきなし。初め人吾を欺くかと疑ふ。捨つること再三、つひに其の在るところを見失ふ。師百計してやうやく拾ひ得たり。その時に至つて初めて樂しきを知る。且曰く人我を欺かずと。」

これは又何と云ふ無邪氣であらう。而も之れ決して世にありふれた禪僧輩の所謂奇行ではないので

ある。

前記解良榮重の手記中、更に／＼左の如く驚くべき數行が良寛の爲めに書かれてゐる。

「師余が家に信宿日を重ね、上下おのづから和睦し、和氣家に充ち、歸り去ると雖數日のうち自ら和す。師と語ることに一たびすれば胸襟清きを覺ゆ。師更に内外の經文を説き善を勸むるにもあらず、或は厨下につきて火を焚き、或は正堂に坐禪す。其の話詩文にわたらず、道義に及ばず、優游として名狀すべき事なし。只道義の人を化するのみ。」

茲に至つては、いよ／＼以て彼みづからの救ひを求めることが同時に萬人の救ひを求めることであり、無爲が同時に活動であり、離脱が同時に濟世であり、否定が同時に肯定であり、無我が同時に全我であると云ふ彼が隱遁の眞意義が完成され、徹底されたのであつた。今日の彼はもはや昨日の彼はなかつた。而も同時に元のまゝの彼であつた。ありのまゝの人間であつた。強ひて世外に立たうとする必要もなく、又強ひて俗と異つた奇行を敢てする必要もなかつた。本當の意味での淳眞な人間となつた彼は、一擧手一投足たゞ在りのまゝの彼であつた。

その當時に於ける良寛の日常生活の如何なるものであつたかについては、前に引用した『國上と良寛』の著者の敘述などで既に充分その一斑を窺ふことが出来るのであるが、更に五合庵在住當時の良寛について特に注目すべき事は、上述の如く人としての彼がしかく圓熟の妙境に到入しつゝあつたと同時に、一方に於ては今日私達の見るが如き稀有なる藝術家としての良寛が形造られつゝあつた事である。

ある。これは云ふまでもなく彼の人格がおのづから表現されざるを得なかつたからであるには相違ないが、しかもそれはその當時に於ける彼の非凡な修練を外にしては到底在り得なかつた程度を示してゐることも亦疑ふべくもないのである。これについて『短歌私抄』の著者齋藤茂吉氏も次の如く云つてゐる。

「良寛自身は、歌人の歌、書家の書は厭であると言つてゐるといふ話であるが、其歌人書家といふのは中途半端な歌人書家を意味するのであるから、良寛の言もさう力あるものではない。良寛は歌の素人を以て處したやうであるが、その本質に於て最早素人の域を脱してゐる。素人玄人などは外的に區別さるべきものでない。それから良寛の歌は野呂間な様でゐてなか／＼敏なところがある。それは修練の結果である。野呂間と妙境とは程度が違ふ。良寛の歌は素人くさいから佳いのでなくして、妙に入つてゐるから佳いのである。」

これはたしかに半面の眞を穿ち得た觀察である。而もそれはひとり良寛の歌についてばかりでなく、彼の詩についても書についても同様に半面の眞實を穿つてゐる。

今日なほ諸家に傳へ藏せられてゐる良寛の書翰その他の文書によつて知り得る如く、五合庵在住時代の良寛は、歌に於ても詩に於ても又書に於ても、獨り靜かに古人を友として學ぶことを楽しみ得たことは明らかである。

玄冬十一月、雨雪正霏々、千山同一色、萬徑人行稀、昔遊總作夢、

艸門深掩扉、終夜燒檜柵、靜讀古人詩。

おそらく斯うした生活の眞の味ひが、この頃になつて始めて彼には亂されず囚はれずに味ふ事が出来たのであらう。しかも、それがおのづから彼れ自身の藝術上の修練となつて行つたのもあらう。就中、古事記、萬葉集、寒山詩、詩經、離騷、陶淵明、李白、杜甫等は、彼れにとりては最も會心の書であつた事が明らかであり、且論語に至つては常に彼の懐にしたところだと傳へられる。彼れが解良叔問の囑に應てじ法華經の淨寫をしたのもそのころの事であつた。その他の經典や禪宗諸家の書に親しんだ事も疑ふまでもない事であらう。更に書に於て懷素の自敘帖と、道風のあきはぎ帖の臨摹によつて如何に彼れが書道の修練に努めたかは、今日傳へられる彼れの逸話の數々によつて充分に窺ひ知ることが出来るのである。かくの如くして一方に於て彼れの生活そのもの、人格そのものが、益々いみじき圓熟と徹底とを示しつゝあつたと同時に、その表現としての彼れの藝術が、愈々その修練を積み重ねつゝ、いつしか今日見るが如き稀世の程度にまでその品位を高めつゝあつたのである。而して今日傳へられてゐる彼れの詩に於ても、歌に於ても、又書に於ても凡て光輝ある大部分は、彼れの此の五合庵在住時代の産物であつた。

更に又それ々の方面に於ける良寛その人の價值が前に引用した「國上と良寛」中に擧げられてゐるやうな多くの尊崇者には勿論、その頃越後に來遊した江戸の學者龜田鵬齋の如きを始めとして少なからざる認識者を當時の識者間に有するやうになつたのもその頃からであつた。無爲なる彼れの教化が、むしろ最も積極的な意味に於て、その當時の地方民心の間に及びつゝあつた事も、亦今日よく窺ひ知ることの出来る事實である。しかも、良寛みづからは依然として唯彼れ一個の救済の爲めの生活に終始してゐた。彼れの藝術が超然として彼れ以外の世間の藝術の外に立つてゐたが如く、彼れが求道精進の一路もたゞひとへに彼みづからの他の何者の爲めのそれでもなかつた。彼れは依然として孤獨であつた。しかも、同時に彼れはおのづから凡ての人のうちにあつた。

更にその頃、良寛が親しく出入して居た西蒲原郡粟生津村鈴木家に、今なほ珍藏されて居る左の如き一葉の書付ぐらゐ、鮮やかにその當時に於ける良寛その人の日常生活の風姿を偲ばせるものは他に少なき。

第一 愛用具

頭巾、手拭、鼻紙、扇子、錢、手毬、ハチキ

第二 隨身具

笠、脚絆、カフカケ、上手巾、杖、掛絡

第三 行履物

著物、桐油、鉢、囊

右出立の砌、可讀之、於不然至不自由者也。

之れは一日良寛が鈴木家に來遊し午睡しつゝあつた間に、その家の主人隆造が、私かに彼の頭陀を

開いて見たところ、たま／＼さうしたものが目に留つたので、悪いことゝは思ひながら、そのまゝ自分の家の珍寶として秘藏して置いたものだと言ふ事であるが、僅に此の一葉の文書のうちに、その當時の良寛の生活の内外両面の眞實が、いみじくも活現してゐるではないか。

良寛その人の物質的の富と云つては、おそらくそれ以上にはなかつたであらう。しかも、彼は此の貧しき物質を以て、無上の満足を感じ、之れを以て無上の寶としてゐた。彼の行李既にかくの如し、庵室に於ける彼れが日常生活の一斑も之れによつて充分推知することが出来るのである。今日なほ諸家に藏されて居る彼れの多くの書翰によつても窺ひ得ることく、彼れが庵室に於ける衣食の料は殆んど凡て人の來つて與へ、若しくは自ら出で、乞ひ求むるところのそれによつて充たされてゐた。しかも、彼はかくして得たる貧しき法施の餘分をすらも、自らのものとしては蓄へて置く事が出来なかつた。そして努めて之れを貧しき人々に頒ち與へるのであつた。

是はあたりの人に候、夫は他國へ穴ほりに行きしが、如何致し候やら去冬は歸らず、子供を多くもち候、子供また十より下なり、此春は村々を乞食して其日を送り候、何を與へて渡世の助にも致せんと思へども、貧窮の僧なれば致し方もなし、何なりと少々此ものに御與へ可被下候

正月一日

叔問老

良寛

更にかくの如く自ら與へるものゝない時には、彼はかうした手数をまで厭はないのであつた。何と

云ふ懐しく、たふとい謙虚な愛の生活であつたらう。

往き來の人も稀な山中の一小庵裡、雨に又雪に寂然とたゞ獨り黙坐せる良寛、破襖笠衣一囊一鉢春に又秋に獨りとぼ／＼と村から村に淨施を乞ひ歩ける良寛、又は時に村童の群に入つて路傍に嬉戲しつゝ日の暮れるのも忘れて居た良寛、時には又雨中に立てる田中の一つ松にさへ限りなき憐れみを寄せて簞着せましを笠着せましをと獨ごちつゝ夕ぐれの泥路に去りあへず佇んで居た良寛——さうしたさまざまの幻像を思ひ浮べる時、私達にはかの五合庵時代の良寛が、時にはたまらなく懐しい此の世の人のごとくにも思はれ、時にはとても此の人間の世にはあり得ない神仙譚中の人物のやうにも思はれるのである。しかも、その人によつてその藝術を味はひ、その藝術によつてその人を味はふ時、滾々として盡きない一味の靈泉の常にそこから流れ來るを覺えずには居られぬのである。

谷かげの石間をつたふ苔みづのかすかにわれはすみわたるかも

其の清く貴い愛の滴りは、おそらく永遠に盡きることなく汚されることなく渴し求める者の手に掬ばれるであらう。

良寛の藝術

—歌、詩及び書—

上來述べた如く、さまざまに紆餘あり曲折ある徑路を辿つて來た良寛その人の生活が、四十八歳の時國上山中の五合庵と稱する空庵に彼の住するに至つて、初めて渾然たる圓熟乃至徹底の境致を示すことを得たのであるが、而もその事と共に今日の吾々に傳へられる更に一層貴き消息は、彼れの人格の斯くの如き渾成が同時に彼れの藝術の渾成であつたことである。良寛の藝術について論じた人々のうちには、或は彼れの和歌俳句を以て遺傳なりと説いた人もあり、又彼れの歌の長所を以て彼れの勉強の結果であり萬葉の呼吸に觸れて一意修練を重ねた結果であると解釋した人もあつた。吾々も無論半面に於てさうした事實を認めないでは居られぬのであるが、しかしさう云つたやうな如何なることよりも先に、此の事實―即ち良寛その人の藝術の渾成は彼れの人格の渾成を俟つて初めてなされたこと云ふ嚴肅なる事實に向つて滿腔の恭敬を捧げないでは居られぬのである。良寛をして今日吾々の接するが如き彼れの藝術を成さしめたのには、或は彼れの遺傳の力が少なくなかつたでもあらうし、又彼れみづからの修練も與つて力あつたでもあらう。けれども何よりも先づ彼れの藝術の貴い所以は、それが眞に彼みづからの身を以てなされた點にある。生活そのものゝ表現としておのづから創造された點にある。即ちそれは伊藤左千夫の云つた如く「作者の生活即ち歌なるがゆゑ」「作者の生活即ち歌の生命をなせるがゆゑ」であり、又小林榮樓氏の云つたやうに、それは「彼れが人物の根幹より自然に咲ける花」であり「靈性の物に觸るゝ刹那言端語端悉く天地悠々の律呂に共鳴して」出來たものだからである。

良寛みづからも自分に嫌ひなものが三つある。それは料理人の料理と詩人の詩及び歌人の歌とそれから書家の書であると云つてゐる如く、彼れの藝術の凡ては決して彼れみづからえらい、藝術家などにならう爲めにした修練や勉強などによつて出來上つたものではなくして、むしろ彼れみづからの人格と生活の向上の道程に於ておのづから創造されたところの自然の結果に外ならぬのである。言ひかへればそれは彼れその人の生活乃至人格おのづからなる表現に外ならぬのである。

前にも述べた如く今日吾々に遺されてゐる良寛の藝術の十中八九は、彼れの五合庵在住以後に於ける産出にかゝるものである。けれども、彼れが歌をよみ、詩をつくり、或は字を書いたのは、おそらくそれよりすつと以前からのことであつたらう。しかも、今日吾々の知り得る限りでは、彼れが最も深くその道に到入し、最も多くその産出を示したのが特に彼れの五合庵在住以後であつた事は、甚だ明らかな事實である。云ひかへれば彼れの藝術の大部分は、彼れみづからの人格の渾成期に至つて初めて成されたのである。又彼みづからも特にその道に向つて、進んで修練に努めたのも、その時期に至つてからの事であることも今更うささい考證を俟つまでもなく明らかな事實である。而して吾々が特に嚴肅な注意を要するのは、實に此の事實に向つてである。

即ち良寛の藝術は、あらざるべからざる時に至つて始めておのづから現れて來た藝術であつた。云ふまでもなく優れた藝術は凡て作者その人の生活の表現に外ならぬのであるが、特にそれが良寛にあつては、彼れの生活乃至人格が眞に抑へがたきまでにその表現を要する時期に達して、始めて突如

としてそののみいみじき表現を成したのであつた。これは誠に藝術の稀有な生成の仕方の方であるが、しかも極めて自然な事に属する。同時にそれは極めて貴い事柄である。又何人にも能ふかぎり深く味はるべき必要ある一大事である。

更に又彼れの藝術は、實になみ／＼ならぬ勉強と修練とに負ふところが甚だ多いことも、實に云ふまでもないことであるが、しかも其の勉強と修練とについても、吾々は尋常の字義にのみ拘泥して考へてゐてはならぬのである。

今日に於て知られる如く、彼が歌は萬葉について、詩は詩經、離騷、及び陶淵明、寒山、李白、杜甫について、書は懷素の自敘帖、道風のあきはぎ帖などについて如何に熱心な研究と修練とをなしたかは、全く明らかな事實である。しかも、さうした修練が彼れによつて最も多くなされたのは、實に彼れが五合庵に入つてから以後、即ち彼れの五十歳前後に於てである。彼れとても恐らくそれ以前に於て多少さうした方面に力を用ひたる事はあつたであらうけれども、しかも眞に内部から湧き上るほどの熱心を以てそれをなしたのは、どうもその頃になつてからの事であるらしい。隨て若し彼れのさうした研究や修練を單に尋常の字義によつて考へる時は、實に彼れを以て驚くべき晩學の人と看做さなければならぬのである。そして、さほどの晩學を以てして、しかもかほどの優れた藝術、かほどの不可思議力を持つた藝術を、かほどに速やかに渾成し得た事に向つて、殆んど奇蹟に對するが如き驚異を感じなければならぬのである。けれども、かうした徒爾なる驚きは、あまりに淺はかである。既に

／＼生活即ち藝術の境地に到入して居た、その當時の良寛を理解することの出来る者にとりては、それは不可思議であるよりもむしろ極めて自然な事と思惟されなければならぬ事であり、彼れの晩學はむしろ彼れにとりて最も適當な時期に於ける修行であつたと思惟されなければならぬのである。

孰謂我詩々、我詩是非詩、知我詩非詩、始可與言詩。

かう良寛自身も云つてゐる。箇中の消息にこそ彼れの藝術の貴さも、彼れの修練の意味も含まれてゐるのである。

要するに五合庵在住時代は、一個の人間としての良寛の圓熟期であり徹底期であつたと同時に、歌人としての良寛、詩人としての良寛及び書家としての良寛の修養期であり同時に渾成期であつた。而して一見極めて驚異とすべき此の事實は、眞によく彼れの生活そのもの、内部に味到するものにとりては、極めて自然な、極めて貴い事柄に屬するのである。云ひかへれば良寛は人間が出来たと同時に、詩が出来、歌が出来、書が出来た、そしてその何れもに於て同時に彼れは不朽の生命を得た——此の事實にこそまことに吾々にとりての無上の啓示が存するのである。

良寛は決して尋常の意味に於ける宗教家ではなかつた。彼れは謂ふところの智者學者でもなかつた。謂ふところの大徳でもなかつた。謂ふところの救世者でもなかつた。又決して謂ふところの説教者でもなかつた。けれども彼れの如く自己の宗教的生活に、若くは生活の宗教味に、しかく全的な、しかくいみじき、しかく懐かしき、しかく豊富な藝術的表現を興へた人は、おそらく古來極めて其の

類が少なからうと思はれる。彼れは經典を説かなかつた。彼れは哲學を興へなかつた。彼れは思想を傳へなかつた。しかし彼れは離れがたき懐かしさを以て宗教そのものゝ味はひを興へた。人間化した宗教味、生活そのものゝうちに融け込んだ宗教の味はひ——それを彼れは彼れの生活と藝術とを通じて、不盡に吾々に興へる。宗教生活の藝術化若くは人間化——此の一點に於て彼れは實に古來稀な一人である。

かの寂寥と人間味とがしみじき律呂をなして表現された良寛の藝術くらゐ吾々に向つて懐かしい、貴い宗教の滋味を興へるものが、他にどれほどあらうか。生そのものに對するまことの愛の表現として、最も淳真なる人間そのものゝ聲として、かくまでに人間化された宗教そのものゝ味はひを、他に何人か斯くまでに懐かしく吾々に興へてくれるであらうか。

良寛の藝術中特にその詩歌については、私は既に『良寛和尚詩歌集』の序文として掲げた解説に於て詳しく私見を披瀝したから、こゝでは唯彼れの書についてだけの一通りの解説を附記して置くことにする。

今日まで幾分その傾きがあるが、良寛の藝術中最も夙く且最も廣く世間の推賞するところとなつたのは彼れの書であつた。

かの儒者鈴木文臺のやうに良寛の生前に於て既に彼れの藝術的表現の三方面（詩と歌と書）を悉く能く理解し評價してゐた人もないではなかつたが、併し多數の人々にとりては矢張り能書の一點が特

に彼れについて重要視されて居たことは明らかである。それは彼れの行狀に關する逸話中、特に彼れの書に關するものゝ甚だ多く傳へられてゐる事實によつても推知されるところである。試みにそれら多くの逸話中わけて弘く傳へられてゐるもの三四を、『沙門良寛全傳』編者の採録したものゝ中から抜いて見れば次の如くである。

○ 龜田鵬齋嘗て文化の末年北遊し、禪師（良寛）の書を觀て以て逸品とし、往いて其廬を訪ひしに、適々其坐禪するに會ふ、侍坐半日、禪師其俗士にあらざるを知り、乃ち款語す、後鵬齋人に語りて曰く、吾良寛に遇ひて草書の妙を悟り、我が書此より一格を長ぜりと。

○ 是も鵬齋北遊の途次出雲崎の客舎に停節し、揮灑に従事せし時なりけり。會々某の囑に應じ雲浦一望樓の扁額を書するや、良寛の爲めに其運筆の誤謬を指摘せられ、大に書法の秘訣を悟入せりと。

○ 某村富豪某牡丹を愛育し、花時知人を招き觀花の宴を張るを例とす、禪師も亦花候を伺ひ往いて之を觀、一枝を折りて還れども、家人之を不問に附せりしが、一年、主人、禪師の書を得んと欲して未だ得る事能はざるを遺憾とし、花時に移牒して來觀を促す、師例の如く之を賞し、一二枝を折りて歸らんとす、主人大に怒り、奴僕に命じて一室に幽閉せしめ、僕をして謂はしめて曰く、主公師が牡丹花を竊折せしを怒る、宜しく文字を書して謝罪すべし、然らざれば幽室を出す能はざるなり

とて、紙箋、筆硯を供す、禪師冷然毫を授りて可欺不可罔也との意を寓せる俗語を書せり、主人之を見て忸怩、苦笑して幽室を開きしとぞ。

○ 禪師の書之を強請すと雖容易に諾せず、然れども興趣至れば筆を授りて縦横毫を揮ふ、或時七日市山田氏に至り、如何なる機嫌にかありけむ直に筆墨を借り、下女部屋の煤ばみたる明障子に鉢の子の歌一首を書し、淋漓たる墨痕を眺め會心の笑を洩して飄然立ち去れりと。

○ これも或處にて興懷益涌禁する能はざりしにや、請ふがまゝに畫仙紙、唐紙に對して縦横揮毫せしが、例の磊落洒脫筆に任せて紙外の疊にまで墨色淋漓たる大文字を書したり、後之を装して珍藏せりと。

○ 某年卷菱湖翁歸國し諸處にて揮灑に従事せしが、某素封家の需に應じ、金屏に揮毫し半雙を終へて別室に休憩せし際、一老頭陀飄然來りて堂に上り、筆を授りて残る半雙に忌憚なく揮灑し泛然として去れり、家人之を見て主人に告ぐ、主人の鑿鑿想ふ可きなり、卷翁之を聞き到り見れば、筆力遒健、風雪生動、非凡の傑作なりければ、主人に告げて追求せしむ、禪師追手の來るを見るや地上に坐して助命を請ふ、其儀にあらず、願くば同行せられたしとて拉し來り、堂に上せて款待し、卷翁

も主人も謝意を表したりと云ふ。

○ 長岡市本町三丁目大里傳四郎氏は屋號を上州屋といふ、市内老舗の一なり。其先代が良寛に請うて酢、醬油、上州屋と書したる招牌の揮毫を得て店頭の明障子に貼附し置きたるを、龜田鵬齋通行の際發見して店主に謂つて曰く、上人の眞筆を店頭に曝すは勿體なし、別に余が書して與ふべければ上人のは什襲珍藏すべしとて揮毫して與へたるに依り、其言の如くなしおきつるに、後年卷菱湖翁之を見て曰く、あな心憂の業や、余が一筆を揮ひて與ふべければ鵬齋先生のは秘藏しおくべしと曰はれたるに従ひたりしに、其後栃尾町の書家富川大晦も同様の招牌を書したるを與へ菱湖のものをば藏せしめたりと、今皆同家に保存す。

なほかう云つた風な良寛の能書に關する逸話は随分と多く人口に膾炙されてゐるのであつて、彼れが書に於て卓越してゐた事は、生前から既に一般の識るところとなつてゐたのである。而して此の一事については、彼れみづからも深くひそかに信ずるところがあつたらしく思はれる。

歌や詩に於て師を持たなかつた彼れは、書に於ても同じく何人をも師としたと云ふ形跡が存しない。しかも、彼れは歌に於ては萬葉集、詩に於ては寒山詩、陶淵明等の眞髓に觸れてなみ／＼ならぬ修練に努めた如く、書に於ても亦特に懷素の自敘帖、道風のおきはぎ帖等について實に非常な修練の功を積んだのであつた。而して彼れが書道に於けるさうした修練に従ひ、それによつてあのやうな稀

世の美を成し得たのも、又歌や詩に於けると同じく主として彼れの五合庵在任期以後、即ち彼れの人格乃至生活の圓熟期に入つてから後のことであつた。この事は歌や詩に於けるとおなじく、實に彼れの書の優越性を理解する上に最も重大な事柄でなくてはならぬのである。

おもふに良寛の如く能く懷素や道風を學んだ人は、古來甚だ少ないのであらう。しかも、それと同時に良寛の如く内發的に、自然に、自由に、淳真に、無邪氣に字を書いた人は甚だ少ないであらう。良寛の歌も詩も、良寛みづからの筆蹟を通してななければ、眞にその味はひが味はひ盡せないと思はれるほど、それほど彼れの書は内發的である。彼れの書のいゝところは無論書法そのもの、修練に負ふところが多いのであるが、しかも彼れの書に於て眞に貴いものは、書に對する彼みづからの態度である。おそらく良寛の書くらゐ筆者その人の主觀の表現された書は古來甚だ少ないであらう。良寛の書は、實に彼れの歌や詩とおなじく、良寛その人の表現である。良寛くらゐ筆者その人の氣分や感情の表現された書は殆んどない。最も嚴密な意味で書の藝術味を發揮し得た點で、良寛はおそらく古今獨歩の稱に恥ぢないであらう。良寛の書の美しさは決して形式美だけではない。それは常に生きてゐる。常に歌つてゐる。そこに良寛の書の獨特性がある、良寛の書については或は「我邦の古代は姑く置き近世では龜田鵬齋、僧良寛、僧寂嚴の草書、佐々木志津馬の楷書大字は支那人に見せても恥しくない」(犬養木堂氏)とか、或は「張懷の逸體あり」(鈴木文臺)とか、或は「肉多からずして筋力繁張し、稜角を脱して開蓋自在なる我良寛が書の如きは正に是れ神來の逸品、多く其數を見ざるなり」

(山崎良平氏)とか、古來多くの人々によつて讚辭が與へられてゐる。併し何と云つても、矢張良寛の書に於て何人も企及しがたしと思はれる點は、その表現的であり、内發的であるところにあると思ふ。身を以て書いた字、人格を以て書いた字——それが良寛の書ではないだらうか。而して何等の説明なしに、何等の理解なしに、觀者を化して常にある貴くなつかしい心境に入らしむる魅力を有する點に於て、おそらく良寛の書の如きは古來甚だ稀であると云つていゝのではなからうか。

斯う云ふ見地から、吾々は雜誌「日本及日本人」(大正七年三月十五日號)に掲げられた井泉居士人の良寛の書についての左の如き評語に、最も深き共鳴を覺えるのである。

「草書といへば、一般に纖妙軟弱なものと考へられる傾きのある既成觀念が、禪師の草書に依つて快く打破せられることを感じた。自由奔放などと云ふ常套的な言葉では形容し盡されないやうな、もつと本質的な自在無碍の味ひがある。紙、筆など云ふ物質が、物質としてのこだはり、を失つて作者の心にすつかり支配されてゐる。禪師が紙に向ふ時は、恐らく今書を書くぞといふやうな氣持でなしに、たゞ其の刹那の緊張した心のリズムが、一種の線をなして紙の上に踊つたものであるらし

501

まつたく此の評家の云つたやうに、「禪師の書ほど藝術的な香氣の高い書は他にあまり」と思はれる。その藝術的と云ふ意味は、表現的と云ふ意味と相通する。良寛の書は同時に彼の生活に外ならぬ。即ち彼れの書は彼れみづからの生活がもつてゐたものをもつてゐた。彼れの書のいゝところは、

結局彼れその人のいゝところに外ならぬのである。

かくの如く考へて來ると、良寛と云つた一個の貧僧が、歌、詩、書と云ふ各種の藝術に於て、殆んど同時にかほどまでの優越性を示すに至つた事は、まったく驚異に値する事實のやうに思はれる。しかも、その各方面について、眞によくその優越性の根源を究め考ふる時、むしろそれが最も自然な結果であつた事を理解することを得るのは、吾々みづからにとりては誠にありがたく貴い事である。要するに良寛は良寛であつて、詩人でも歌人でも又書家でもなかつた——そこにこそ良寛その人の貴さがあるのではないか。而してその事を最もよく理解することの出来る者に、良寛の藝術も亦最もよくその功德を與へるにちがひない。

晩年及び死

行く水はせけばとまるをたかやまは、こぼせば岡となるものを、過ぎし月日のかへるとは、ふみにも見えすうつせみの、ひとにもきかすいにしへも、かくしあるらし今の世も、かくぞありける後の世も、かくこそあらめかにかくに、すべなきものは老いにぞありける。
ねもごろのものにもあるか年つきは山のおくまでとめて來にけり

かう彼みづからも悲しみ歌つてゐる如く、心身脱落の徹底境に窮極の安住を得つゝあつた良寛の上にも、自然がもたらす老衰の兆は到底まぬかるべくもなかつた。しかも、生きの身の、孤獨なる彼には、依然として薪水の勞を全然脱し去ることは出来なかつた。かくて、彼は限りない離れがたさを感じながらも、結局山を下つて人住む里近くに居を求めずには居られなかつた。彼はつひに意を決してなつかしい國上の山を下りた。十四年の永い間の古巢であつた五合庵を見すてた。

あしびきの國上の山の、山かげの森の下やに、幾としか我が住みにしを、唐ごろもたちてし來れば、夏くさの思ひしなえて、夕づゝのか行きかく行き、そのいほのかくるゝまでに、その森の見えずなるまで、玉梓の道のくまごと、隈もおちすかへり見ぞする、その山の邊を。

さうした悲痛の思ひをいだきながらも、彼はつひに山を下りた。しかも、彼はなほさすがに全然そこを離れ去ることが出来ないで、かなりの不自由をしのびながらも、山麓に近く建てられた乙子宮と呼ぶ小さな神社の境内の一隅の極めてさゝやかな庵に身を容れることゝした。それは文化十四年、彼れが六十一歳の時であつた。

一説に、良寛が五合庵を出で、山麓なる乙子湖畔の草庵に移り住むやうになつたのは、老衰の結果薪水の勞に堪へなくなつたからばかりでなくして、むしろ彼自身の過ちから火を失して五合庵を焼いてしまつたからであると云はれてゐる。即ちその歳の春彼の庵室の床下に彼れの知らぬ間に筍が生へ、それがいつとなしに伸び立つて、つひには床板の隙間から敷菰を破つて頭を擡げるまでになつた

のを見出した良寛は、たまらなくそれがいとしくなり、朝に夕にその伸びゆくのを眺め楽しんでゐたが、一日その尖頭が屋根裏にまで達したのを見るや、これと云ふ深い考へもなしに、いきなりあり合せた蠟燭に火を點して其の可憐なる筈の爲めに屋根に焼穴をこしらへてやらうとした。そして其の美しくしかも愚かなる企てによつて、彼は一舉にして彼みづからの棲處の全部を烏有に歸せしめたのであつた。彼が彼みづからの無上の安住處を離れず居られなかつたのも、つまりはかうした彼自身の美しい過失からである——このやうに口碑の一つは語つてゐるのである。

けれども此の口碑以上に信すべき種々なる資料より推して考へると、良寛の此の美しい逸事の行はれたのは彼れが出雲崎郊外の中山と云ふところの草庵に假住してゐた間のことで、これと彼れの五合庵を出た事とを結び付けたのは後人の附會によるものらしく思はれる。尤も五合庵そのものも現在のそれは今日より遠からぬ以前に改築されたものに外ならぬが、しかし此の改築も信すべき人々の語るところによれば、そのかみの建物の天然に朽廢した跡に、すつと後年になつて建てたものだと言ふことであるから、良寛がそこを去つたのも、一つには彼れみづからの老衰の爲めであつたと共に、一つには庵室そのものゝあまりに朽頽して居るに堪へなくなつた爲めであることが想像されぬでもないのである。

さて、かくの如くして居を人里近く移しはしたものの、良寛その人の生活にはさう大した變化の起らなかつたことは疑ふべくもない。それは

この宮の森の木下にこどもらと手まりつきつゝくらしぬるかな

乙宮の森の木下にわれ居ればぬでゆらぐもよ人來たるらし

國上の山の麓の乙宮の、森の木下にいほりして、朝な夕なに岩が根の、こゝしき道につま木こり、谷にくだりて水を汲み、一日／＼に日を送り、おくり／＼ていたつきの、身につもれどもうつそみの、人し知らねばはひ／＼て、朽ちやしなまし萩のねもとに。

かうした彼みづからの歌によつてもほど知られるのであるが、しかもそれと同時に彼れの肉體上の老衰がいつとはなしに彼れのうちに一味の心弱さを加へんとしつゝあつたことも窺ひ知ることが出来るのである。

「良寛の影はかゝる間に次第に里閭に稀に見らるゝことゝなれり、彼れは漸く老いぬ、托鉢に出るにも懶く、知己交遊も多くは世を謝したれば、何處に詩趣徵逐の跡を尋ねんよすがもなし、従つて彼れの小庵を訪ふ人も追々乏しくなり行きたれば、彼れは無聊に堪へ兼ねて

乙宮の森の下庵訪ふ人は珍らしもよ森の下いほ
と詠するに至れり、集中に老を歎く心、人を待つ心の詩歌の多きは、晩年の彼れの心情を流露したるものなる可し」

かう小林繁樸氏も云つてゐることく、その頃の良寛は人里に近くしていよ／＼孤獨のあはれを感ず

る時が多くなつて行つた傾がないでもない。その頃彼れが友阿部定珍に寄せたものと思はれる左の如き書翰について見ても、その頃の彼れの何事につけても心弱くなりつゝあつた一端を窺ふことが出来る。

九日の朝の御齋に参上仕度候、しかしながら獨身の事に候間、いかやうの事有之候て違ひ候とも、人を以て御知せ申候事も致しかね候、且老病の身の上に候へば、御推察可被下候、明日は人にやくそく致候事御座候間、参上致兼候。

いひこふと我が來て見れば萩の花みぎりしみに咲きにけらしも

八月朔日

良 寛

定 珍 老

○
先日は久々御意を得、喜悅不斜候、其をりからくあたりて強て御歸申候、甚心なう存候、是は僧の病中に物にうるさく御まかなひ、如何か御不自由にあらんと思候へば、わりなくも御歸申候、御意にかけ不可被下候、近日中に天氣を見合、一日御來臨待入候、あまり食事不進候間、梅干御たくはへ御座候はゞ少々たまはりたく候。以上。

十月十日

良 寛

定 珍 老

かくの如くして、年一年彼れの心身の上に老衰の兆が著しくなつて行つた。そして乙子神社境内の草庵へ移つてから十年目に、彼れは再びわが身の置きどころを、一層人里に近く求めないでは居られなかつた。かくて文政九年彼れはつひに懐かしい國上の山から全く離れて、以前から彼れの尊崇者であつた三島郡島崎村の能登屋木村元右衛門の裏庭に建てられてあつたほんの名ばかりの別宅へ移り住むことになつた。それは彼れが丁度七十の歳に達した時であつた。

けれども彼れが國上山麓の草庵を去る時の連懐として

えにしあらば又も住みなむおほととの、杜の下のほいたくあらすな

と云ふ歌があつたり、又島崎へ移つてから友定珍に寄せた書翰に

如仰此冬は島崎のとやのうらに住居仕候、信にせまくて暮しがたく候、暖氣成候はゞ又何方へもまゐるべく、酒、煙草、茶恭受仕候。早々以上。

しはす二十九日

良 寛

定 珍 老

と云ふのがあつたりするところから考へると、彼れが這般の島崎轉住の如何に彼れの本意でなかつたか知られるのである。即ち肉體上の老衰から、彼れは餘儀なく世間の助けを求めてゐたとは云へ、彼れのたましひはます／＼切に山間の孤獨と靜寂とを慕ひ求めてやまなかつたにちがひない。

しかも、彼れはつひに人間であつた。一方に於て彼れのたましひがしかく強く孤獨と靜寂との幽玄

境を慕ひながらも、他方に於て彼れの肉體上の老衰が加はると共に彼れの情意はいよ／＼切に人間を愛慕しないでは措かなかつた。云ふまでもなく彼れは既に／＼遠く執着から放たれてゐた。しかも情外の情、欲外の欲は、一層強く彼のうちに燃えないではゐなかつた。執着を絶して、しかもますます強い愛が、彼のうちにいよ／＼いちじるしく感じられた。

良寛のこの晩年に於ける清くして、しかも最も切なる人間愛慕の表現は、彼れの唯一の弟子とも稱すべきかの貞心尼との關係に於てその最高潮を示して居る。この貞心尼の素性は、西郡氏の「良寛全傳」に従ふと大凡次の如くである。

「貞心尼は越後長岡藩士奥村某の女、幼にして淨業を慕ふ、妙齡に至り北魚沼郡小出郷の醫師某に嫁し、幾年ならずして不幸所天を喪ひ、深く浮世の無常を觀じ、つひに柏崎町洞雲寺泰禮和尚に従ひて剃度を受け、後不求庵に住す、是より先良寛禪師の高徳を敬慕せしが、文政の末年禪師を島崎村に訪うて和歌を學び且道義を受く、師其の敏慧にして和歌に堪能なるを愛し、懇切に指導せしと、始めて値遇せしは師七十歳貞心二十九歳の時なり、爾來六星霜、花に鳥に月に雪に風に雨に往訪して敬事し、歌を練り道を講じ其の傾會を受け、禪師終焉の際、所謂末期の水を呈せしは、弟子としては此の尼公のみなりきと、又禪師の詩歌の今日に傳はりしも尼公の蒐集せし力多きに居る。又禪師の肖像として後世に遺るもの亦此の尼公の描寫せしものなり、肖像に題せる歌に曰く
うき雲の姿はこゝにとゞむれど心はもとの空にすむらむ

と、明治五年二月十日寂す、壽七十五、辭世の歌に曰く

來るに似て歸るに似たりおきつ波立ち居は風の吹くに委せて

と、其禪師と贈答の和歌傳記等を手録せしものを「蓮の露」といふ……云々……」

これだけでも良寛と貞心との關係が、なみ／＼ならぬものであつた事はほと察しられるのであるが、しかもかの「蓮の露」のうちに收められた此の二人者の贈答歌を味誦する時、そこにいみじくも表現されてゐる或るものに對して吾々は殆んど驚異の眼を刮かすには居られぬのである。

師常に手毬をもて遊び給ふとき

これぞ此のほとけのみちにあそびつゝつくやつきせぬみのりなるらむ

御かへし

つきて見よひふみよいむなこゝのとをとををさめて又始まるを

はじめてあひ見奉りて

君にかくあひ見ることのうれしさもまださめやらぬ夢かとぞおもふ

御かへし

夢の世に且まどろみてゆめを又かたるも夢もそれがまに／＼

いとねもごろなる道の物がたりに夜もふけぬれば

白たへこのころもでさむし秋の夜の月なかぞらにすみわたるかも

されどなほあかぬこゝちして

向ひゐて千代も八千代も見てしがな空行く月のこと問はずとも

御かへし

心さへかはらざりせばはふつたのたえず向はむ千代も八千代も

いざかへりなむとて

立ちかへりまたもとひこむ玉銚の道のしば草たどりくくに

又もこよ山のいほりをいとはずば薄尾花の露をわけく

ほどへてみせうそこ給はりけるなかに

君や忘る道やかくるゝこのごろは待てどくらせど音づれもなき

御かへしたてまつるとて

ことしげきむぐらのいほにとぢられて身をば心にまかせざりけり

山のはの月はさやかにてらせどもまだはれやらぬ峰のうすぐも

こは人の庵にありし時なり

御かへし

身をすてゝ世をすくふ人もますものを草の庵にひまもとむとは

久方の月の光のきよければてらしぬきけりからもやまとも

(貞)

(良)

(貞)

(良)

(良)

(貞)

(同)

昔も今もうそもまこともはれやらぬ峰のうすぐもたちさりてのちのひ
かりとおもはずやきみ

春の初つかたせうそこ奉るとて

おのづから冬の日かすのくれゆけばまつともなきに春は來にけり

われもひともうそもまこともへだてなくてらしぬきける月のさやけき

さめぬればやみも光もなかりけりゆめちをてらす有明の月

御かへし

天が下のみつる玉よりこがねより春のはじめの君がおとづれ

てにさはるものこそなけれのりの道それがさながらそれにありせば

御かへし

春風にみ山の雪はとけぬれど岩まによどむ谷川の水

み山べのみ雪とけなば谷川によどめる水はあらじとぞおもふ

御かへし

いづこより春はこしぞとたづぬればこたへぬ花にうぐひすのなく

君なくば千たび百度數ふとも十づゝ十をもゝとしらじを

御かへし

(同)

(貞)

(同)

(同)

(良)

(同)

(貞)

(良)

(貞)

(同)

いざさらばわれもやみなむこゝのより十づゝ十をもゝとしりなば

(良)

いざさらばかへらむといふに

りやうせんのしやかのみ前にちぎりてしことな忘れそよはへだつとも
りやうせんのしやかのみ前にちぎりてしことは忘れずよはへだつとも

(良)
(貞)

聲韻の事を語り給ひて

かりそめのことゝおもひそこのことば言のはのみとおもほゆな君

(良)

いとま申すとて

いざさらばさきくてもせよほとゝぎすしばなく頃は又も来て見む

(貞)

うきくもの身にしありせば時鳥しばなくころはいづこにまたむ

(良)

秋はぎの花さくころは来て見ませいのちまたくば共にかさむ

(同)

されど其ほどをまたず又とひ奉りて

秋萩の花咲くころを待ちとをみ夏草わけて又も來にけり

(貞)

御かへし

秋はぎのさくをとをみと夏草の露をわけくとひし君はも

(良)

或夏のころまうでけるに何ちへか出給ひけん見えたまはずたゞ

花かめに蓮のさしたるがいとほひてありければ

来て見れば人こそ見えぬいほもりてにほふ蓮の花のたふとさ

(貞)

御かへし

みあへする物こそなけれ小かめなる蓮の花を見つゝしのばせ

(良)

御はらからなる由之翁のもとよりしとね奉るとて

極樂のはちすの花のはなびらをよそひて見ませ麻布小袢

(貞)

御かへし

極らくのはちすの花のはなびらをわれにくやうす君が神つう

(良)

いざさらばはちすの上のうちらむよしやかはづと人は見るとも

(同)

五韻を

くさぐさのあやをり出す四十八もじこゑとひゞきをたてぬきにして

(同)

たらちをの書き給ひしものを御覽じて

みづくきのあと涙にかすみけりありし昔のことを思ひて

(良)

民の子のたがやさんといふ木にて、いとたくみにきさみたる物
を見せ奉りければ

たがやさむいろもはだへもたへなれどたがやさんよりたがやさんには

(同)

ある時與板の里へわたらせ給ふとて、友だちのもとよりしらせ

たりければ急ぎまうでけるに、明日はやごとなき方へわたり給ふよし、人々なごりをしみて物語りきこえかはしつ、打とけて遊びける中に、君は色くろく衣もくろければ、今よりからすとこそまをさめと言ひければ、げによく我にはふさひたる名にこそと、打ち笑ひ給ひながら

らづこへも立ちてを行かむあすよりはからすてふ名を人のつくれば

とのたまひければ

山がらす里にいゆかば子がらすも誘ひて行け羽ねよはくとも

御かへし

誘ひて行かば行かめどひとの見てあやしめ見らばいかにしてまし

御かへし

鳶は鳶雀は雀さきはさぎ鳥はからす何かあやしき

日もくれぬれば宿りにかへり、又あすこそとはめとて

いざらばわれはかへらむ君はこゝにいやすくいねよ早あすにせむ

あくる日はとく訪ひ來給ひければ

うたやよまむ手まりやつかむ野にやいでむ君がまに／＼なしてあそばむ

(貞)

(良)

(貞)

(良)

(貞)

(良)

御かへし

うたもよまむ手毬もつかむ野にもいでむ心ひとつを定めかねつも

(良)

秋はかならずおのが庵をとふべしとちぎり給ひしが、心地例らねばしばしためらひてなどせうそこ給はり

秋はぎのはなはさかりもすぎにけり契りし事もまだとけなくに

(良)

其後はとかく御心地さわやぎ玉はず、冬になりてたゞ御庵にのみこもらひ給ひて、人々たいめんもむづかして、うちより戸さしかためてもしの給へる由、人の語りければ、せうそこ奉るとて

そのまゝになほたへしのべ今さらにしばしのゆめをいとふなよ君

(貞)

と申し遣しければ、その後給はりけること葉はなく

梓弓春になりなば草の庵をとくとひてましまひたきものを

(良)

かくてしはすの末つかた俄に重らせ給ふよし人のもとよりしらせたりければ、打おどろきて急ぎまうで、見奉るに、さのみ惱ましき御けしきにもあらず、床の上に坐しゐたまへるが、おのがまゐりしをうれしとやおもほしけむ

いつ／＼とまちにし人は來りたり今はあひ見て何か思はむ

(良)

むさしのくさばのつゆのながらへてながらへはつる身にあらねば

(良)

かゝればひる夜、御片はらに在りて御ありさま見奉りぬるに、たゞ
日にそへてよわりによわり行き給ひければ、いかにせんとてもかく
ても遠からずかくれさせ給ふらめと思ふにいとかなしくて

生き死にの界はなれて住む身にもさらぬわかれのあるぞ悲しき

(貞)

御かへし

うらを見せおもてを見せてちるもみち

(良)

こは御みづからのにはあらねど時にとりあひのたまふいとく
たふとし

かの『短歌私鈔』の著者齋藤茂吉氏も其の書の中で「良寛と貞心尼との因縁は極めて自然である。この事を思ふ毎に予はいゝ氣持になる。良寛は貞心尼に會つて、ます／＼優秀なる歌を作つた。その歌は寒く乾き／＼つたものでなく、戀人に對するやうな温い血の流れてゐるものである。人間は生のであるから、いくら天然を愛したとて、天然は遠慮なく人間に迫つて來る、そこにゐて心細くないなどといふのは嘘である、良寛は老境に達してから淨い女の貞心から看護を受けた、本當の意味の看護である、良寛にとつては、こよなき Gekokmik の一つであつたらう、世にも尊き因縁である」と

讚嘆してゐるが、まつたく此の良寛と貞心尼との交りほど純にしてしかもあたゝかく、人間的にしてしかも執着なく、靈的にしてしかも血の通つた、美しく、尊く、いみじき愛は、此の世には殆んど有り得べからざる事の如くに思はれる。

いざなひて行かば行かめど人の見てあやしめ見らばいかにしてまし

何と云ふ尊い幼なさであらう。

うたやよまむ手毬やつかむ野にやいでむ君がまに／＼なしてあそばむ

何と云ふあたゝかさであらう。

梓弓春になりなば草の庵をとくとひてましあひたきものを

何と云ふ淳真であらう。『短歌私鈔』の著者の如きも此の一首を評して「急促し極まつた然も流動し止まざる純正不二の心のあらはれである。」と隨喜し、「死に近き老法師の良寛が若い女人の貞心尼に對した心は眞に純無礙であつた」と讚嘆してゐる。まつたくかくまでに淳真な純潔な人間的愛のかくまでに切實な表現は、さう無暗と在り得るものではない。そこには實に涙のこぼれるほどの貴い美しさがある。そして良寛の生涯は晩年の此の奇蹟に近い美しい愛の表現によつて、どれくらゐ其の貴さを高めてゐるかかわらない。それを通して彼れはまことに淳真なる人間愛の一の極致を示した。彼の生命はそこに至つて、まさに永遠に亡びることなき人間愛の光りを發し得たのであつた。

島崎村木村家の別室に移つてから後の良寛は、年一年加つた老衰の爲めに、籠居孤坐の日が多かつ

たと云はれる。而もその寂寥と無聊との底にあつて、彼の生命はかの貞心尼との交りによつて、むしろ反對に最も温かな、最も純潔な、最も切實な、最も淳真な愛の輝きを得たのであつた。かくて其の最後の、そして最美の光輝を放ちつゝ、彼の人間的生命は日を追うて寂滅の境に近づいて行つた。そして前に引用した貞心尼の手録中にも見られる如く、天保元年の秋頃から頓に著しさを増した彼の肉體上の衰弱は、冬の寒さの加はるにつれて、益々その度を増して行き、年の暮頃にはつひに再び起つ時のないことを明らかに思はせるやうになつた。その由を傳へ聞いて、人々は驚いて集つて來た。

むさし野のくさばのつゆのながらへてながらへはつる身にしあらねば

彼自らも既にこんな風に靜かに安らかに自分の運命の終りを覺悟してゐた。そしてそれとなく最後の面會に來た人々に向つても、

いつ／＼とまちにし人は來りたり今はあひ見て何か思はむ（貞心尼に）

さす竹の君と相見てかたらへば此の世に何かおもひのこさむ（弟由之に）

自ら進んで斯う云つた風な歎ばしい別を告げずには居なかつた。彼は更に靜かに今將に寂滅の境に赴かうとしつゝある自分の姿を眺めさへもした。

裏を見せおもてを見せて散るもみち

そこに至つては既に彼の心は自然そのものゝ博大にまで達してゐた。裏を見せおもてを見せて散るもみち——それはその場合の彼にとりては決して單なる比喩などではなかつた。彼の眼にはさうした

如實の自然が鮮やかに眺められたにちがもない。ほのかな黄金光の遍照した靜かなうら／＼かな秋の空——それを彼は見た。その裡にはてしもなく知れず擴がつた曠野、曠野のたゞ中に默然と立つてゐる一本の大きな樹、その枝から風もないのに二ひら三ひら音もなく或は裏を見せ或は表を見せつゝ舞ひ落ちる美しい色の葉——それを彼は見た。そしてそれが今將に亡び行かうとして居る彼みづからであるなどゝ思ひどころでない、擴充した絶對化した心持で、彼はおそらく眼前に展かれた其の自然の美しさを心ゆくばかり味はつたであらう。

かくて彼のたましひは、今や全く自然そのものゝたましひであつた。自然と彼とは一如であつた。

かたみとて何かのこさむ春は花夏ほと／＼ぎす秋はもみちば

要するにこれが彼の最後の言葉であつた。これはもう良寛と云ふ限られた一個の人間の言葉ではなくして、實に自然そのものゝ聲であつた。天保二年正月六日、七十五歳を壽命として良寛その人はつひに安らかな大往生をとげたとは云ふものゝ、その死はもう謂ふところの死ではなかつた。良寛その人の生命は、既に／＼さうした肉體の死に先立つて自然とのいみじき永遠の融會を示して居たのであつた。

口碑の傳ふるところによれば、良寛示寂の翌日親族故舊等相會して遺骸を沐浴納棺し、且その枕衾を歛めようとした時に、思ひがけなく櫛の下から四十兩の小判が出たので、人々は故人の用意周到其の死後にまで及んでゐたことを深く感嘆し、その金によつて葬儀から追善の式までも營んだと云ふこ

とであるが、今尙木村家に存してゐる其の當時の記録について見てもさうした事實の跡が少しも窺ひ得ないばかりでなく、良寛その人の性向や生活の一般と考へ合せて見ても、それはあまりに不自然な出来事の如く思はれる。おそらくそれは他の何人かの逸事が、人口を経ていつしか良寛その人の上に附會されるに至つたのであらう。

かたみとて何かのこさむ春は花夏ほとゝぎす秋はもみちば

吾々は矢張これ以外何等のかたみをも認めたくはないのである。

良寛の遺骸を擁しての葬儀は與板町徳昌寺第二十七世活眼大機和尚を導師として営まれた。木村家の記録に會葬者に供した齋飯用の白米は一石六斗を要したことが記されてゐるところから考へても、その葬儀の如何に盛大であつたか知られると同時に、生前に於ける良寛その人の徳化の範圍の如何に廣かつたかの一端をも窺ふことが出来る。之れ又決しておろそかに看過すべからざる事實である。

〔遺跡めぐり〕参照)

良寛の遺品で今日なほ保存されてゐるものは甚だ少ないのであるが、その少ない遺品中でもわけて貴いものとされてゐるのは、彼れが最後までも枕邊を離さずに大切にしておいたと云はれる一幅の掛軸である。それは彼の父以南が半切に「朝ぎりに一段ひくし合歡の花」と云ふ自作の一句を書いたもので、おそらくそれは彼に残された唯一の父のかたみとして良寛が永く身に添へて秘藏してゐたものであらう。そして其の半折の片端には小さく良寛自身の筆で、左の如き一首の短歌が書き添へてある。

みつくきのあとも涙にかすみけりありし昔のことをおもへば

今にして此の一首の意味を味はふ時、良寛その人に對する吾々の心も亦正しくその外に出ないことを、痛切に感じないでは居られぬのである。

○良寛の死顔

高僧傳などによく有る事にてめづらしからぬ事に候へど、面り見し事に候へば御話申上りも、師病中さのみ御惱みもなく眠るが如く座化し給ひ、四日目の新しきにて御棺を野邊に送り、引導も済みし頃、下三條へんものとして男一人走り來りどうぞ、一目をがませたまはれと、泣く／＼手をすりて願ひければ、不便に思ひ、さらばとて棺を開きけるに顔色少しも變らず生けるが如くなりければ、皆驚き、是れは／＼と、多くのもの立ちかはりてをがみて果てしなれば、やがて蓋おほひ、火をかけて、送りの人々も煙と共に立ちわかれ歸りける。云々

——(以上貞心尼の文書中より)——

逸話

人が他人の噂をする場合には、多くその人の或る特殊相又は或る特殊の事件や行爲を題材にしたがるものである。そしてその人が噂をし合つて居る當人達にとつて縁遠くあればあるほど、ます／＼それが甚だしい

やうである。更にそれが謂ふところの偉大な人物である場合には、いつ誰によつて拵へられたともわからない途方もない牽強附會の珍事が無暗と寄せ集められたりする。かくして私達は兎角所謂逸話や逸事を寄せ集めて拵へ上げた多くの偉大な善人や偉大な悪人や又は偉大な奇人の甚だしく非現實的な超人間的な幻像を持つやうになるのである。これも或る意味に於ては、必ずしも斥くべきことではないが、しかし正當に一個の人人を理解せんとする爲には、矢張さうした特殊相ばかり観て居てはならぬ。逸話逸事は、やはり逸話逸事であつて、その人の全生活はそれだけでは構成されないものである。

多くの傑出した禪僧とおなじく、良寛も甚だ多くの逸話奇話を残した一人である。そしてそれらの奇妙な逸話のみを通じて想像された一個の超脫的奇僧が、これまで多くの人々によつて良寛の全體だとされて來た。若し良寛のあの平凡味に徹した詩歌が残らなかつたならば、今日おそらく私達は依然として彼を單なる一個の奇僧としてのみ觀るに止まつたであらう。

これまで世に知られた良寛の逸話奇話の多くは、越後の各地（とりわけ彼の住んでゐた西蒲原、三島兩郡地方）に口碑として傳へられて來たものであつた。その多くは西郡久吾氏編『北越沙門良寛全傳』中に集録されてゐる。私がこゝに紹介しようと思ふところのそれも、半ばは口碑によつて傳へられたものであるが、しかし半ば之れまで世に知られずに居た記録によつて傳へられたものである。その記録と云ふのは、良寛が生前親しく往來してゐた越後西蒲原郡國上村大字牧ヶ花解良家に秘藏され來つたもので、同家の先々先代三郎兵衛榮重（文化七年正月八日生、安政六年二月二十六日歿）と云つた人の筆になつたもので『良寛禪師奇話』と題した小冊子である。又口碑として傳へられたものゝ多くは、興板町藤井界雄師その他數氏の注意し

て集め置かれたのに従つた。それから採録の順序は漠然であるが、年代によることゝした。しかし『良寛禪師奇話』の分だけは他と區別して終りに添へることにした。

少年時代の良寛は性質が極めて魯鈍無頓着で、襟を正して人に接することなどはてんで出来なかつた。そして土地の人々から「名主の書行燈」と云ふ綽名をつけられて居た。

良寛がまだ八九歳の頃であつた。家人に叱られる時に、よく上目で叱つた人の顔を睨む癖があつた。或時それを氣にして彼の父は云つた、「親の顔を睨む奴は鰈になるぞ」と。それをちつと聞いてゐた良寛はやがてぶいと家を出たが、いつまでたつても歸つて來なかつた。家人はひどくそれが氣がかりだつたので、大ききぎきをして方々を捜し廻つたが、なか／＼見つからなかつた。と、思ひがけない海濱の岩の上に、彼はたゞ一人しよんぼりと立つてちつと海を眺めてゐた。それを見た人々は驚き喜んでそこへ駈けつけて行き、それでもなほ氣づかずにぼんやりしてゐる彼をつかまへて、「こんなところで何をしてゐるのだ」と聲をかけた。少年は始めて我に返つたやうに人々の顔を見ながら「おれはまだ鰈になつて居らんかね」と訊ねた。

長男と生れた彼は十八歳で父の後を承けて名主役見習となつた。しかし間もなく彼は何か感じたことがあつたと見え、一夕友達と一緒に青樓へ上り痛快な馬鹿遊びをして大金を立ちどころに投費し、しかも何等の悔恨の色なく歸途寺門に走つて剃髮することゝなつたのだと云ふ事である。

或は云ふ、彼が出家したのは、家職を繼いでから間もなく、驛中で死刑に處せられた盜賊があつ

た。その死刑執行に立ち合はされた場合に深く感ずるところがあつたらしく、歸宅の後直に家を出て桑門に赴いたのだと。

或は曰ふ、彼は家督を相續すると共に妻を娶つたが、何故か半歳ならずしてその羈絆を脱したのだと。

更に又曰ふ、彼が名主見習役となつた當時、出雲崎代官と漁民との間に葛藤を生じ確執容易に解けないところから、彼はやむなく調停の勞をとらなければならなくなつた。しかし魯鈍に生れた彼は、さうした仲裁の任に當りながらも、代官の方へ行つては漁民の悪口雜言をそのまゝ少しも偽らずに告げ、漁民に對しては代官の嘲罵を何等の手加減を施さず有りのまゝ傳へ、かくすることによつて事態をますます紛糾せしめ、つひに代官の責むるところとなるに及んで、彼は今更の如く慨嘆し、厭世つひに出家するに至つたのだと。

更に又曰ふ、彼が名主見習役となつてから間もない時のこと、佐渡奉行が出雲崎を経て佐渡へ渡航したことがあつた。その場合奉行の方では自家用の長柄の駕籠をも船に積まんことを求めた。しかし有るかぎりの船の大きさに比べて駕籠の柄はあまり長かつた。名主役の彼はそれを見て「どうしても積むことが出来ぬなら柄を好い加減切つて短かくしたらよからう」と云つた。困じ果てた船夫等は名主のこの言葉を聞いて喜んでそれに従つた。けれどもその事によつて惹起された佐渡奉行對名主の悶着は容易ならぬものであつた。之れが結局彼をして世を遁るゝに至らしめた原因であつたと。

良寛が備中國玉島圓通寺在學中のことであつた。或る時その附近のある村家に晝盜が忍び入つたと云ふ訴へが村吏の許へ届いた。村吏はそれは近頃此のあたりにうろついてゐる乞食坊主の所爲に違ひないと云ふので早速その乞食坊主を捕へて來て訊問を試みた。しかし、乞食坊主は何と問はれても一言も答へなかつた。村吏はとう／＼持てあまして罪を彼に歸し、人々に命じて土穴を掘つて彼を生埋にさせようとした。と、そこへ偶然その村の豪農某が通りかゝつて、ひどくその乞食坊主に同情を寄せ村吏に向つて「事ここに至つても何等答をしろいと云ふのは決して凡人ではない、近頃聞くところによると圓通寺に一人の雲水があつて表面は極めて凡俗に見えるが内心深い悟道を得て居ると云ふ事である、或は其雲水なのかも知れない」と云ふことを語つた。そこで村吏は再び言葉を改めて訊問して見ると、始めて彼は口を開いて自分が圓通寺の雲水である旨を答へた。そしてその時彼は言葉をつづけて云つた「人が一旦他人から疑はれ出した以上はいくら辯解したとてそれは結局無益な申譯に過ぎないものだ、それを思つたから自分は之れも何かの見えない自分の罪業の然らしむるところと諦め、如何なる苦しみをも甘んじて受ける覺悟で黙つてゐたのだ」と。そこで村吏等は深く自分等の過ちを謝して、早速彼を放免した。その乞食坊主が即ち良寛であつたと云ふことである。(これは今なほ圓通寺に傳はつてゐる口碑で、圓通寺現住職石川戒全禪師の直話である)

玉島圓通寺時代から、良寛は手毬を愛し、童男童女を愛した。そして乞食坊主の姿をして常に手毬歌をうたひながら到るところで子守娘などと嬉戲するのを常としてゐたと云ふ事である。

良寛和尚に嫌ひな物が三つあつた。料理人の料理と、歌よみの歌又は詩人の詩と、それらが書家の書。

良寛和尚に好きなものが三つあつた。童男童女と、手毬と、ハジキと。

良寛が永い間の雲水の旅から郷國へ歸つて来て彼が最初に身を寄せたのは、彼の生地出雲崎から二里ほど隔つた郷本と云ふ漁村の空庵であつたとは『北越奇談』に誌すところであるが、出雲崎の古老の語るところによれば、何でもその前か後かに彼は出雲崎に近い中山と云ふ所の小庵にも居たことがあるとの事である。しかも彼が縁の下に生えた筍を自由に伸ばさせてやる爲めに縁板に穴をあけ、疊に穴をあけ、最後に屋根にまで穴をあけてやつたと云ふ有名な逸事は、そこに假住して居た間の出来事だつたと云ふのである。

いつの頃のことか、良寛は出雲崎某寺から俱舍論を借讀した。そしてそれを返却する時に謝禮として豆腐を贈り、左のされ歌一首をも添へたと云ふ。

雁鴨はわれを見捨て、去りにけり豆腐に羽根のなきぞうれしき

五合庵在住の前か後かわからぬが、良寛は出雲崎の生家橋屋の若主人馬之助（良寛には甥に當る）がその頃放蕩の噂高かつたのを深く憂ひて、一日訓戒を與へる爲めに出掛けて行つた。しかし、いさ何か云はうと思ふと、どうしても言葉が出ないので、とう／＼三日を空しく費してしまつた。三日目に彼れは何と思つたか、そのまゝ何も云はずに暇を告げた。が、立ち際に草鞋を穿かうとした手を控

へて、彼れは若主人を呼んだ。そして草鞋の紐を結んでくれと頼んだ。若主人も今日に限つて不思議なことを云はれるものだと思つたが、命のまゝに和尚の草鞋の紐を結びにかゝつた。と、その刹那、良寛は無言のまゝちつと甥の顔を見守つた。良寛の頬には涙が傳つてゐた。やがて又無言のまゝ彼は去つた。

その事あつてから橋屋若主人の生活が頗る改善されたと云ふことである。

良寛は托鉢の途中よく路傍の大木の下などに坐り込んで、時に歌や詩の集を讀んだり、時には砂上に指で字を書き、時のたつのも忘れてゐるやうな事が度々あつたと云ふ事である。

手毬とハジキに對する良寛の愛好は、殆んど神祕の程度に達してゐたらしく、容易に他人からの揮毫の求めに應じなかつた彼れも、子供を仲介者として手毬かハジキ用の貝殻かを贈つて求めさせると、如何なる場合でも筆を執ることを辭さなかつたと傳へられる。

到るところで良寛は手毬やハジキを玩んでゐる童男童女の親しい仲間であつた。時には遊廓へはひり込んで娼婦どものハジキの仲間にあつて平氣で遊んでゐた。その爲めに弟由之から左の如き歌を以て忠告されたことさへある。

すみ染のころも着ながらうかれ女とうか／＼あそぶ君が心は

しかし、良寛は之れに答へた。

うか／＼とうき世をわたる身にしあればよしやいふとも人はうきゆめ

由之はなか／＼承知しないで、更に次の一首を贈つた。

うか／＼とわたるもよしや世の中は來ぬ世のことを何とおもはむ
だが、結局こんな事では良寛はへこまなかつた。

この世さへうから／＼とわたる身は來ぬ世のことをなにおもふらむ

ある日例の如く良寛は子供等とかく、いんぼをして遊んでゐた。中に意地の悪い子供が一人あつて、良寛が物蔭に隠れたのをそのまゝ置いてきぼりにしようと思ひ出して無理に他の子供等を同意させた。そして數時間を経てもなほ彼等は歸つて來なかつた。しかし、良寛は平然と元の通りにして子供等の「よし」と呼ぶのを待つて居た。と、やがてそこを通りかゝつた人が、彼れの其の様子を見て驚きのあまり「まあ、良寛様、そんなところに何をしてござる」と叫んだ。その聲に良寛もおなじく驚いて「馬鹿、そんな大きな聲を出すと鬼が見つけるわ」と云つた。これは普通良寛ののんきさ加減を示す好話柄とされてゐるやうだが、私達はむしろそれを子供等に對してさへ「他を欺く」と云ふ事を敢てしなかつた良寛その人の意識的な行爲として見たいのである。

多分五合庵在住當時の事であらう。良寛は時々日あたりのよいところに紙をひろげて澤山の生きたシラミをその上に這はして楽しさうに眺めたり、やがてそれに倦むとそれらのシラミを又自分の懐中に入れてたりしてゐたと云ふことである。それかあらぬか、和尚の歌に左の一首がある。

蚤しらみ音に鳴く秋の蟲ならばわがふところは武藏野の原

ある年の秋の月のいゝ晩のことであつた。良寛は興に乗じて芋畑の中をあちらこちらとさまよひ歩いて居た。と、やがて畑の持主がそれを見つけて、これはてつきり畑荒しだと思ひあやまり突然鐵拳を揮つて良寛の頭を打つた。そして、それだけで氣が済まずに、とう／＼彼れを縛つて木の枝に吊して置いて、あり合せの棒で滅多矢鱈に擲つた。それでも良寛は逆らはなかつた。が、とう／＼堪へられなくなつて彼は自分は良寛である旨を白狀し、芋などを盗む氣は更になかつたが月がいゝのでぶら／＼歩いてゐたのだと告げて罪を謝した。百姓は始めてそれを知り、大に恥ぢ入つて深く罪を謝したが、良寛は少しも相手を咎めなかつたばかりか、むしろ氣持よさうに笑つて、左の如き一首の古歌を口ずさみながら飄然とそこを去つた。

打つ人も打たるゝ人も諸共に如露亦如電、應作如是觀

文化年中江戸の龜田鵬齋が越後來遊中、良寛の書を見て大に敬服し、一日國上山五合庵に彼れを訪ねた。折から良寛は坐禪をしてゐて、遠來の珍客のあるのにすらも少しも氣がつかない様子である。流石の鵬齋もそれには致し方なく、ほど半日をその側に侍坐してゐて、やうやく語を交へることを得た。鵬齋が眞に草書の妙を悟つたのは良寛に遇つてからの事だと云はれてゐる。

鵬齋の五合庵訪問に關しては、更に今一つの興味ある逸話が傳へられて居る。季節はいつ頃かわからぬが、何でも月のいゝ晩景を選んで鵬齋が五合庵に良寛を訪ねたことがあつた。折から良寛は夕食を済ましたところらしかつたが、鵬齋の顔を見るや否やかたへにあつた摺鉢を持ち出しそれに水を注

いで洗足をすゝめた。鵬齋は驚いて「これは摺鉢ではないか」と云つた。良寛はそれに答へて「いかにも摺鉢だ。しかし味噌をすることが出来ると同時に足も洗ふことも出来るではないか」と云つた。それには鵬齋も返すべき言葉がなく、すゝめられるまゝにその妙な洗足器で足を洗つて、上へあがつた。

鵬齋は好酒家であつた。しばらく話をまじへた後で、彼は酒が飲みたいがと云つた。良寛も酒は好きな方だつたので、今こゝにはないが何なら買ひに行つて来ようかと答へた。そして相手の返事をも待たずに矢張かたへにあつた酒徳利をぶら下げて、良寛は早速出かけた。その時はもうまんまるい月が空高く昇つてゐた。案内のわからぬ此の山腹の小庵に唯一人置き去りにされた鵬齋は、刻々にたまらない淋しさに襲はれるのを覺えた。酒屋への距離はどれ程あるか彼にはわからなかつたが、良寛の歸りはあまりに遅いやうな氣がして、彼はやるせない不安をさへ感じた。

とう／＼鵬齋はたまらなくなつて、庵から出て、良寛の行つた方角へ何と云ふことなしに歩を運んだ。と、庵からどれ程も離れて居ない所に立つてゐる大きな松の樹の根本に坐つてゐる人影のあるのが目についた。彼は半ば怖ろしく半ば元氣よくその方へ近づいて行つて見ると、それは良寛その人であつた。良寛は松の根に腰かけて全く我を忘れて月を眺めてゐる様子であつた。そして鵬齋に聲をかけられて始めて我に返つたらしく、しばらく怪訝さうにこちらを見て居たが、やがて大きな聲で「どうです、いゝ月ちやありませんか」と云つた。流石の鵬齋もこれには少し面喰つたが、それでも「月

もいゝですが、酒はどうなりました」と云ひ返した。それを聞くと同時に、良寛は慌てゝ立ち上り、かたへにころがしてあつた徳利を引攫んで、「や、忘れて居た」と云ひさま夢中で駈け出した。

與板町在の花井と云ふところに、與三治と云ふ佛師があつた。どう云ふことからか良寛にいくらかの貸金があつた。彼は金は少しも惜しいとは思はなかつたが、その貸金を因縁にどうかして良寛の書を得たいものと、永い間心がけてゐた。しかし、なか／＼その爲めの機會が得られなかつた。

と、うまい工合に或る時寺泊附近の海岸の一本道で良寛に行き遇つた。かれは今こそとばかり良寛をとらへて貸金の催促を試みた。例によつて良寛は金がないから待つてくれとあやまつた。佛師はここだと思つて、それでは何でも好いから字を書いてくれとせがんだ。そしていやがる良寛を無理強ひにして持ち合せの塵紙に字を書かした。良寛は道の真中に立ちふさがつて両手に塵紙をひろげてゐる佛師を前に控へて、佛師の矢立から取り出したちび筆を揮つて左の如き一首の歌を書いた。そしてそれによつて永い間の負債の帳消しをしてもらつた。

このごろの戀しきものは濱べなるさゞえの殻のふたにぞありける

此の「さゞえの殻のふた」はおそらく丸いもの、即ち金がほしいの意であらうとは、その地方での口碑の傳ふところである。

或る年の秋のことであつた。一日良寛は托鉢の途中、山田の驛の某家の庭に咲いて居た菊の花を折つて持つて行かうとした。すると、その家の主人がそれを見とがめて大に怒つた風をして見せて置い

て、その場はそれで済ますことにした。そしてそれから數日を経てその時の良寛の様子を繪に畫いて、それを良寛に示し、過日の謝罪の代りに此の畫に賛をしてくれと望んだ。良寛もそれには何とも返答の仕様がなないので、やがて無言のまゝ次の一首を賛とした。

良寛僧が今朝のあさけはなもて逃ぐるおんすがた後の世まで残らむ

或る年の暮近い日のことであつた。その當時家運衰頽してひどく困つてゐた出雲崎の橋屋即ち良寛の生家へ宛て、良寛から一通の手紙が届いた。野僧近ごろ金が溜つて困る、山住みの身に甚だ不用心ゆゑ入用ならばいくらでも用立てするから使をよこしてくれと云ふやうな事が書いてあつた。此の手紙を受取つた山本家では、時が時とて其喜びは一通りでなかつた。早速何か御馳走をと、のへてそれを持たせて使を送つた。使の者が五合庵を訪ねると、丁度良寛在庵中であつた。良寛は使の者からの馳走の重箱を受取つてそれを棚へ上げるや否や、室内に入つて出て來なかつた。使の者は空しく數時間を過して今か今かと待つて居たが、良寛はつひに出て來なかつた。使の者もとう／＼待ちきれなくなつて、室内に向つて聲をかけると、漸くの事で良寛が出て來た。見ると、彼れは頻りと寢ぼけ眼をこすつてゐる。使の者もこれには呆れ果て、仕方なくこちらから用向を打ち明けた。すると、良寛は「さうか」と云つて笑ひながら懐中から一包の金を取り出した。そして長時間を費してその紙をほぐし最後に中から一朱銀一枚を取り出した。使の者はいよ／＼呆氣にとられてしまつた。しかし、良寛は頗る眞面目で、それを使の者に渡すと同時に云つた、「さあこれだ、大切に持て持つて行か

しやう」と。

良寛の歌に「神無月の夜葎一つ着たる人門に立ちて物こひければ」と云ふ前書きをした

いづこにか旅ねしつらむぬばたまの夜半のあらしのうたてさむきに

と云ふ一首の歌があるが、此の歌は、一夜良寛の庵へ乞食がやつて來て、何も貰ふものがなくてうろ／＼してゐるのを見て良寛はそれが氣の毒になり、自分の着物をぬぎ與へて送り出してやつた折に詠んだ歌だとも云はれてゐる。

良寛の容貌には、大體に於てさう大して異常なところがなかつたさうであるが、たゞ頸が正面へ向いたまゝ左右へ廻らないやうに出來て居たと云ふことである。

良寛は庵室にある間よく習字に努めたらしく、或人の訪ねた時機の上に反故が山を成して居り、その上によつてこれ禪が載せてあつた事などがあつたと云ふ。

手習ひの速成法として良寛が誰かに教へたと傳へられる話に「何でもいゝから手を澤山動かせ」と云つたと云ふ事、「手本によつて字を習ふ時は眼は絶えず手本の上だけに注いで決して自分の書く字の方を見てはならぬ」と云つたと云ふ事などがある。なほ良寛自らは毎朝空中に千字文を一通りづゝ書き習ふのを常としたと云ふ事である。

良寛のかいた繪と稱するものが諸所に保存されてゐる。至極簡單なものに過ぎないが、全然素人の筆とは思へないところがある。傳ふところによると、良寛はいつ頃の事か越後燕町在の新田と云ふ

村に庵を結んでゐた有願と云ふ坊さんについて書法を學んだ事があると云ふ事である。有願は狩野梅莊の弟子で、相當にいゝ繪をかいた。

良寛の得意な畫題の一つに鬮體があつた。いつの頃の事か明らかでないが、これも鬮體を好んで畫いた山岡鐵舟居士が良寛の鬮體圖を見てひどく感心し、「良寛の鬮體は脂氣がぬけて居るが吾輩のはどうもまだ脂氣があつて面白くない」と嘆じたことがあると云ふ話である。

良寛は又大工仕事のやうな手細工を好んだ。隨て大工を非常に好んだ。そして「世の中に大工の仕事ほど正直なものはない」こんな事をもよく口にしてゐたと云ふ事である。何でもない桐の木箱に「南無阿彌陀佛」と云ふ六字を墨さして書いたらしい良寛の筆蹟が諸所に見出された。これは恐らく大工が箱などをつくる心持は南無阿彌陀佛を念ずると同じ心持でなければならぬと云ふやうな意味で特に良寛が書いてくれたものであらうとは、或る高德な老僧の推定であつた。

或時誰か良寛に向つてたづねた。

「あなたは古人のうちで誰を一番よく學ばれましたか、西行法師ですか、喜撰法師ですか。」

良寛は答へた。

「わしは何人の善いところをも學ばない。皆の學び残したところを學ばうと思つて居る」

問者は重ねて問うた。

「それでも一休和尚だけにはいくらか學ばれるところがあるでせう」

良寛は答へた。

「まづさうと云ふものだ」

問者は三たび問うた。

「それはどんなところですか」

良寛は答へた。

「これだ」

かう云ひながら良寛は懐中の論語を問者の前に示した。これもある老僧の語つたところである。

良寛の藏書には藏書印の代りに「おれがの」と云ふ文句が自署してあるものが多かつたと云ふ事である。

良寛の親しく出入してゐた與板町の某富豪が、或時大金を投じて當時盛名の畫家應舉に頼んで、犬ころを幾匹か書いてもらひ、驚くべく立派な表装を施して床の間にかけ、それを自慢話の種にしてゐた。折から良寛が其の家を訪ねて一夜をその掛物のかけてある座敷で明すことゝなつた。そしてその贅澤な掛軸をつくつく眺めてゐたが、やがて家人の見ぬ間をねらつてその繪の餘白に思ひ切り自由な書き方で贊を書いた。そして素知らぬ顔に翌朝その家を辭し去つた。

地藏堂町に一人のたの悪い舟子があつて、或る時良寛の乗り來つたのを見、一つ脅かして見ようとたくらみ、川の真中近くでわざと舟を覆して良寛を水中に投じた。そして暫く良寛の苦しむのを見

て楽しんでから、舟へ引上げてやつた。しかし、良寛は少しも驚きもせず、怒りもせず、困りもしないで、むしろ一命を救つてくれた舟子の恩に對して深い謝意を表して飄然と立ち去つた。

良寛が地藏堂の文人畫家富取芳齋に語つたと傳へられる話に「手紙の字だけは子供が讀んでも解るやうに書かなくてはならぬ」と云ふ一事がある。

良寛終焉の地として名高い三島郡島崎村木村家の女に向つて良寛の與へた教訓の一つとして「女はわけても大きな聲で話をするやうにしなければならぬ、小さな聲で云ふ女の話にろくな事はない」と云ふ事が傳へられてゐる。

毎年田植多の季節になると、良寛はきまつて農夫が田植多の作業に従事してゐる様子を自畫してそれを庵室にかけ、その前に香華を供へるのを常とした。秋の收穫季にも亦同様の舉に出づることを忘れなかつた。

良寛は常に到るところに托鉢し、到るところに宿を求めた。しかし決して同じ家に二泊以上留まらなかつた。殊に晩年には滅多に外泊することはなかつたと云ふ事である。

良寛が晩年の頃の話である。一日良寛は三島郡竹森の星彦右衛門方を訪ねた。そして日暮れまでそこに居て、夕食後その家の主人に伴はれて隣家へ湯をもらひに行き、入浴後直ちに辭し去つた。良寛が出て行かうとする時、その家の子供は「あ、良寛さま其の杖はうちの杖だ」と呼びかけた。良寛は一向それを氣にもとめずに「いや、おれの杖だ」と云つたまゝさつさと出て行つた。しかし、實はそ

れは良寛の杖でなくて他の人ののであつた。良寛の杖は依然として星家に残されてあつた。

と、時経てから良寛は思ひがけなく「杖を取り違へてすまなかつた」と云ひ／＼戻つて來た。しかし、その時はもう餘程夜が更けて居たので、家人は頻りに泊つて行けとすゝめ、その代り今夜こそ何か書いて貰ひたいとせがんだ。良寛も仕方なく「困つたなあ、それでは何か書くものがあつたら書いて行く」と云つた。が、折あしくそこには持ち合はせの紙がなかつたので、主人は庄屋へ紙を借りに出かけた。すると、その留守に良寛は爐邊に掛けてあつた香代帳を取り下して、

老の身のあはれを誰にかたらし杖を忘れてかへるゆふぐれ

と云ふ一首を書いて、主人の戻つて來ぬ間に闇夜提灯も持たずにさつさと歸つて行つてしまつた。

良寛の死病は、俗に云ふ痢病であつた。その點では芭蕉と同じである。しかも、和尚も亦芭蕉と同じく其の最期の一瞬時まで、聊かも我を忘れて取り亂すやうなことがなかつたと云ふ。加之、良寛は病毒の他人に傳染せんことをおそれて、一切他人を近づけず、極めて明らかな意識を以て最後まで痢病經に教へてある通りの作法を守りつゞけたと云ふことである。

これ以下は前に述べた解良榮重の手記になつた「良寛禪師奇話」と題する小冊子中の挿話を多少文章を改めて始めて世に紹介するものである。

良寛禪師は常に黙々として動作閑雅、餘有るが如し、心廣ければ體ゆたかなりとはこのことならん。

禪師常に酒を好む。然りと雖量を超えて醉狂に至るを見ず。又相手は田父野翁たりとも、互に錢を出し合ひて酒を買ひ呑む事を好む。しかも汝一盃吾一盃と云ふ風に、盃の數彼我多少なからしむるを常とす。

又煙草をも好む。初めは煙管、煙草入等を自ら持ちし事なく他人のものを用ひて吸ふを常とせしが、後自ら持つ事あり。

禪師その隨身の具を他家に至る毎に多く遺失し去る事あり。或人教へて其の品々を書記し、出立する前讀むこと一遍せよと云ふ。師宜なりとし、後自ら隨身の具を書記して出立の前必ず一讀す。今其の書付某家にある。

師常に云ふ、吾は客あしらひが嫌ひなりと。

又言ふ、人の家に到る毎に、必ず何處より來るかと問ふ、そも何の用ありて然るか。

師音吐朗暢、讀經の聲心耳に徹す。聽者おのづから信を發す。

師常に手まりをつき、はじきをなし、若菜を摘み、里の子供と共に群れて遊ぶ。就中、師が地藏堂の驛を過ぐるや、其地の兒童必ず相追隨して、先づ「良寛さま一貫」と呼ぶ。師驚きて後ろにそりかへる。次に「良寛さま二貫」と云ふ。師一層多くそりかへる。かくの如くして二貫三貫と順次其の數

を増す毎に、そのそり反り方ますますその度を加ふ。而して最後に後ろへ倒れんとするに至り、兒童之れを見て喜び笑ふ。其の驛の長富取倉太幼年の頃余が家（解良家）に客たり。偶々師共に宿して云ふ、君が里の兒童癖甚だわろし、以後そのことをなさしめされ、吾老いて甚だ難儀なりと。余その側にありて云ふ、師何ぞ勞を忍びて其の如き戯れをなすの要あらんや、如かず自らなさざるにはと。師答へて曰ふ、仕て來た事はやめられぬと。

こは一年人々の物をせり賣するを師立ち寄り見、あまりに聲高く物の價を呼ぶに驚きて後ろへそり反りし事あり、爾後この戯をなせしと云ふ。

師到るところに兒童と群をなして戯る。何れの里にや、師その地の兒童と遊ぶによく死者の態をなして路傍に臥すを常とす。兒童或は草を以て之れを掩ひ、木の葉を以て之れを覆ひ、以て葬りの事に擬して笑ひ樂しむ。後に一狡兒あり、師が死者の體をなすや、指を以て師の鼻をつまむ。師もその久しきに堪へずして、自ら蘇生す。こは禪師自ら氣息を調べんが爲めになせし事ならんか。

師余が里牧ヶ花に托鉢す。申の家の門の前に立つや、人それは半兵衛が家なりと云ふ。師ぬき足して去る。又その隣に至れば、おなじくこは半兵衛が家なりと云ふ。師又おなじくす。かくの如き十數戸、師つひに空しく去る。こは昔半兵衛と云ふもの醉狂して師をこらせしことあり、師ふかく半兵衛の名を怖る、爾後人この戯をなすものなりと云ふ。しかも師自らは半兵衛が家しかく多くあるべきかを疑はざるが如し。

禪師嘗て早苗とる頃余が家に宿す。狂僧に智海と云ふ者あり、驕慢こりて狂を發す。常に云ふ吾衆生の爲めに一宗を開かんと。而して自らを古への高僧に比し即今の僧徒を見輩視す。かくの如きを以て彼常に良寛禪師の人に尊ばるゝを妬忌す。かの日彼大醉し、田を打つと稱して泥にまみれて余が家に來り、偶々禪師の余が家に在るを見るや、宿怒忽ち發し、敢て一言を交へず、濡るゝ所の帯を以て師を打たんとす。事不意に出づ、師亦何の故たるを知らず。然りと雖身亦避けんともせず。傍人驚きて抑へとめ、師をして一室に引き、狂僧をして去らしむ。其の日暮に及んで雨頻に降り出づ。師室を出で、從容として問うて曰ふ、かの僧雨具を持てりしや、と。又餘事を云はず。

余幼き頃三條の寶塔院に寓居し書を學ぶ。師も亦來り宿す。余俗にハリコロハシと云ふ物を持って。師に對して云ふ。師我が爲に菅公の像を書け、若し肯んぜずば此のもの化けて夜師のもとに往かんと、師之れを見て恐るゝものゝ如し。爲めに菅公の尊號と神詠とを書してたまふ、今なほ家にあり。

師に書を求むれば、手習をして手がよくなりて後書かんと云ふ。時ありて興に乗じ數巾を掃ふこともあり。敢て硯筆と紙墨との精粗を云はず、自らの詩歌を譜記して書す。故に脱字あり、大同小異ありて、詩歌の字句一定せず。

師、草書を好む。懷素の自敘帖、道風の秋萩帖等を學ぶと云ふ。國上の庵なほ硯紙墨の蓄へありしと見え、手習の反故なども見うけられし事ありと云ふ。鳥崎に移りて後は紙筆もたくはへず、事あれば人の家に行きて書く。「きのふは御寺けふは醫者ど」と云ふは此の頃のたはむれ歌なるべし。

師が國上の庵に在りし時、爐の隅に小壺を置き、俗に醬油の實をその中に貯へ、食の餘るあれば皆此の壺中に投じ置き、夏日なほ之れを食す。人至れば人にもすゝむ。人之れを食すに堪へずと雖、師は自若として臭穢を知らざるものゝ如し。師自ら曰ふ。蛆此の中に生ずと雖、之れを椀中に盛れば蟲おのづから逃げ去る、敢て食ふ事に害なしと。

余が兄妻を娶りし時、師古き扇子筥を持ち來り、祝ひの詞を述ぶ。余が祖父にや、師に向つて、そのやうなる世間並の事を誰が教へ申せしと問ふ。師答へて、地藏堂の北川の妻が教へしなりと云はれしとぞ。

註、北川、姓は富取、醫を業とす。

禪師又圍碁を好む。而も敗ることあれば不興す。何れの年にや地藏堂の長富取某と碁を對す。師多く勝つ。主人伴り怒りて曰ふ、人の家に客として來りながら其の主人に勝つとは無禮も甚し、以後吾が家に來ること勿れと。師色を失ひて、其家を辭し、歸途余が家に來り、意氣甚だ昂らず、何事か深く憂ふる所あるが如し。余が祖父その故を問ふ。師曰く、地藏堂の某に勘當されたるなりと。余が祖父曰く、それは甚だお氣の毒なり、我師の爲めに行きて謝せんと。明日相携へて某の家に到り、前日の無禮をわぶるに擬す。その間師門前に立ちて敢て入らず。事成りて後内より招けば、師はじめて入る。而も後直ちに又碁を圍みしと云ふ。こは余が生前の事なれども故人觀國の語りしところなり。

註、觀國は國上村字溝古新清傳寺（佛光寺派）の住持なり。

師又錢などをかけて碁を圍むこともあり。人多く師に勝ちをゆづる。師錢が多くなりてやり處なしと云ふ。又曰く人は錢の無きを憂ふれども、我は錢の多きを患ふと。

師平生喜怒の色をなさず、疾言するを聞かず。其の飲食起居舒にして愚なるが如し。

師の隨身の具、笠などに「おれがのほんにおれがの」と書してあり。余が家に師の持ちたりし夢遊集あり、それにも「ほんにおれがの」と記しあり。

井上桐麻呂「初柳川に住す今則清に移る」師を尊信して常に國上の草庵を訪ふ。彼當時の善人を師に問ふ。師余が父「解良叔問」を教ふ。桐麻呂爾後余が家に住す。

師能く人の爲めに病を看、飲食起居心を盡す。又よく按摩をし、灸などをなす。人明日我が爲めに灸をせよと云ふ。師明日の事は又明日と答へて敢て諾せず。輕諾信少なきが爲めか、又生死明日を期せざるが故か。

師決して人を毀譽せず。然りと雖時ありて或る里長某居宅を造る甚だ壯大なり、師曰く、貧すれば鈍すとはかくの如きを云ふなりと。

師嘗て風邪に感じ七日市某の家に臥す、明旦起きて見れば屏風にて床を圍む。師曰く、宜なり、我が病む事、弘齋の屏風を立つればなりと。

師の嫌ふところは書家の書、歌よみの歌、又題を出して歌をよむこと。

師色紙短冊を出して書を求むる人あるも、詩歌隨意に書し、字行定法なし、當今和學者流の法のあ

ることを知らざるものゝ如し。

師嘗て茶の湯の席に列りし事あり、所謂濃茶なり、師知らず飲みほして見れば、次客席にあり。師やむなく口中含むところを碗に吐きて與ふ。其の人念佛を唱へつゝ飲みしと。之れ師みづから語りしところなり。

右と同じ席にてのことにや、師鼻くそを取りてひそかに座の右に置かんとす、右客袖をひく、左に置かんとす、左客又袖をひく、師止むことを得ずして再び之れを鼻中に置きしと云ふ。

師嘗て某の驛を過ぎ娼家の門に至るや、遊女あり走り出で、師が袖をひかへて泣く。師其の故を知らず。たゞ茫然としてなすにまかす。後に至りて其の故をたづねしに、そは彼の遊女幼にして身をひさぎて他郷に在り、父母の容形を知らず、しかも父母を思ふこと切なるの餘前夜父來ると夢み、師を見て其の父なりと思ひしが故なりと云ふ事明らかとなれり。此の話も師自ら語りしところなれども、余幼にして始終を詳かにせず。

師ある時托鉢の途中山の頂に憩ひし事ありしが、少憩の後再びもと來し道に行き托鉢せしに、知る人あり、これ先刻の僧なりと云ふに、師驚きて歸り去りしことありしと。

師與板驛山田某の家に宿す。其家に一畫幅あり、獸を描く。師甚だ之れを珍愛し、一時人なきを見て師自ら其の畫幅に對し畫中の獸の形容をなす。折から家婦人の來るあり。師曰く我今何をなせしか君の知れりやと。婦人曰く師畫中の獸の態をなしたまへるにあらすやと。師驚きて曰ふ、君は賢き人

なり、然りと雖、明らかにかくの如くなり云ふことなかれ、奴婢が氣づかひをすればなりと。

毎年元前後郷俗通宵踊りをなす、都て狂へる如し。師甚だ之れを好む。ある夜師自ら手巾を以て頭を包み婦人の態をなし衆と共に踊る。人あり、その師なることを知り、傍に立ちて聞こえよがしに云ふ「この娘子品よし誰家の女ぞ」と。師之れを聞いて大に悦び、後人に誇つて曰く、我衆と共に盆踊りをなすや、人ありあれは誰家の女ぞと云へりと。

余問ふ、歌を學ぶ何の書を読むべしやと。師曰く萬葉集をよむべし。余曰く萬葉は我輩不可解と。師曰く解かるだけにて事足れりと。時に又曰く古今はまだよいが、古今以下不堪讀と。

師五十音の理を自ら考究して頗る其の旨を得たり。我地方未だ眞淵本居の書なし。師は先づ鞭をつくるものなり。余幼にして此の事を聞く。師示すに活用を以てす。先づ初言を、次に體用令助を云ふ。自ら心に得ざれば師は黙して語らず。其の理を心に自得して後、師又語らる。惜哉余淺膚にして其の要を學ばず、今日に至りて臍を嚙む。師曰く我一冬草庵にあり、五十音を考へ其の大意を得たりと。

師國上の草庵に在し時、符廁中に生ず。師蠟燭を點して屋根を焼き竹の子を伸ばしやらんとす。しかも、その爲めに却て廁を焼失しけりと。

人曰く金を拾ふは至つて樂しと。師之を聞き自ら地上に金を捨て、やがて自ら之れを拾ふ、更に清意の樂しきなし。初め人吾を欺くかと疑ふ。捨つること再三、つひに其の在るところを見失ふ。師百

計してやうやく拾ひ得たり。その時に至つて初めて樂しきを知る、且曰く人我を欺かずと。

郷言稻の豊熟するを「ぼなる」と言ふ。ぼなるは吼なると云ふなるべし。師之れを聞き、稻の吼ゆるを聞かんと終夜田間に彷徨せられしことありと云ふ。

夏夜、田家にては既に藁をつかねたるを繩を以て梁下に吊し下ぐるを例とす。之れ蚊子の馬を刺す事あれば、馬之れに觸れて蚊子を追ふが爲めなり。師之れを見、その故を問ふ。人之れ蚊を去るの法なりと教ふ。師即ち草庵に歸りて自ら之れをなし晏如たりしと云ふ。

師一日雨に逢ひ石地藏の笠着たる傍に立ちて凌ぐ。人師なることを知り、伴うて家に歸り、而して書を求む。師即ち「いろはにほへと」の歌を十二枚に大書すと云ふ。

新潟町館屋萬藏といふもの、師の書を信じ其の家の招牌を書き貫はんことを欲し、一日紙筆を携へて師を追ひ、地藏堂の驛某の家にて師に逢ひ、懇願してつひに其の所欲をかなへしと云ふ。師此の日人に語つて云く、吾今日厄に逢へり云々と。余今年新潟を過ぐ、其の家なほ禪師の招牌をかゝぐ。當時を追想して獨徘徊したりき。

盜あり、國上の草庵に入る、一物の盜み去るべきものなし。密に師の臥蓐をひきて奪はんとす。師寢て知らざるものゝ如くし、自ら身を轉じてなすがまゝにまかしたりきといふ。

醫師正貞と云ふもの(原田正貞)あり、師に問うて曰く、吾金を欲す如何にせば金を得べきかと。師曰く、業を勤めて人の手元を見ることなかれと。更に他の人同じき道を問ふ。師答へて曰く、金を

人に借ることあらば其の期をたがへずに返すべしと。

師余が家に信宿を日し重ぬ。上下おのづから和睦し、和氣家に充ち、歸り去ると雖數日のうち人自ら和す。師と語る事一たびすれば胸襟清きを覺ゆ。師更に内外の經文を説き善を勸むるにもあらず、或は厨下につきて火を焚き、或は正堂に坐禪す。其の話詩文にわたらず、道義に及ばず、優游として名狀すべき事なし。唯道義の人を化するのみ。

師嘗て日蓮宗の家に宿し看經せしに、家人袖をひきて頻りに止めよと云ひしと、師みづから語られしことありき。

師が平生の行狀詩歌中に具在す。今又こゝに贅せず、たゞ其の逸事を録するのみ。師一生奇行異事の人に云ふべきなし。唯一事あり。そは師死して後、棺に納め日を重ぬ。尼某來り、哀痛の情に堪へず、一たび死者の風姿に接したしと哀願す。人々止むことを得ずして棺を開き見しに、頂骨不傾嚴として生けるものゝ如かりしと云ふ事之れなり。

師神氣内に充ちて秀發す。其の形容神仙の如し。長大にして清瘦、隆準にして鳳眼、溫良にして嚴正、一點香火の氣なし。余塔高くして宮室の美を知ることなし。今其の形容を追想するに當り、一の似たる人を見ず。鵬齋曰く喜撰以後此の人なしと。

師嘗て余が里觀照寺にありしことありと雖、余幼くして知らず。

坡丈と云ふものあり、俳諧歌者なり。自ら拙書を數す。師之れを聞いて曰く、妍媸に心を勞するこ

となかれ、書自ら成らんと。坡丈之れより字を書くに易きを得たりしと。其の徒若水語る。

師初め他州に雲水し、後國上の五合庵に住し、又同村乙子の宮の庵に住む。老いて後島崎の里能登屋某と云ふものゝ家の後ろに住む。蓋し國上を去りしは薪水の勞を厭うてなるべし。

土佐にて江戸の萬丈と云へる人師と一宿を共にせしと、その時のこと萬丈の筆記にあり。

此の數條思ひ出づるにまかせて筆記す、年歴次序なし。

師佛に入るその初めは如何なる故なるを知らず、釋遍澄に問ふべし。

笱盜の話

イマシメ玉

歌詩の語

見義所持屏風の話

文臺先生とはれし話

鵬翁贈答の詩歌

水原角楚の話

『良寛禪師奇話』の最後はかくの如く題目だけを七つ並べてあるまゝに終つて居るが、筆者は後日なほ書きつゞける爲めの用意にこんな事をして置いたのだと思はれる。

良寛の眞生命

云ふまでもなく、良寛は一個の隱遁者であつた。しかも北國邊土の一隅に彼自身の所謂「山かげの石間をつたふ苔水のあるかなきかに」生れ且死んだ一個の心身脱落者に外ならなかつた。極端に云へば、彼の如きは實に一個の憐れむべき敗殘者、爲すなき逃避者に過ぎないのである。而もなほ斯の如き韜晦的、隱遁的、回避的生活裡に没頭してゐた彼の如き人格と其の藝術とが、今日の吾々の心胸にしかく切實なる響を傳ふると云ふのは、そもくこれ何故であるか。

檻樓又檻樓、々々生涯、食裁取路邊、家實委藥菜、看月終夜嘯、

迷花言不同、自一出保社、錯爲箇鴛鴦。

生涯懶立身、騰々任天真、囊中三升米、爐邊一束薪、誰知迷悟跡、

何問名利塵、夜雨草庵裡、雙脚等閑伸。

夕顔も絲瓜も知らぬ世の中はたゞ世の中にまかせたらなむ

霞立つながき春日を子どもらと手まりつきく今日もくらしつ

「焚くほどは風がもて来る落葉かな、一見何と云ふたはけ方であらう、何と云ふ退嬰的生活であらう。しかも、かうした人格が、今日——此の進歩的な、發展的な、奮闘的な、積極的な、進取的な、

活動的な趨勢の高潮期にあると稱せられる今日に至つて、特に驚くべき多くの讚嘆者を得つゝあると云ふのは、全く何と云ふ不思議な矛盾であらう。

今日良寛の光輝がしかく廣い世間に認められるに至つたのは、良寛その人の人格は兎に角その詩と歌と書との非凡な力によるものであると思ふ人があるかも知れない。しかし、彼みづからは「自分に三つの嫌ひなものがある、それは詩人の詩、歌人の歌、書家の書、及び料理人の料理である」と云ひ、又「孰謂我詩詩、我詩是非詩、知我詩非詩、始可與言詩」と云つてゐる如く、良寛の藝術は決して普通人の所謂藝術ではなかつた。彼れの藝術は——詩も歌も書も——凡て之れ良寛その人の人格の表現に外ならなかつたのである。良寛の詩も歌も書も、凡てかれの人格と生活とを外にしては、到底あり得なかつたところのものである。随つて、良寛の藝術に對する尊崇は、同時に良寛その人の人格と生活とに對する尊崇でなければならず、彼れの藝術から受けるところのものは、悉く彼の人格と生活とから受けるところのものに外ならぬのである。

こんな風に考へて來て更に今日の如き所謂活動的、奮闘的、進取的な社會に於て、良寛の如き極端に無爲な、逃避的な、退嬰的な人格と其の表現としての藝術とが、しかく異常な讚嘆を博しつゝある現象について考へると、吾々はあまりにその矛盾の甚しいのに驚かないではゐられぬのである。しかし、これは決して單にかの土中に永く隠されたる寶玉が偶々或機會に於て發掘せられて、突如人目を驚かすと云ふやうな偶然事と同一に論すべき事ではなくして、極めて必然的な、極めて内的な意

義の根柢を有する極めて貴い事柄に屬しはしないだらうか。良寛のその如き人格乃至藝術が、現代の如き社會に於て一層その光輝を増し來ると云ふ事は、まことにこれ謂ふところの「無用の用」に外ならぬ。而も此の「無用の用」の奥に吾々は現代の生活そのものにとりての最も重大な何ものかの暗示を探り得ないであらうか。そも／＼現代の人心が良寛に求むるところのものは何であるか。良寛が現代の人心に與ふるところのものは何であるか。此所謂「無用の用」の根柢に嚴として存する何ものかの意義を——其不可説の意義を獲得することが、私達にとりては更に／＼重要な一大事ではないだらうか。云ふまでもなく良寛は一個の僧であつた。しかも彼は決して謂ふ所の救世者でもなく、説教者でもなかつた。彼の世に出たのは、かの所謂田沼時代を以て稱せられる徳川幕府政治の腐敗の殆ど絶頂に達した時であつた。社會生活の狀態から云つてもかの文化文政期前後の人心の頹廢その極に達したと云つてもいゝ時であつた。而も一方に於ては斯くの如き時勢に處すべく餘りに清きを愛し、正しきを受する少數の人々がなくてはならなかつた。而して夫らの人々の或者は謂ふ所の勤王の志士となり身命を犠牲にして革新の任に當らうとした。彼の父以南の如きも正に其一人であつた。又或者は聲を大にして人道を叫び、正義を説いた。更に又或者に至つては自らの弱さのあまり絶望的自棄に墮し、世をも身をも冷眼視し、市井裏に隱遁して茶化嘲笑のうちに一生を終つた。わが良寛も亦かくの如き少數の清く正しき人の一人であつた。しかも、彼は出で、戰ふべくあまりに弱く、冷眼を以て笑ふべくあまりに温かく且純であつた。弱かつたが故に彼は身を退けた。しかし、それと同時に彼は

温かゝつたが故に、世を忘れ生を忘れることは出来なかつた。かくて、一旦はたゞひとへに世を逃れ身を退けた彼も、いつとはなしに世間の墮落に對する嘆きと人生の無常に對する悲しみに動かされ、救世の大願を以て立ち、衆生濟度の理想を以て動くやうになつた。けれどもさうした道を進むに隨つて、再び彼はみづからの弱さの爲めの苦しみと悩みとをます／＼激しく感じないわけには行かなかつた。そして幾度か起ち、幾度か躓いた果に、彼はつひに一切を否定し、あらゆるものに對して空觀をいなくより外に仕方なき境地まで行つた。しかもその一切否定のどん底から、彼の前に始めて廣大な天地が開けた。弱きに徹して彼は強さを得た。一切を否定するによつて彼は始めて自己の生の無敵を知り、自己の生に對する本當の愛着を感じた。外に向つて居た彼の眼は、爾後専ら自己の内部に注がれるやうになつた。世を救はうとしてゐた彼は、一轉してたゞひとへに自分一個の救ひを求めた。自分一個の救ひ——それが同時に萬人の救ひであると信する彼となつた。自分一個を生かすこと——それが同時に萬人を生かすことであると信する彼となつた。佛典の所謂「人自ら意を伏すること能はずして反つて他人の意を伏せんと欲す、能く自らの意を伏せば他人の意おのづから伏すべし」(三慧經)——その道へ彼も進んだ。かくて一切否定は同時に一切肯定であつた。凡てから離れることは、同時に一切を得ることであつた。彼はつひに凡てを失うて凡てを得るの道に進んだ。かくの如くして極めてうぶな、極めて自然な心持で營まれたのが、實に良寛の一生であつた。

世を捨て、身を救ふ人もますものを草のいほりにひまもとむとは

墨染のわが衣手のひろくあらばまづしき人をおほはましものを。

時にはかう自らを責める事があり、又時には農家の繁忙期に自ら農夫作業の圖を畫いてそれを床に懸け供養禮拜怠らなかつたと云ふ程に自らを責める事であつた彼ではありながら、しかも根柢に於て彼の心は安らかに彼をして彼みづからの道を歩ませたのであつた。

随つて良寛は決して世の所謂宗教家ではなかつた。各宗に互つてあれ程學問の競起した時代はないと云はれるのが、良寛當時のわが佛教界の状態であつた。又各宗に互つてあれほどの政府の優遇を受け、あれほどの権力を持たされた時代はないと云はれるのが、その當時のわが佛教界の状態であつた。しかも、かくの如く宗門や寺院や、教權の勢力の盛大であつた時勢に生れ合せながら、わが良寛はさうした傾向とは全く反對な中古的とも稱すべき隱遁獨行の道へと進んだのであつた。

我見講經人、雄辯如流水、五時與八教、說得太無比、身稱爲有識、

諸人皆作是、却問本來事、一個不能使。

佛教十二部、部々皆淳眞、東風夜來雨、林々是鮮新、何經不度生、

何枝不帶春、識取此中意、莫強論疎親。

かうした自由な天地に探り入つたのが良寛の求道であつた。隨て彼が生涯親しく出入してゐた家は、神道、日蓮宗、淨土宗、眞言宗等殆んどあらゆる宗旨を網羅してゐると云つてもいゝ程であつた。彼には宗旨の別などは眼中になかつた。人々も亦自家の宗旨などを別にして彼を尊崇した。それはなかつた。

は彼が禪宗に屬しながら淨土眞宗の家で死に、同じ宗旨の寺に葬られてゐる一事でも知られるのである。而してかくの如く宗旨の別などを眼中に置かなかつた彼は、同時に何人に向つても宗義を談じたり、經典を講じたり、法を説いたり、道義をすゝめたりするやうな事は、殆んどなかつたと傳へられてゐる。此の點の如きは、良寛が最も鮮かに、世の所謂宗教家と選を異にしてゐた點である。良寛は實にかくの如く他人の前に經を讀まず、法を説かず、道を談ぜざる點に於て、謂ふところの宗教家ではなかつた。

けれども、今日なほ傳へられるところの多くの逸事逸話の示すところによつて明かなるが如く、良寛の生活はかの鈴木文臺の言の如く實に「かの道德の深遠の如きは我徒の窺ふ所にはあらざるなり」と云ふ程度まで到入してゐたのである。而して彼の赴くところ常に不可思議な道德的感化の及んだ事が、今日なほ歴々として窺ひ得るのである。破笠衲衣の一貧老僧が飄然として去來するところ、到るところの町、到るところの村、到るところの家、そこには常に不可思議なる和らぎと歡びとが薫風の如く漂うたと云ふ——これは又何たる奇蹟に似た事實であらうぞ。

而もその人みづからは實に弱き自己に徹して、ひたすらにおのれ一人の救ひを求めてやまなかつた、むしろ憐れむべき一個の隱遁者に外ならなかつたではないか。而してその人の今日私達に遺した藝術の凡てと雖も、正にさうした生活、さうした人格そのものゝ表現に外ならぬのではないか。「彌彦神社附國上と良寛」の著者小林繁樓氏は云ふ「彼れ曾て法華の序品に題した曰く「如是兩字高着

眼、百千經卷在這裡」と……（中略）……近代の碩徳原坦山は良寛の此頌に對し矍然として「我朝佛學の蘊奥を究めしもの空海以下唯此人あるのみ」といふ、眞に潦倒者にして始めて潦倒者を知ると言ふべき也」と。更に云ふ「要するに彼れは『如是』の稱僧のみ、彼を説明するには當年の彼自身ならざる可からず」と。果して然るか、果して然るか。

併し私は重ねて自ら問はう。現代の人心は良寛に向つて何を求めなければならぬか。そもく又良寛が現代の人心に向つて與ふところのものは何であるかと。

附 録

良寛遺跡巡り

大正六年七月九日

午前九時四十五分、魚川愛の汽車で、私はいよ／＼良寛遺跡めぐりの旅に上つた。雨あがりの空は氣持よく晴れ渡つて居た。北日本アルプス連山の雪をいたゞいた頂も、今日は一きは空高く聳えてゐるやうに見えた。近く突立つた山々まで、今日は何だか思ひ切り背伸びしてゐるやうに見えた。海も至つて穏やかであつた。海の方から汽車の窓へそよ／＼吹き込んで来る風が、かなり永い間身に立ち籠もつて居た悪暑さをからりと拂ひ去つてくれたやうに思はれた。私の心全體に静かな興奮が漲り渡つた。

午後一時何分かに柏崎驛で私は近頃全通したばかりの越後鐵道に乗りかへた。こゝから先は私には全く未踏の地であつた。海に沿うて幾重も重なつて長く／＼續いた小山つゞきと云つても好いほどの高い砂丘、その砂丘一面に幾里もの廣さに亘つて林をなしてゐる枝ぶりの奇怪な黒松、汽車の進行につれて時々それらの砂丘の一寸した絶え間からチラリ／＼と見える海の色、所々に群をなして高く突立つてゐるロータリー式の石油槽——さう云つたやうな風致を示してゐる中越地方の自然は、同じ越後の國に生れ育つた私にも、妙に異國的な感じを興へた。此のあたりからはもう頸城地方で見るやうな高山は見えないで、樹木の多い小山のつらなりが到るところで

狭い平地の眼界を遮つてゐた。

やがて私の耳に「出雲崎」と云ふ譯の名を呼ぶ聲が一種特別な響きを興へた。私は慌てゝ立ち上つて窓をのぞいた。出雲崎と云へば、良寛出生の地として私の久しく想像に描いて居たところであつた。初めの計畫では、此の旅行で第一に立ち寄るべきところは此の町であつた。しかし、つい近頃此の町は火災に罹つて中央部が燒けてしまひ、町のうちがまだ何かと／＼してゐると云ふので、此の町へ立ち寄ることはやめにしたのであつた。

停車場の光景には他と比較して何等の變化のあつたのではないが、私の胸にはたゞならぬ波動が感じられた。停車場のうしろはすぐ樹木の多い小山になつて居て、かなり廣い道がその裾をめぐつて通じてゐた。出雲崎の町はその小山を越えて、更に一里近く道のりを隔てた海岸にあると云ふことであつた。私はすぐ私の眼の前に立つてゐる小山の彼方の日本海を想像した。その岸に沿うてつくられた小さな港町の燒跡を想像した。その町から望んだ佐渡の島山の眺めを想像した。「佐渡と出雲崎やすぢかひ向ひ橋をかけたや………」と昔から歌ひ傳へられた民謡がおもひ合はされた。「荒海や佐渡に横たふ天の河」と此の地で詠んだ名高い芭蕉の句もおもひ合はされた。

たらちねの母がみ國と朝夕に佐渡がしまべをうち見つるかな

垂乳根の母のかたみと朝夕に佐渡の島根をうち見つるかな

いにしへにかはらぬものはありそみどむかひに見ゆる佐渡の島なり

天も水もひとつに見ゆる海の上に浮び出でたる佐渡が島山

かうした良寛その人の歌もおもひあはされた。そして出發する前から私の内部に漲つてゐた靜かな、嚴肅味を帯びた一種の興奮——此の旅の目的に伴うた心の興奮が、刻々に熱度を加へて行くやうに感じられた。そしてその心の興奮は、汽車がいよ／＼私の目ざす西蒲原郡の平野——私はこれまでにこんなに平らな廣い土地を見たことがない——へ出て、突如としてその平野の入口の、すぐ眼の前に高く聳え立つた彌彦山の端麗な姿を望んだ刹那に、われながら不思議なほどの高調に達した。全國にたくひの少ない此の平野の門戸に、しかも日本海の岸近くに巍然として立つて居る此の山は、まったく何と云ふ端麗な姿を備へてゐることであらう。その輪廓をなしてゐる線は、何と云ふ柔かみと温かみを持つてゐることであらう。

「ももつたふいやひこやまを、いやのぼりのぼりて見れば、たかねにはやくもたなびき、ふもとにはこだちかみさび、おちたきつみをとさやけし、こしちにはやまはあれども、こしちにはみづはあれども、こゝをもうべしみやると、さだめけらしも。」

かうした良寛の嘆美は、したしく其の山に登つた者でなければわからぬが、しかし私にはむしろかうして平野から仰視した其の山の風姿が、太古このかた此の土地に住む多くの人の心を引きつけたのではないかともおはれた。かうした彌彦山の英姿に見入つてゐた私の眼は、やがてその山と相並んで立つたゆるやかな圓味のある輪廓を持つた、それよりはつと低い、しかし矢張高山の趣を備へた他の一つの山に轉じた。それが即ち良寛の最も永く住んでゐた庵の跡のある國上山であつた。

「あしびきの國上の山の、山かげに庵をしめつゝ、朝にけに岩の角みち、踏みならしい行きかひらひ、まそかどみ仰ぎて見れば、み林は神さびませり、落ちたきつ水管さやけし、そこをしも綾にともしみ、春べには

花咲きたてり、阜月には山時鳥、うちはふり來鳴きとよもし、長月の時雨の雨に、もみぢ葉を折りてかざして、新玉の年の十とせを、過しつるかも。」

時にかう歌ひながらも、なほ且心の奥ふかく限りなき寂寥と悲哀とを藏してゐた五合庵時代の良寛、「老軀多病薪水に便ならざるの故を以て」と傳へらるゝ理由の半面に蔽はんとして蔽ひがたき人間のなつかしさを以てして、しかもなほ全く人里の裡に下り得なかつた乙子湖畔小庵時代の良寛——さう云つたやうな故人の佛をさまざまに心に描きながら、私は西日の光のまぶしく射し込む汽車の窓にもたれて、しみ／＼と其の二つの草庵の遺跡を持つた山の姿に眺め入つた。彌彦山を眺めた時私の心に感じられた神々しさの感が、今かうした國上山を望むに及んで、いつしかそれは人間的な懐しみの感じと變つてゐた。私は又その山の裾をめぐらしてゐる小山のつらなりをも見た。更に又その山を起點として前面に展開された平坦々たる緑の平野を眺めまはした。その平野のそちこちに散在する森や村を眺めた。私の心にはいつしか彼の山と此の平野との間を、いつもたゞ獨りでさまよひ歩いてゐた一人の老隠者の衲衣破笠のさびしげな姿が描かれてゐた。

良寛がいほりの跡のくがみ山仰ぐわが目にしむ涙はも

たゞこゝまで来て私がやゝ意外に感じたことは、彌彦と云ひ、國上と云ひ、角田と云ひ、又それらの高い山の麓をめぐつてゐる小山と云ひ、凡ての山の輪廓の線の感じが、私の郷里附近のそれとはちがつて、北國の山とは思はれぬほどの柔かみを持つてゐること、眼前に展開された平野の感じが底に云ふばかりない淋しみを藏してゐるらしくして、しかも見渡したところ稀な穏やかさと豊けさを示してゐること、北國と云ひながら北に高い山——彌彦、角田、國上皆然り——を持つて居り、隨てそれらの山の面がいづれも日に向つてゐることなどであつた。

私はこれらの特色のうちに、不思議にも一種の南國味の加味されてゐることを思はないでは居られなかつた。そしてそれと同時に私は嘗てある人が良寛の書を讚美して日本海の怒濤の気分を持つてゐることを云ひ、又ある人が良寛の性格のうちに同じくさうした要素の多分にあることを云つたのを讀んだ場合に感じた私の疑問が、今かうして目のあたり此の地の自然を見るに及んで幾分解決の緒を見出したやうに思はれた。

こんな事を感じたり、考へたりしてゐるうちに、汽車は私がこゝ暫くの宿りを求めることになつてゐる巻町に着いた。そして私はこの度の旅行の目的に向つての最も力強いたよりとしてゐる松木徳聚氏を其の假寓たる越中屋と云ふに訪ねた。早速旅装を解いてしばらくさまよひの雑談を取交はしてゐたが、いつの間にか話は良寛のことに移つて行つた。そして私が湯に入り、松木氏と共に夕食をしたためてゐるうちに、もう此の家の主人は良寛の詩稿を表装して小さな掛物としたものを持ち出して床にかけてくれた。それは『圓通寺』以下數篇いづれも私の記憶に存してゐる旅の詩を楷書の細字で書き列ねたものであつた。そんな事で話はます／＼佳境に進んだ。しまひには宿の主人も一緒に話して話した。松木氏とはずつと以前から幾度となく良寛についての話を取交はして来たから左程驚きもしなかつたが、宿の主人の熱心にはひどく驚かされた。宿の主人はこんな事を云つた。「良寛さまのことなら——此の邊の者は大概良寛さま、良寛さまと云ひます。良寛と呼び捨てにする者はありません……此の邊の者は誰でも知つてますし、又何かにつけて良寛さまについての面白い話をしたものです。尤も詩とか歌とか書とかについての知識は別ものですがね」やがて同じ家を假寓としてゐる此の郡の觀學の稻葉氏と云ふ人がやつて来て、矢張りいつの間にか良寛談の仲間入をした。

「良寛禪師の感化は實際意外なほどですが、しかし若い者なんかには「焚くほどは風がもて来る落葉かな」と云ふあの有名な句を、妙に曲解して自分達の都合のいゝ口實に使つてゐる手合もありますよ」

これは稻葉氏の話であるが、教育者はさすがに教育者らしい觀察をするものだと思はないでは居られなかつた。宿の主人は所々出あるく機會の多い自分の道楽半分の商賣を持つてゐるので、所々で聞いて来たさまよひの逸話を知つてゐた。それをつぎ／＼に思ひ出すまゝ私に話してくれた。中には随分牽強附會らしい話もあつたが、それでもかなり興味深い事實談らしいものもあつた。わけても面白いと思つたのは文化七年に江戸の龜田鵬齋が國上山の五合庵を訪ねた時の話であつた。鵬齋は随分永く越後に居たと云はれる。そして彼の草書は良寛について學んだものだと言はれる。彼が國上山の五合庵を訪れたのは、或る秋の晴れた日であつた。折からの秋景色を賞しながら、彼はたゞ／＼と國上山の山坂をのぼつて、良寛の庵に着いたのは日くれ方であつた。幸ひ良寛は庵に居た。そして鵬齋の姿を見ると早速大きな襦袢を一つ持ち出して来た。鵬齋はひどく不審に思つて、その襦袢を何にするのだと訊ねた。良寛はお前様は大分足が汚れてゐる様だからで洗つてはどうだと云つた。「之は襦袢ではないか」と鵬齋が云つた。「襦袢にも使ふが足を洗ふ事も出来る、何しろこゝには之より外に何もないのでからで洗ひなさい」と良寛が答へた。鵬齋はやむを得ず其通りやつた。それから内へ上つていろ／＼と話をした。鵬齋はやがて酒が飲みたくなつたと云つた。良寛はこゝには酒の有り合せはないが、麓の村まで行けばあるから買つて来ようと云つた。鵬齋はそれは大變だと思つたが、矢張飲みたいので、それでは買ひに行つて来て下さるか云つた。良寛はよしとばかりに古びた徳利をぶら下げて出かけた。鵬齋は一人居残つて待つてゐたが、そのうち日が全く暮れて、いつしか月が高く昇る時刻になつた。初めのうちこそ何でもなかつたが、時刻

がたつにつれて鵬齋はたまらない待ち遠しさと、つひにはやりどころのない淋しさをさへ感じ出した。しかし、いくら待つても良寛は歸つて来なかつた。鵬齋は堪へ切れなくなつて草庵を出てあたりをぶら／＼歩きながら月でも眺めて、せめて心をまぎらさうとした。と、見るともなく見ると、とある大きな松の根元に人間らしい者の居るのが目に留つた。いくらか薄気味悪く思つたが、鵬齋はその方へ近寄つて行つた。そしてよく見るとそれは良寛その人で、丁度松の根元に腰を下ろして、しきりと月を眺めて居るところであつた。鵬齋はいきなり「そこに居るのは良寛さんぢやないか」と訊ねた。その聲に應じて良寛は「どうです、いゝ月ではないか」とさも感じ入つたやうに云つた。しかし鵬齋はそれには答へずに「酒はもう買つて来たのか」と訊いた。ところがそれを聞くと同時に、良寛は弾ね出されたやうに立ち上つて、地べたにころがしてあつた徳利を取り上げるや否や「や、忘れて居た、これから行つて来る」と云つて駆け出した。

宿の主人から聞いた話に今一つ面白いのがある。それは松野尾と云ふ村の館屋某が持つて居た良寛の書の二幅對の掛物についての話である。その館屋へは良寛は時々遊びに行つたと云ふ事だ。ところがある日館屋の主人は良寛に向つて揮毫を求め、更にあなたの字はむづかしくて誰にも解らんから今日は解るやうに書いてくれと云ふ註文を出した。良寛は「よし／＼」と云つた。そしていよ／＼書いてくれた字を見ると、それは「一二三」と云ふのと、「いろは」と云ふの二枚であつた。書き終つてから良寛は云つた。「これなら振假名をしないで解るだらう」と。此の二幅對の書幅は、今では同じ村の山賀五兵衛と云ふ人が秘藏してゐるとの事である。

七月十日

朝早く松木氏に連れられて、私達の宿のつい近くに住んでゐる此の郡の郡長小山龍作氏所藏の良寛の筆蹟を見せてもらひに行つた。詩を書いたのも數點あつたが、中で最も珍らしく感じたのは自畫自賛の布袋であつた。良寛の畫は幾つもあると云ふ事を前から聞いてゐたが、私の見たのはこれがやうやく二つ目であつた。畫はどり立てゝ云ふほどのことないが、その布袋の畫は良寛の面目の羅如としたものであつた。他は惠比壽大黒が地上に坐つて話をしてゐる誰れかの畫に賛をしたもの、この賛も特色的なものであつた。その日は又同じ町の内木氏所藏の三四點をも見せてもらった。いづれも詩で、しかも詩集中に收められてあるものであつた。

此の日も到るところで良寛の逸話を少なくとも二つ三つ位づゝ話された。さほど耳新らしいものはなかつたが、話す人はいづれも皆眞面目な態度で、しかも深い興味を以て話す一事は、今更ながらうれしく且ゆかしい事に思はれた。

七月十一日

此の日は終日他に忙しい用事があつた爲めに、良寛に關する話を聞く事も出来ず、又筆蹟を見せてもらふ機会もなしに過ぎた。

七月十二日

朝新潟へ行き、舊友齋藤樹蔭、藤井落葉二氏を訪ね、初めて此地の歌人小金花作氏に遇ひ、午後熱心な良寛研究家として古くから其の名を知られた小林二郎翁を訪ねた。越後に生れて新潟の地を踏んだのは今回が初めて

ありながら、私の心はたゞ一寸ちに小林翁の許にのみ走つてゐた。齋藤氏に伴はれて翁の家を訪ねると、幸ひ翁は在宅中で、既に興板町の藤井界雄師からの紹介もあつたと喜んで私を迎へられた。うち見たところ翁はもう八十近い高齢のやうに思はれたが、體格はいかにもしつかりして居られ、顔面には稀に見る福徳圓滿の相を備へて居られた。先づ階下の茶の間らしい一室に案内されたが、その部屋へ入るや否や良寛のかの有名な

鉢のこをわがわするれどとる人はなしとる人はなし鉢の子あはれ

の一首が額に仕立てゝ高く掲げてあるのが私の眼にとまつた。やがて階上の客間へと招じられたが、そこには眼にとまるもの悉く良寛と云つてもいゝほど多くの筆蹟が、或は額とし、或は柱懸けとし、或は軸物としてかけ集められて居た。それらの筆蹟について一々翁の説明を求めた上で、私は翁が良寛研究を始められてから幾年ぐらゐになるかを訊ねた。翁は小さな聲で「もう四十年あまりになります」と答へられた。やがて翁はどこからか良寛の筆蹟の複寫を二枚取り出して来て、これを上げますと云つて差し出された。一枚は巻紙幅に載つた唐紙に刷られた良寛の書翰であつた。そしてその文句は次の如きものであつた。

「地しんは信に大變に候野僧草庵は何事なく親るる中死人もなぐめで度存候

うちつけに死なばしなずてながらへて

かゝるうきめを見るがわびしさ

しかし災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候死ぬ時節には死ぬがよく候是

はこれ災難をのがるゝ妙法にて候

かしこ

山田杜阜老

興板

今一枚の方は楷書で謹んで書いたものらしく、文句は佛遺教中から日常生活の心得を抜き書きしたもので、最後にそれを勸奨した良寛自身の言葉が添へ書きしてあつた。小林翁の話によると、これは以前翁が秘藏されてゐたのであるが、後大阪の某氏の懇請にまかせて譲られたもので、今ではその大阪の某氏が堂を建てゝそれを納め守り佛のやうにして居られるとの事であつた。

それから翁は手づから秘藏の良寛筆蹟をつぎから次へと數十點の多くを出して見せられた。そして一つ毎に翁自身情味のある聲で朗吟して聞かされた。詩、長歌、短歌、殆んどあらゆる種類のものがあつた。私は翁の感興に堪へないと云つた風な様子と、良寛の筆蹟とを見比べながら、たまらない感激に撰たれた。ある時には我知らず眼のうるむことさへあつた。わけても

「よひ／＼に霜はおけどもよしゑやしあらはとけぬとしのはに雪はふれどもよしゑやし春日にきえぬしかすかに人のかしらにふりつめばつみこそまされあられたまのとしはふれともきゆとはなしに」

の一首を朗吟された時の小林翁の顔面には、何とも云つて見やうのない情感の現れがあつた。
みづとりのかものは色のをやまのこぬれさらずてなくほとよぎす
さよなかにほらふくおとのきこゆるはをちかた里には(火)やのぼるらし